ミラン城の投降に先づたこと十日、佛蘭西の元帥トリヴルチオはミラン府に這入つた。歡迎の鐘は鳴り渡り、市民は歡呼の聲を揚げた。そしてルヰ王の入府は十月六日と定まつたので市民はこれが奉迎の準備に着手した。五十年前アンブロジアナ共和國と云つた頃自由を表現する爲めに造つた天使の巨像二箇を、王の行列に使用するため大伽藍の寶藏から取り出した。併し久しい間使用しなかつた事とて金箔を置ける其の翅を動かす撥條は强ばつて利かなくなつてゐたので、二箇ともに宮廷機械師レオナルド・ダ・ヴィンチの許に送つて修覆を乞ふことにした。

秋の某の日、夜が明けずに未だ暗い時レオナルドは机に向つて坐して精々と計算と幾何學の圖形とに着手してゐた。此の頃空中飛行學の研究を再び始めて別に飛行機を一臺製造してゐる最中なので、骨組みは既に出來上つて牀から天井に掛けて室内に擴がつてゐた。これは以前のやうに蝙蝠に似たものでなく大きい燕の形に出來て、一枚だけ完成してゐる翼を見ると、鋭い輪廓を取つて形纖細に、形狀と云ひ組織と云ひ共に美しい。そして此の翼の蔭でアストロは前ミラン共和國が作つた兩天使の木像を修覆してゐた。レオナルドは此の度の飛行機を出來るだけ精緻に鳥類の體制に模して見ようと決心したが、これは蓋し飛行機の模型に宛てるため自然は鳥を準備したからであつた。そして詳細に機械學の法則を考察すれば飛行の問題は自ら解釋が付くものと舊に依つて期待してゐたが、然も知り得る限りは知悉したやうに思ひながら、何か知ら理解力の及ばない物があつて、且つ其の物は多分自分が通曉せる法則の範圍外に存するやうな氣がした。初め飛行機の實驗を試みた時と同樣、自分は微妙な分離線――自然が生んだ物と人間の手が作る物との區別をなし、生物體の構造と無生物の機械とを相分つ其分離線に違反して仕事をしてゐる事を發見して、自分は不可能、不合理を目的としてゐるのだと考へ始めた。

其の途端アストロは『難有い仕事は出來上つたぞ！』と叫んで天使の木像の撥條を捲いた。天使の重い翅は動いて、其の結果空氣が一搖り搖れたゝめ大飛燕の精巧な翼は動いてバタバタと音を發した。それを見た鍛工アストロは名狀し難い愛着の情を示した。

そして天使を側に押し遣つて『斯んな下らない化物のために私は時間を費したのだ！先生、今後あなたは何とでも勝手に仰有るが宜しい、私は燕を仕上げる迄は決して此の室から一歩も踏み出しません！何うか先生、尾の圖面を下さいませんか。』

『尾は未だ出來てはゐない。尙だ計算が要るのです。』

『だつて先生が約束なすつてから今日で三日になります。』

『それは已むを得ませんな。燕の尾は言はゞ舵です。些少の錯りがあればそれで以て全部が

駄目になるのだから。』

『兎に角此の事に就いては先生は最も好く御存じだと思ひます。私はこれから今一枚の翼に着手します。』

『最つと待つ方が好い、屹度改良を要する點があるに相違ない。』

と聞いてアストロは深い注意を拂つて籐の骨組みを持ち上げ、牛の腱を網の目のやうに織つたのを被せてから殘る隈なく檢めて、興奮して戰慄しながら重たい聲で叫んだ——

『先生、怒つては可けません、まあ私の言ふ事を聞いて下さい。例令先生が計算をなさつた結果、今度の機械も又役に立たないといふ結論に達しましても、先生、此の私は誓ひます、斷じて飛行すると誓ひます。然うです、實に憎い先生の機械學が何うであらうと私は斷じて飛行します。これ以上待つ事は出來ません、何故と申しますに……』

と言ひ掛けたがそれなり突然默り込んだ。レオナルドは形の整はない、だゞつ廣い、そして强情つ張りな顏を凝と眺めた。其の顏には意義のない、そして一切の物を吸收せる唯一つの思想が印刻されてゐた。

『先生』とアストロは稍靜かに言つた。『私らは飛行するのかしないのか、何うか判然それを言つて下さいませんか。』

レオナルドは事實を赤裸々に語り聞かす心になれなかつた。

『實驗しない間は判然した事は分らないが、兎に角飛行は出來るものと思つてゐます。』

『其の一言で澤山！それ以上訊くには及びません』と機械職工は手を拍つて言つた。『先生が飛行すると仰有れば既に飛行したも同樣ですから。』

そして忽然大笑した。

『一體何が可笑しいのです？』とレオナルドは訊ねた。

『御免なさい、先生！毎時も私は先生の邪魔をして可けない。併し先生、此のミランの憐れむべき市民、佛蘭西の軍兵、イル・モロの事、佛蘭西王なぞの事を考へると非常に氣の毒になつて思はず知らず噴飯するのです。憐れな腹ン這ひの小蟲、憐れな飛ぶ蟋蟀！始終同じ地劃に住んで、其の地面に足を繫縛されてゐる癖に、互に戰爭をしたり噬み合つたりして、それで以て一ぱしの大事を仕遂げた料簡でゐるのだから堪りません！で、若し生きた人間が飛行するのを見たら何んなにか凝視して垂涎することでせう。多分自分で自分の目を信じはしますまい。定めし(神が二人ゐる)と言ふことでせう。アストロが神樣になる！おゝ先生、世界はすつかり

ロ・プステルラは顔色青醒め焦立つて慌しく室へ這入つて來て祕書長カルコに何事をか囁いた。

『何か出來したのか？』と公は訊ねた。

誰一人これに答へなかつた。そして一樣に目を下に垂れた。

祕書は聲を震はせつゝ『陛下』と呼び掛けたが併し其のまゝ言ひ淀んだ。

『主よ、陛下を護らせ給へ』とルイギ・マルリアニは言つた。『御用意されませ、凶報が參りました、ミランから——』

『さ、言へ！言へ！是非言へ！』公は靑くなつて斯う連發しながら入口の方を見ると身體に泥が跳ね上つて旅で疲れた一人の男がゐたので、マルリアニを押し退けて足早に件の使者の方へ行つて其の手から書面を奪ひ取り、封を押し切つて颯と電光のやうと目を通すか通さぬに一聲呀と叫んで卒倒した。其の時早くマルリアニとプステルラは辛くも公を抱き留めて下に倒れるのを支へた。

サン・サチロ祭のあつた九月十七日、ミラン城の司令官ベルナルヂノ・ダ・コルテは君公に叛き、城門を開いて佛蘭西の元帥ヂアン・ヂアコモ・トリヴルチオを招き入れたのである。

イル・モロ公は策略上から氣絶の眞似をする事が巧みであつたが、今は種々と手を盡して漸つと息を復させたのであつた。公は再び正氣になつた時喟然として長歎して十字を描き低い聲で獨語した。

『ユダ以來ベルナルヂノのやうな謀叛人は未だゐないのだ。』

そして其の夜は一語をも發しなかつた。

數日の後公はインスブリュックに到着して皇帝の殊遇を受け宮城に起臥する事になつた。或る夜のこと、公は彼處此處部屋の中を歩いて土耳古の沙爾丹に派遣する密使に持參せしめる國書を口授しながら、それをカルコに書き留めさせてゐた。老秘書は顏面に注意力を漲らせ、スラスラと早く筆を運ばせて君公の口から洩れ來る語を紙上に寫し取つた。

『陛下に對し朕の堅固且つ不變なる好意を呈し(と信書に書き付けさせた)朕が失へたる領地を恢復せんがためオットマン帝國の强力なる統治者たる陛下の寬宏なる度量に訴へて救助を得候事と信じ候に依り三道より一名づゝ使節を派遣致し候、これ責めては一名たりとも安着して此の信書を陛下の膝下に捧呈せしむる爲に外ならず候。彼の羅馬法王の不信にして兇暴なる……』

變化するかも分りません。戰爭や法律は亡くなると思ひます、主人、奴僕も然うでせう。何んな風に變るか兎ても我々には考へが付きません！天使から成る唱歌隊のやうに天空へひら〳〵飛翔しますと人は皆ホザナ！と言ふでせう。お丶先生、レオナルド先生、實際然うなりませうか？』

彼は詭言を言ふ人のやうに物狂はしく右の言葉を發したのであつた。

『實に憐れむべき馬鹿者だ！』とレオナルドは心の中で考へた。『まあ何とした盲信だらう何が出來るものか！何うして此の男に眞相が話されよう？そんな事をすれば氣狂ひになるかも知れない。』

其のとき表の戸をドン〳〵大きな音で叩くのが聞えた。それに次いで騷々しい人の聲、そして書齋の扉を打つ音がした。

『斯んなに早くから何奴が來たのだ？』とアストロは呟鳴つた。『畜生、痕瘡にでも罹つちまへ！一體貴樣は何者だ？決して貴樣を先生に逢はせはせんぞ。先生はミランを出て行つて此處にはゐられないのだ。』

『私ぢや、アストロ。數學家ルカ・パリオリぢや！開けて呉れ、さ、開けて呉れ！何うか開けて呉れ！』

アストロは扉を開けて僧を室に入れた。老人の顏は恐怖のため靑ざめてゐる。レオナルドは何事ですと忙がはし氣に訊ねた。

『レオナルドさん、私ならば別條なし——否、別條はありますがそれは後程お話し致すとして、偖て私は唯宮城から來たのぢやが……お丶レオナルドさん、ガスコンの弓兵が……あれは疑ひもなく佛蘭西ぢや……此の目で見たのぢやから……ガスコンの弓兵はあんたの作つた騎馬像を毀してゐるのぢや。さ、駈足で行つて見ませう、駈足で！』

レオナルドの顏色も靑くなつたが併し老僧を制止して、『お靜かに！駈足で行つたところで何になります？』

『これはしたり、あんたの傑作が現に破壞されるのに、此處で手を束ねて坐つとるといふ法がありますかい？トレムーユ殿に宛ての添書を私は持つてゐまするで、是非あんたと二人で歎願せねばなりませぬ……』

『それも最早や間に合はないでせう。』

『否、否、時間ならば大丈夫。園の墻の緣を傳つて走つて行けば宜いのぢやから。さ、何は

兎もあれ大急ぎ！』

老僧に引つ張られるやうにしてレオナルドは宮城の方へ出掛けた。途すがらルカは自分の不幸を訴へたが、其の話に依れば酒に醉つた槍兵の一隊がサン・シンプリチアノ寺の僧房を襲うて打ち毀しを始めた。そしてルカの室屋にあつた水晶の幾何模型をば魔術に使用する道具に相違ないと思つて一つも殘らず粉碎して原子に歸せしめた。

『可哀さうではないかな、水晶の器具に何の科があります。模型は奴らに聊も害惡をなさなかつたのに』と僧は悲しんだ。

兩人は宮城の廣場の前まで來たとき未だ年若な佛蘭西の伊達男が數多の從者を引き連れて吊橋の上にゐるのが見えた。

『おゝジル殿がゐらつしやる！』とルカは滿悅して叫んだ。そして此の人々の事をレオナルドに說明して威權赫々たる重要人物で《鷁馴らし》の稱號を有し、佛蘭西王の鶯、鵲、鸚鵡、鵝なぞに歌を唄はせ、人語を發せしめ、踊り並びに其の他の藝を仕込むのが彼の職掌であつた。そして噂に依ればジル氏の笛に連れて踊る二本足の動物は啻に《鷁》ばかりではないとの事。疾くからルカは自分が著した《神聖なる比例に就いて》、《算術總論》の兩書を美裝して此の人に獻じようと思つてゐたのであつた。

レオナルドは言つた。『ルカさん、此の好機を逸しては可けないでせう。ジル氏の側へ行きなさい。私の事は何うにかして處置を付けますから。』

『いゝえ宜しい、宜しい』とルカは聊か羞恥の體。『私は待つてゐても宜しい……否それよりも今直ぐ一走りに行つて、ジル殿はこれから何處へ行かつしやるか訊いて、直ぐ其の足であんたに同道して歸りませう。さ、あんたはトレムーユ殿の方へ行きなされ。』

そして動作輕快なる老僧は茶色の衣の裾を絡げ、木履をカラ〳〵履いて、《鷁馴らし》の後を追掛けた。レオナルドは唯一人吊橋を渡つて宮城の內庭に這入つた。

四

朝霧が立つて警衞の篝火は早や消えてゐた。大砲、彈丸、天幕裝備品、厩舍秣量、屑物の類は庭に堆く、運搬に便なる小屋、料理の炙串、カルタ臺に用ゐる空樽、酒の大樽、それから食料品が塚を成して其の周圍にあつた。種々の國語は入り混つて哄笑、怒罵、口論で非常に騷々しく、冒瀆、醉叫、醉歌が聞えて來るが、時々士官が其處を通る事があるので、其の都度急に森

閑となつた。折々太鼓が鳴り、眞鍮の喇叭を吹いて、ライン並びにスワビアの槍兵隊に合圖を與へた。それからウリ、ウンテルワルデンの自由州から來てゐる傭兵は城壁の間からアルプスの角笛を吹いた。

人の群り、物品の群り、レオナルドは其の間を通り拔け、廣場の中央に出て見ると、渾熟せる技術を數年の間傾倒して勞作した幸福なる像は未だ其の儘になつてゐた。彼れロンバルヂーの征服者、偉大なるフランチェスコ・アッテンドロ・スフォルツァ公は依然たる禿頭を光らせ、依然羅馬皇帝の面影を留めて、其の容貌に獅子の殘忍と狐の狡猾とを表はし、雄々しい軍馬に跨つてゐる。そして軍馬は跳躍して敵の一兵を蹄の下に踏まへてゐた。

各國の弓兵は大きな群を作つて騎馬像を圍み、各自の國語で首を振手を振つて仕形話をしてゐた。レオナルドは佛蘭西と獨逸の弓兵の間に激しい爭ひが起つてゐると推測した。即ち彼等は大杯を四たび傾けてから、五十歩の距離に於いて大スフォルツァの頰にある黑子を射當てる事にした。そして歩を量つて籤を引き、先手に射る者を定めて酒を注いだ。獨逸の弓兵は波波と注いだ杯を一杯、一杯、又一杯、更に一杯を物の見事に飲み干してから狙ひを定め弓を絞つて兵と射たが、不幸、矢はスフォルツァ公の頰を掠め左の耳尖を殺ぎ取つたゝけであつた。今度は佛蘭西兵の番で、やをら彼は弩を肩に荷ふたが、丁度其の途端見物人は動搖めいて道を避け、一人の騎馬武者を警護せる綺羅びやかな從者の行列のために通路を作つた。騎馬の將軍は件の弓兵を意に止めずに通り過ぎた。

『彼は誰ですか？』とレオナルドは訊ねた。

『あれがトレムーユ殿ぢや。』

『トレムーユとは好都合だ、丁度間に合つた。是非あの人を追掛けて願はなくちや』とレオナルドは心の中で思つた。

併し心に然う思ひながらも無爲と意思の痲痺とに抑壓されて唯管凝として其處に立つてゐた、縱しや危險は生命の上に逼り來るとも一本の指をさへ動かしたくはなくて。僧ルカ・パチオリのやうに大官の後を追つて其の裾を引くために群衆の間を衝き進むのかと思ふと先づ嫌惡の念、羞恥の情を覺えた。其の時佛蘭西兵は矢を放つた。矢は空中を唸つて狙ひ過たずフランチェスコの頰の黑子をグザと貫いた。

『ビゴール！ビゴール！モン・ジョア！サン・ドニ！（モン・ジョア云々は合戰の際に發する叫聲である）と佛蘭西方の軍兵は叫びながら帽子を高く振つて、佛蘭西萬歳を唱へた。喧々囂

囂たる人の群は再び騎馬像を取り卷いて、多數の國語の缺舌は又々始まつた。そして競技を新に取極めて矢の數々は空中を鳴り渡つて偉大なる公を傷けた。レオナルドは身じろぎさへ出來なかつた。恐ろしい夢の中で一つ場所に根が生えて立ち竦んでゐるやうに、又此の事柄が到底人智を以て考へ盡せないものゝやうに、彼は自分の生涯中最良の六年を費して製作した藝術品――恐らくフィデアス、プラキシテレスに續く此の彫刻家が技術を傾けて製作した最も偉大なる記念像――が徐々に毀れ行くのを眺めてゐた。彈丸、矢、石礫は雨霰のやうに飛んだ、脆い粘土は塊片となつて崩れたり、濛々たる砂煙りとなつて毀れたりした。骨組みは露に見えて來た巨人像は鐵の一大骸骨となつた。雲間の後ろから太陽の光が流れ出た。後に殘つたのは首なしのスフォルツァ公、馬の軀幹、笏の缺片、臺座にある《此の神を見よ》の銘――これだけに過ぎなかつた。すると丁度其の時佛蘭西軍の指揮官にして老元帥たるヂアン・ヂアコモ・トリヴルチオが馬に乘つて其處へ通り合はせた。將軍は巨人像の場所に目を止めて非常に驚いたらしく、馬を停めてから手を目に翳して日光を遮つて再び眺めた。

『一體これは何うしたのぢや？』と將軍は從者を顧みて訊ねた。

『閣下、コックバーン大尉は部下の弓兵に許可を與へまして……』と一中尉は答へた。

『スフォルツァの記念像ぢや！レオナルド・ダ・ヴィンチが作つたのぢや！それがガスコンの弓兵の的になつたのか』と元帥は叫びながら群る兵士を目掛けて突進した。兵士は像を毀す事に夢中になつてゐるため元帥の憤怒が分らなかつた。老將軍は佛蘭西兵の襟首を掴んで地上に投げ付けて荒々しく罵つた。そして激怒の餘り顏色はすつかり紫色になつた。

『閣下！』と件の兵士は膝を動かして藻掻きながら恐れ戰いて口籠つた。『閣下、我々は知りませんので……大尉コックバーン殿が仰有つたので……』

『貴樣のコックバーンは地獄に墮ちろ！貴樣等は一人も剩さず紋殺して呉れる！』

そして劒を拔いて斬りに掛かるところをレオナルドはムンズと手首を押へた。眞鍮の欄は曲つた。

トリヴルチオは其の手を引き放さうと焦りつゝ非常に驚いて睨んだ。

『何者だ？』と元帥は立腹の體で叫んだ。

レオルナルドは答へた――

『レオナルド・ダ・ヴィンチ。』

『して何故あつて貴樣は敢て……』と老將軍は尙もブリ〳〵して呶鳴つたが、見ればすつき

りした目で自分の顔を凝と見据ゑてゐるので、言はうと思つた事を止めて言葉を變へた。

『え？君がレオナルドか？何うか此の手を緩めて呉れ――君のために劍の欄は潰れたぞ。』

『閣下、私から願ひます、此の憐れむべき愚人共を宥して下さい。』

元帥は再び驚いてレオナルドを見詰めたが、やがて莞爾として首を振りながら言つた。

『ハテ稀代な人ぢや！それは又何故ぢや？何故君は奴等のために懇願なさる？』

『閣下は兵士を殘らず絞殺なさつたところでそれが私に何の利益がありませう？自分で自分が何をしたのか彼等には分らないのです。』

老將軍は思案した後晴々しい顔をした。そして小さな聰い目は善性を以て輝いた。

『レオナルド君、私に分らぬ事が一つあるのぢやが。君は何うして此處を動かずに凝と見てゐる事が出來た？何故私に訴へなかつた？私でなくともトレムーユに訴へなかつた？確かトレムーユは一時間ばかり前に此處を通つた筈だが――』

レオナルドは俯向いて顏を赧らめた。『時間が間に合ひませんでした。私は……』と吃つて、

『私はトレムーユ閣下を知りませんから。』

『それは運が惡るかつた』と老元帥は言ひながら破壞された像をまじ〳〵眺めてゐたがやがて深い熱心を籠めて叫んだ。『君の巨人像のために私の部下の精兵を百名附して置けば好かつた。』

レオナルドは家への歸り途プラマンテ亭の下に懸かつてゐる橋を渡つた。亭は自分がイル・モロに會つた最後の場所であつた。見れば巵從、馬丁は公が深く愛でゝゐた白鳥を狩り立てゝゐた。憐れな鳥は濠を逃げ去る事が出來ないので羽擊きして苦悶の聲を發した。柔毛、雪白の羽毛は點々として水上に漂ひ、血みどろな白い屍は此處彼處黑い水の面に浮いてゐた。新に傷いた一羽は斷末魔の搖搦に悶えて優美な頸を長く伸ばしながら鋭い聲で鳴いて、弱くなつた翼をバタ〳〵動かした。それは恰も其の甲斐がないのに今を最後の力を絞つて飛び去らうとしてゐるかのやうに見受けられた。レオナルドは目を背けて急いで去つた。

五

ルキ第十二世は豫定の日に違はず十月六日にロンバルヂーの首府ミランに乘り込んだ。鹵簿を見物するため大勢の人は集まつた。そして新に修覆したミラン共和國の二天使が金の翅を動かしたとき人々は喝采した。

騎馬像破壞の事があつて以來レオナルドは飛行機に手を觸れなかつた。併しアストロは相變らず努めて時々一つしかない目に怨みを籠めてレオナルドの方を顧みた。熱心の火、希望の火が其の目の中に眞赤に燃えてゐた。

或る朝老僧バチオリは佛蘭西王の傳言を齎して駈け込んだ。傳言の趣は宮城に出頭すべしとの事であつた。新飛行機に錯誤のあるのを未だアストロに打ち明けないので、若しや自分の留守中此の熱心な鍛工は委細構はず實驗に取り掛かつて首の骨を折るやうな事があつては大變だと案じて何となくアストロの側を離れたくはなかつたが、それにも拘らず强ひて出て行く事にして間もなくロッケッタ殿の廣間に通つた。此の廣間でルキ十二世はミランの官吏並びに主立ちたる市民に接見してゐた。

レオナルドは注意して新王を見た。其の一體の容子の何處にも王らしい點は認められなかつた。身體は痩せて弱々し氣に見え、肩幅狹く、胸部は窪んで不思議にも顏の皺が目に付いた。そして其の顏は疑ひもなく每時も苦痛に責められてゐるため、顯貴、優雅の容を表してはゐなかつた。彼の德操は高々見積つて町人型くらゐのところであつた。

玉座の一の階に年若い二十位の人が立つてゐた。質素なる黑衣を着て、帽子の穴にある數粒の眞珠と聖ミカエル勳章の金鎖とを除けば他に一つも裝飾は帶びてゐなかつた。顏は蒼白にして麻色の髮は長く、青黑い目に優しみはあるが然かも奇妙に烱々として注意深い事を示してゐた。

『ルカさん、あの若い貴族は誰です』とレオナルドは囁いた。

『法王猊下の御子息です、あれがヴァレンチノア公のケーザル・ボルヂア殿ぢや。』

此の年若い人が罪の數々を犯したといふ取沙汰をレオナルドは知らない譯ではなかつた。公が羅馬敎會の（大旗手）てふ稱號を得てボルヂア家に於ける最優の地位を我が手に收めたい餘り、僧正の紫衣をば蔽履の如くに捨てゝ之に換へ、且つ肉親の兄を殺したといふ風聞は殆ど疑ふべくもなかつた。曾にこれに止らず、兄を殺した眞の原因は右の野心の外に今一つ妹のルクレチアを我が物にせんとして兄弟の間に途方もない競爭が起つたからであるとさへ傳へられた。

『少くとも其の事實だけは有り得べからざる事だ』とレオナルドは公の沈靜なる顏と明るい、溫柔な目を見ながら心の中で考へてゐた。

ケーザル公はレオナルドの凝視が自分を穿鑿してゐるのに多分氣付いたらしく、レオナルド

を指しながら秘書に何事かを訊ねてゐた。秘書は恭しい面持ちをして低い聲で答へたので、それを聞いた公は今度は却て自分の方から熱心にレオナルドを眺めて唇の邊に美しい微笑を湛えた。

『否、然うぢやない、不可能ではないのだ』とレオナルドは自分の粗率しい判斷を心の中で駁した。『あの顏では何な事でも仕兼ねまいて。恐らく噂以上の惡事をやつてゐるかも知れない。』

ミランの委員總代は冗々しい書狀を讀み上げたのち玉座に近づいて件の紙を王に渡さうとしたが王は偶然それを取り落した。するとケーザル・ボルヂアは逸早く總代に先んじて器用に俯向いて卷物を拾ひ上げて王の手に渡した。

『彼奴は機會ある毎に逸しないのだ』とレオナルドの近くにゐる人が唸つた。

『全くだ』と他の人が相槌を打つた。『法王の息子だけに奉公の術は心得たもんだ。大方朝になつたらルキ王に着物を着せるだらうて。そしてシャツを溫める位はするんだせ。いやさ、ルキの厩に水を振つかけて掃除するだらうよ、實際そんな事を仕兼ねない奴だ。』

レオナルドも公の仕打ちは餘り追從に過ぎると思つたが、それは卑屈といふよりも寧ろ猛獸の愛撫のやうに恐ろしく見えた。併しレオナルドはこれ以上見物してゐる事は出來なかつた。

バチオリはレオナルドを伴つて前の方へ出て王に引き合はせ、(最も洪大)、(最も優秀)、(最も强勇)と云つたやうな最上級を交へた短句で手短かに王に言上した。するとルキは直ぐに(最後の聖餐)の話を持ち出して使徒の容貌を稱揚して熱心に畫中の天井の遠近法を說き出した。ルカは確かに王から此の大美術家に何か官職を賜はるに相違ないと思つてゐたのに不幸にも此の時一人の扈從が佛蘭西から來た書面を携へて這入つて來た。書面は愛妃ブルターニュのアンヌが女子を分娩したといふ報知であつた。王の注意は全く此の方に奪はれた。廷臣達は慶賀の辭を述べるため群つて來てレオナルドとバチオリは後ろの方へ押し遣られた。バチオリは友を再び前へ出さうとしたがレオナルドはそれを拒んで直ちに宮城を辭した。

そして吊橋へ差し掛かつた時ボルヂア公の秘書アガピトが追つ掛けて來て、君公の命令に依りレオナルドを技師長に任ずる旨を言ひ渡した。此の職はイル・モロ公に抱へられてゐた時に奉じてゐたものであつた。

レオナルドは二三日考慮してから兎角の應へを致しますからと言ひ殘して家路を指して歸つた。

間もなく一群の人のゐるのが目に止まつたので、何か凶事が起つたのはであるまいかと蟲が知らせるやうでスタ〳〵足を早めて行つた。此の心配は見事に當つてゐた。弟子のヂョーヴァンニ、マルコ、サライノ、チェサレは昇床がないため新飛行機の毀れた翼の上にアストロを載せてゐたのであつた。アストロの着物は血に染み且つ裂けて顏は死其の物のやうに白かつた。レオナルドには直ちに想像が付いた。此の鍛工は多大の決心と多大の自信とを以て飛行機の試驗に着手して、機を肩に宛行つて空中を飛んで墜落した。そして片方の翼が木の枝に引つ懸かつたから好かつたものゝ然もなければ死を免れないのであつた。レオナルドは弟子達に手傳つて憐れな不幸人を家に運び入れた。そして自分の手で寢臺に載せ病人の上に俯向いて傷を檢査した。アストロは正氣に復つた。そして哀願の目で主人を見上げながら小さな聲で言つた。

『お、先生、宥して下さい！』

六

ルヰ第十二世は公主の出產祝ひとして盛大なる饗宴を張ると共に感謝の供養を嚴肅に伽藍で擧行した。ミランは靜謐として市民は悉く平穩幸福を樂しんでゐた。そこで王は新に附庸した

る臣民に固く忠節を誓はしめ、元帥トリヴルチオを總督に任命して、十一月の初旬佛蘭西に歸つた。

然かも靜穩の狀態はペテンに過ぎなかつた。トリヴルチオの殘虐と貪婪とは間もなく多大の嫌惡を招いた。放逐されたルドヴィコ公の味方は活氣付いて叛亂を勸める書翰を夥しく配布して人民を煽動した。非難し嘲侮してイル・モロを逐ひ出したミランの民は、直ちに公を以て君主中最も善良なる人、最も賢明なる人であると揚言した。

一月の末に一群の人々はチチネエセ門の側にある稅務署を破壞し、其の翌日はパヴィアの附近に一揆が起つた。この一揆の原因は一人の百姓娘のためであつた。佛蘭西の兵士が此の娘の純潔を汚さうとしたので娘は箒の柄で兵士を打つた。すると兵士は嚇かしのため手斧を振り廻はした。娘は金切聲を揚げた。娘の親仁は棒切れを持つて飛んで來たが兵士のために殺された。其處へ集まつて來た大勢の者共は兵士に折り重なつて苦もなく殺してしまつた。すると佛蘭西の軍隊は村民をおびき出し且つ村を掠奪した。

此の暴行の報がミランに達したとき恰も火藥の上に火の子が一つ落ちたやうな作用を呈した。市民は廣場、往來、市場に流れ出て、(佛蘭西王を追ひ出せ！トリヴルチオを追ひ出せ！毛

唐の奴を打ち殺せ！イル・モロ萬歳！）と叫んだ。

小勢な佛蘭西軍はミラン三萬人の攻撃に抗する事が出來なかつた。目下伽藍の鐘樓に當てゝある塔の上にトリヴルチオは砲列を布いたが市民に發砲するに先つて今一度成る事なら和睦を講じたいと思つた。併し却て散々な目に遭つて市民殿の中へ追ひ込められ既んでの事に殺されるところを、折好く瑞西傭兵が仲に這入つて命拾ひをしたのであつた。尋いで焚毀、掠奪が始まつて、市民に捕はれた外國人、並びに外國人の肩を持つ者は凡て責苦を受け且つ虐殺された。二月一日、トリヴルチオは大尉デスペとコデカラとに城を預けて自分は遁逃した。同じ日の夜、イル・モロは獨逸から歸つてコモ市の盛んなる歡迎を受けた。ミラン市は救世主のやうに尊んで擧げてイル・モロ公の歸來を待つてゐた。

一揆騒動の最終の日は砲擊のためあらゆる街路の方面は破壞されてゐたが、其の最中にレオナルドは住處を家の下の廣い窖に移した。そして極めて居心地好い部屋を工夫して繪畫、原稿、科學器械等、價値ある物は凡て此處に置く事にした。

レオナルドはケーザル・ボルヂア公に奉公する決心をして、遲くも千五百年の夏迄にはローマニャに行つて公に仕へようと思つた。そして其の前に騒亂が終る迄ミラン附近にあるヴァプリオの別莊に閉居してゐる友人ヂロラモ・メルチを訪れる事にした。二月二日即ち奉獻節の日に僧ルカが來て宮城の浸水を報じた。それはトリヴルチオに從屬してゐたミラン人ルイギ・ダ・ボルトなる者が叛徒に投じて城の濠に注ぐ水門を悉く開いたゝめ水は附近の地を浸してロッケッタ宮の壁に屆き且つ武器庫、食品貯藏庫の方へ溢流してルイギの目的通り佛蘭西軍は殆ど降伏せざるの止むを得ざるに至つた。洪水は更に掘割から溢れてグラチエ寺に近いヴェルチェルリナ門から郊外の低地一帶に氾濫した。ルカは最後の聖餐が甚だ氣遣はしい狀態にある旨を述べて、兩人で出掛けて行つて何うなつてゐるか見ようと提議した。

レオナルドは態と平氣を裝つて唯今非常に忙がしいから行く事は出來ません、それにあの壁畫の位置は高いから水害を免れるでせうと答へたが、然かもバチオリが家を辭するや否や大急ぎでグラチエ寺の食堂へ行つた。煉瓦を敷き詰めてある牀には水溜りが未だ其の儘になつてゐて、沼氣と淀み水の惡臭が室一杯に匂うてゐた。水は四分の一キュビトだけ上りましたと一人の法師が語つた。

當時壁畫といへば凡て水彩で描くのが習慣となつてゐたが、獨りレオナルドはこれと異つてゐた。水彩に依る壁畫は急速に仕上げる必要があるので、從つて斯くの如き方法はレオナルド

の天才とは縁遠いものであつた。

《毫も疑惑しない畫家は成功を得ること尠い》と始終言つてゐる通り、彼は自己の疑惑、自己の逡巡、自己の實驗、修正、極端なる遲筆に適應する材料は獨り油のみであると考へた。經驗を積める大家達はレオナルドに說いてグラチエ寺は沼に臨んで從つて壁には濕氣があるから油繪具を用ゐても駄目であると諭したけれども其の忠告の甲斐はなかつた。實驗と、新しき道と、新しき工夫とを愛する念慮は彼を驅つてあらゆる警めに聽かざらしめた、即ち特殊の方法を用ゐて繪具を混じて、壁をば先づワニス土で塗つて其の上に油土を被せ、更に漆喰と土瀝青と石膏とを以て塗り固めたのであつた。

件の法師と分れてからレオナルドは未だ水に漬つてゐる食堂の牀を渡つて、ずつと壁の側に寄つて畫を檢めた。透明な、そして雅致ある色は、害を受けるどころか汚れすら附着してゐないやうに見えたが、念のため蟲眼鏡を當てゝ畫面を隅から隅まで探つて見た。すると驚くべし左の隅、即ちテーブル掛けが聖バルトロメオの足の眞際で廣い褶を作つて、ブラ下がつてゐるところに、小さな罅の這入つてゐるのが目に見えた。啻にこれのみならず色は既に褪せ始めて白天鵞絨に似た一點が見えるか見えないくらゐ薄く生じてゐるが、これは黴になる初まりと見受けられた。急に畫家の顏は眞靑になつたが、再び氣を鎭め微細に注意を拂つて檢査を續けて行くうち程なく事の仔細が分つて來た。即ち土にワニスを加へた下塗りが濕氣を受けて膨脹したゝめ繪を描いてある漆喰塗りが浮いて、其の浮き上つた中に殆ど目に這入らない程微細な罅が出來て、そして壁の煉瓦の氣孔から汗を搔くやうに噴き出す鹽分が此の罅を通つて表面に出て來るのであつた。あゝ《最後の聖餐》の運命は定まつた。四十年や五十年の間畫面の色は變らずにゐて筆者たる自分は生命のあるうちに其の褪腐を見る事は決してあるまいが、それにしても早晩此の大傑作は滅びて復歸しない事は炳として明かである。レオナルドは凝と其處に立つた儘自分の描いた基督の顏を眺めた。そして自分の第一の傑作たる此の顏が如何に自分に取つて親しみがあるかを此の時初めて知つたのであつた。

最後の聖餐の滅亡、騎馬像の破壞——彼が自分を當代の人々に繫ぎ且つ友人（恐らくは未だ生れてゐない友人）に繫ぐべき最後の絲は奪はれてしまつた。疾くの昔から彼の魂は孤獨であつたのに、それが今は以前に增して深くなつた。沙塵となつて壞れ去つた巨人像の粘土は天の風伯のおもちやとなり、基督の顏には澤山の黴が生えて輪廓が薄くなり色が汚れて褪せてゐる。今迄の生涯を形つてゐた一切のものは影のやうに消えかゝつてゐる。

何人にも一言の挨拶さへせずに僧院を出て歸路に就き、寂しい我が家に歸つて地下の窖に降りた。其の時アストロの臥してゐる室を通つたので一寸足を留めて病人の額に當てる繃帶を拵へてゐたヂョーヴァンニに訊ねた。

『又熱が出たのか？』

『然うです、譫言を言ひまして。』

レオナルドは繃帶を掛けるのを見てゐた。そして憐れにも失敗したアストロの熱心な唇から洩れる聯絡のない口早な譫言を數分の間聞いた。

『まだ〳〵高くなれ、眞直に太陽へ屆かなくちや——翼に火が附かない限り太陽の側へ行かなくちや！ほゝう此の小僧、貴樣は何者だ？貴樣の名は何と言ふのだ？何、機械學だと？畜生、無禮な名前を吐かしやがる！俺は未だ機械學なぞと名乘る奴を見た事がないんだぞ！貴樣は一體何を嘲つてるんだ？え、おい、それが冗談の積りかい？ヘン、最う澤山だい、冗談なんか止しやがれ、俺は貴樣と何も關係はないのだ。おゝ！俺を飛行させろ！飛行させて呉れつたら！此の上我慢はならん！否、待て〳〵、一寸息を入れさせて呉れ！おゝ……死んぢまふのだ、地獄に墮ちるんだ！』

其の顏に苦悶が浮かんで恐怖の叫びが唇から洩れる。彼は深淵の中へ落ちるのだと思つてゐるらしい。併しこれが濟んでから再び口早に譫言した。

『いや、いや、俺を嘲つちや可けない！過失は飽まで俺にあるのだ。先生は未だ準備が整つてゐないと言つたのだ。然う〳〵先生は然う言つたのだ。それに俺は先生に背いたのだ！先生に背いたのだ！叱ッ！叱ッ！おゝ然うだ、俺は彼奴を知つてるぞ、一等小さい癖に一等重い惡魔——彼奴は機械學といふ惡魔なんだ！』

レオナルドはアストロの寢臺の上に首を差し伸べて凝視せざるを得なかつた。そして此の男も私のために滅ぼされたのだと竊かに思つた。

そしてアストロの燃えるが如き額に手を當てた。アストロは氣が靜まつて漸次平穩の狀態になり間もなく熟睡した。そこでレオナルドは自分の部屋に退いて多忙な計算に取り掛かつた。其今の研究は風と氣流の法則に關するもので、飛行の問題に資する目的からこれを波と潮流の法則に比較してゐるのであつた。

『少し計り間を距てゝ池の中へ同じ大さの石を二つ投げると水面に二つの圜が生じて擴がるのだ』とレオナルドは獨語した。『すると二つの圜が相會する時に一方が一方の圜の中へ這入つ

て二等分するだらうか、それとも接觸點で屈折するだらうか？私が實驗した立場から此の問題を答へる事が出來る――兩つの圓は互に交錯する、併し交錯はするが各中心點は依然明瞭に石の落ちた點に止まつて決して混亂しないのだ。』

自然が簡單に此の機械上の問題を解釋した事を思うて彼は甚だ熱心になつた。

『何といふ美妙なことだらう！まあ實に美しい！』

そしてレオナルドは一つの計算をしたが、其の計算の結果は彼の確信に下の事實を附加した。曰く、數學に關する諸般の科學は、理性の本然的必然に基礎を有する諸の法則を包容して機械學の自然的必然を是認すると。

時間は知らぬ間に過ぎ去つて夕暮となつた。レオナルドは夕飯後弟子と談話を交へて寛いだのち再び仕事に取り掛かつた。明るいそして鋭敏な心は何となく自分が或る大發見の淵に臨んでゐるやうに思はせた。

『風が畑を吹いてライ麥の上に波を揚げる模樣を見るに波は後から〳〵と續いて、其のために莖は曲がるのだ、併し幾ら曲つてもちやんと地面に着いてゐて動きはしない。これと同じく水の上に波が立つても水其のものは動かないのだ。石を投げると漣が立つ、又風に搖られて漣が立つ、併し其の漣は水の運動ではないのだ、寧ろ水の皺といふ方が當つてゐる。其の證據には段々擴がる漣の圓の中へ藁を一本投げると、藁は浮いたり沈んだりするだけで決して其の位置を變へないから。』

藁の實驗に聯想して、嘗て同じ試驗を音波研究の際に應用した事を思ひ出した。彼は默考した――

『鐘を鳴らすと其の附近にある鐘に微かな震動と低い共振が生ずる。琵琶の音は其の側にある琵琶から同じ音を喚び起すに相違ない。そして絃の上に一筋の藁を置いて其の絃を鳴らすと藁は絃の振動を示すのだ。』

研究に沈潛せるレオナルドの心は非常に活潑になつて來た。即ち振搖する二本の藁と藁の間（即ち波の表面に振搖するものと振搖する絃の上で振搖するものと）に未だ發見されない知識の大世界、即ち或る聯絡のある事を認めて、或る考へが電光石火のやうに迅く心の中をスッと横に閃いた。

『以上兩つの場合を考へるに機械的法則は孰れも同一だ！水中に石を投じて其の表面に浮ぶ波のやうに音波も矢張り空中に擴まつて他の音波と交錯するけれども互に混同せずに中心は依

然として舊の點を保持してゐる。音波はそれで好いとして偖て光線は何うか？かの反響なるものは音の複出であると同じく鏡面の反射は光線の照り返しに外ならない、即ち物理上の力があらはす現象に就いて見るに其の現象中に存する機械的法則は唯一つしかないのだ、詰り唯一つの意志あるのみだ、そしてこの意志が即ち爾の裁判なのだ。おゝ力の源なる哉！投射角と反射角は必ず相等しい！』

顏は青醒め兩眼は熱心を以てキラ〳〵燃えて再び力の源云々の事を考へ始めた。そして此の度は以前よりも更に正確に自分は今前人が未だ覗かなかつた深淵を探らうとしてゐるのだと感じた。若し此の發見を實驗の俎に載せて果して其の確實たる事が分れば疑ひもなくこれはアルキメデース以來最大なる機械學上の發見であると思つた。今から二月前にヴァスコ・ヂ・ガーマが喜望峰を回航して印度に通ずる新航路を發見したといふ報知に接したとき坐ろに羨望の念を生じたが、併し今度は自分の方がガーマ、コロンブスに優る大發見を遂げんとしてゐるのだ。自分は彼等以上に神秘なる擴がりを認めたのだ。彼等は新らしい天と新らしい土を見出したが自分のは決してそれに劣らないのだ！

併し壁を貫いて病人の呻めきと譫言とは耳を襲うて來る。レオナルドは其の聲に耳を傾けた。自分の機械學のこと、巨人像が意味のない破壞に遭つたこと、壁畫の滅亡の避け難いこと、そしてアストロの愚かにも恐ろしい墜落のことなどを思ひ出して自分の心に訊いて見た——

『此の度の發見も私が從來なした一切の物のやうに全然氓びるのだらうか、意氣地なくムザムザと滅びるのだらうか？そして私は何時になつても今のやうに孤獨だらうか？斯うして地下の暗黑の中に生きながら葬られてゐるやうに何時までも一人ぼつちだらうか？飛行機の翼を夢想した此の私が……！』

そして暫らく間を措いてから、

『何だつて構ふものか！暗黑、沈默、忘却があるのみだ。誰一人私が何をしたか知らないのだ！それを知つてゐるのは私、此の私ばかりだ！』

そして制し切れぬ誇り、捨つる能はざる勝利の感じ、力の感じは魂の中に充溢して自分が翹望した翼が既に地球の上の方へ自分を揚げてゐるやうに思はれた。

地下室は急に狹苦しくなつて兎もすれば窒息するやうに覺えた。大空と廣々とした田園を見渡したい念は耐へ切れなくなつた。そこで家を飛び出して大伽藍の方へと足を急がした。

八

此の夜月照つて空は澄み渡り大氣の溫かなるを感じた。氣味惡い火事の餘は未だ眞赤に空を焦がして濛々たる煙は渦を卷いて高く昇つてゐた。

市街の中心へ近くに從つて人々は益々增加した。激昂して物凄く、懸念に驅られてゐる群衆の顏は月の光に靑く輝き、松明の閃光に映じて赤く光つた。そして昔のミラン民政國が用ゐた赤色十字架のある白旗、並びに夷狄たる佛蘭西人と戰ふため吾れ先きにと執つた提灯竿、弩、拳銃、棍棒、戟、草搔杷、找の類を、月の光り、松明の閃めきは弄んでゐた。人々は蟻のやうに群つて、警鐘は鳴り、銃聲が轟いた。佛蘭西軍は城から市街に向けて發砲して、市街壁の石をば一つも剩さず打ち圮すと傲語した。併し其の大砲の殷々たる音よりも高く、鐘の聲よりも大きいのは市民の間斷なき叫びであつた。

『佛蘭西人を殺つ付けろ！毛唐を殺つ付けろ！王の奴を引き摺り下ろせ！イル・モロ萬歲！』

レオナルドに取つて此の光景は恐ろしくて狂夢の印象に等しかつた。東の門の附近でビカルヂ產の十六歲の鼓手が絞殺されたが、これが執行役に當つたのは金工マスカレルロであつた。

彼は少年の首に繩を懸け、其の頭を輕く叩いてさも嚴肅さうに口汚なく罵つた——

『父と子と聖靈の御名に於いて此の神の僕、此の佛蘭西人、サルタマッキアに麻繩の頸飾の騎士といふ稱號を與へる！』

『アーメン！』と群衆は返した。

小鼓手は危險身に迫つてゐる事を知らずに半分は笑ひながら將さに泣き出さんとする小兒のやうに目をパチクリさせて後退りした。そして首を扭らせて繩の輪を緩めようとしたが不意に昏睡狀態から覺めたやうに眞靑に戰慄せる美しい顏を群衆の方に向けて歎願しようとした。併し自分の聲は咆吼、嘲笑の裡に葬られたので歎願をば斷念して、罪のない、謙讓な犧牲の寄る邊ない容子をして、母か乃至は姉に貫つて首の周りの靑い紐に附けてゐた小さな十字架に接吻した。マスカレルロは其の時彼を踏臺から突き飛ばして嘲笑した。

『しつかりしろ、頸飾の騎士先生！何うして佛蘭西のガヤル踊りをするのか俺らに踊つて見せろ！』

そして衆人洪笑の裡に少年の體は恐らく戰慄して宛ら斷末魔の痙攣のやうになつたので、それが恰ど踊つてゐるやうに見えた。

レオナルドは尙ほ歩を續けた。すると間もなく襤褸々々の着物を着た一人の女が半ば毀れた茅屋の前で跪いて道行く人々に痩せた手を差し伸べて絶間なく叫んでゐるのが見えた。

『お助け！お助け！何うぞ助けて下さいまし！』

靴屋のコルポロは走つて來て、何事が起つてこんなに苦しんでゐるのかと訊いた。

『私の赤ん坊が、私の赤ん坊が！赤ん坊は寐てゐました、小つちやな牀の中で可愛らしく寐んねしてゐました、それが床から落ちたのです。多分尙だ生きてゐますから何うぞ助けて下さいまし！お丶助けて下さい！たすけて……！』

其の瞬間、一箇の砲彈がズドンと鳴つて空中を飛び來つて丁度茅屋の屋根に中つた。梁は割れ、沙塵は柱を成して高く揚り、屋根は落ち、壁は碎けて、件の女は永遠に沈默してしまつた。

レオナルドは更に歩を進めて間もなく市民殿に達した。見れば大學生がオシイ廊臺の前に立つて群衆に演說を試みてゐた。彼は具さに古のミラン人の光榮を說き、此の際暴君は凡て剿絶して宜しく自由平等の時代を建設するを要すると勸告したが、併し聽衆は此の說得に從ひさうもなかつた。

『市民諸君！』と叫びながら大學生は一挺のナイフを振り廻はした。此のナイフは平時にあつては鵝ペンを削つて字が書けるやうになし、或は腸詰を刻み、時としては樹皮に戀人の名を彫り付けたりするのであるが、今はこれを復讐の女神（ネメシスの匕首）と名けてゐた。『市民諸君！一死以て自由のために盡すべき時は來ましたぞ！我々の手は暴君の血で洗はねばなりません。彼暴君の胸にネメシスの匕首を突き刺さねばなりません。共和國萬歲！』

と忽ち聽衆の中から幾つかの聲が叫んだ。

『馬鹿野郎！貴樣の酒は何な葡萄を絞つて造つたのか知つてるぞ！貴樣が我々に與へようといふ其の自由が何な物だか知つてるぞ！此の間諜奴！謀叛人！佛蘭西の犬！貴樣も貴樣の共和國も皆んな惡魔に吳れつちまへ！イル・モロ萬歲！公に刄向ふ奴は皆んなくたばつちまへ！』

併し辯士はこれにひるまず演說を續けた。そしてシセロ、タキツスを引用して自說を强めたが。暴徒はそれッとばかり學生の腰掛けを倒して學生を引き摺り下ろし袋叩きにして叫んだ——

『これが貴樣の言つた自由に對する罰だ！貴樣の共和國の罰だ！愚民を煽動して正當な君主に背かせようとした罰はこれだ！』

レオナルドは暫しアレンゴの廣場に立ち、巍々たる伽藍に向つて感歎の眸を放つた——大理石造の尖塔、高塔は林のやうに立ち並んで、月の光りに靑く照り、搖々する松明の火に緋の如く

輝き、この二重の光りに一種怪奇な風致を添へた。殊に大僧正邸の前には非常な人集りで立錐の地もなかつたが、其の群衆の恰度眞中に方つて唸る聲、恐ろしく吼えるやうな聲が聞えた。

『何うしたのでせう、あれは？』とレオナルドは一人の年老いた職工に訊ねた。溫順な、品威ある此の人の顏は恐怖のために白くなつてゐた。

『何事が起つたのか誰にだつて分るものですか？奴らだつて何をのぞむのか、何をしてゐるのか薩張り分らないのです。ヤコポ・クロッタは麥粉に毒を入れて賣つた、奴は佛探に違ひないと罵つてゐるけれど、本統に、本統に、それは嘘の皮です。誰彼の差別なく出合ひ頭に直ぐ樣打つて掛かつて、言ひ譯したつて聽き入れないのです。實に恐ろしい、全く恐ろしい事だ。主耶蘇樣、何卒私等の憐れむべき罪人を惠んで下さいませ！』

丁度其の時玻璃工ゴルゴーリは密集せる人の群から離れて、血塗れの首を棒の先に刺して高く擧げて見せた。すると市井の無賴少年ファルファンニッキオは其の周圍を小踊りしながら叫び且つ吼えた。

『謀叛人を追つ拂へ！毛唐を追つ拂へ！佛蘭西の惡魔野郎を殺つ付けろ！』

『お丶主、何卒人々の狂暴から私等をお救ひ下され！』と老職工は低聲で唸て十字を切つた。

喇叭、太鼓の音、砲彈の破裂、銃彈の爆裂、兵士の揚げる鯨波の聲――絶えずこれらは城内から聞えて來る。大射石砲（佛蘭西はこれを野呂間のマルゴといひ、獨逸はグレーテの馬鹿と稱してゐた）が發射された時は、大地も搖れてミラン全市も粉齏され破滅するかとさへ疑はれた。偶々破裂彈が新市街の外に落ちて一軒の家に火が附いた。火の柱は月の光りの靜かに照る空を目懸けて上つて廣場に赤い光を搖ら〳〵さした。群衆は彼方此方に押し合ひへし合ひして、黑い影法師の如く將た生靈のやうに踏みつ踏まれつした。

レオナルドは深く考へに耽りながら其處に立つて凄まじい光景を眺め、一々仔細に注意してゐたが、紅蓮の火を見たり、群衆の聲、鐘の音、銃の音を聞いたりしてゐる間に、何時とはなく例の發見の方に考へが戻つてゐた。即ち平穩に膨起する音波、光波を、想像力は描いて呉れて、恰ど石を水中に投じて表面に立つ漣と等しく、これらの波が外方に描く圓は互に交錯するけれども、然かも混同するでもなければ混亂するでもなく、舊の一點に於いて各々中心を保持してゐるのであり、そしてこれら整然たる波の諧調的演奏、並びに如上の波を支配せる機械的法則（こは投射角と反對角とを等しからしめるもの）、換言すれば波の造り主の不易なる命令、神聖なる裁判の法規は何時如何なる時と雖も人間の妨碍は決してこれに及ぼす能はざる事

を思ふて魂は大なる喜びに滿ちた。

そして彼の心の中では再び次ぎのやうな反響がしてゐた——

『おゝ爾力の源、爾の驚くべき裁判！爾は如何なる力にもそが必然的結果の順序と性質とを缺如せしめなかつた！』

熱狂せる群衆の中にゐながら此の藝術家の魂は靜觀の永遠なる冷靜を保つてゐた、恰ど松明の搖らぐ光や祝融、戰火の上に方つて天の最上の光を放つて輝ける青い月光のやうに。

千五百年二月の或る朝、ルドヴィコ・スフォルツァ、即ちイル・モロは新門から再びミランに這入つた。併し其の前夜レオナルドは友人メルチの別莊地ヴァプリオに向けて出立したのであつた。

九

ヂロラモ・メルチは嘗てスフォルツァ宮廷に奉仕してゐたが、千四百九十四年に若き妻を失つて以來、寂しい別莊に隱棲した。別莊はミランから數時間の距離にあつてアルプスの裾に位してゐた。彼は世俗の喧噪を遁れて哲人の生活を營み自ら手を下して園藝を樂しみ、音樂と秘密學の研鑽に身を委ねてゐた。或る者は噂して此の人は魔法の妙手であるだけ常に亡妻の靈を下界から招き寄せてゐるとさへ言ひ觸らした。數學僧ルカ・パチオリ、並びに錬金士サクロボスコは屢々メルチを訪ねて幾夜となく徹宵して、プラトーの觀念や天體の音樂を支配するといふピタゴラスの數の法則なぞに關する議論を闘はしたが、併しメルチは就中レオナルドの訪問を喜んだ。マルテサナ掘割を作る工事のためレオナルドは度々此の附近に出張したゝめメルチへの訪問は自然頻繁であつた。

ヴァプリオ村はアッダ河の左岸に位して別莊の花園の緣を流れる掘割は、若干距離のあひだ此の河と平行して流れた。そして河の水路は丁度別莊のあたりで急流を作つて、飛瀑の轟々たる音は海波のやうに一日中耳に響いた。あらしのやうに奮迅して自由奔放な、そして容易に馴致されないアッダ河は、逶迤として嶮坦な黃色の兩岸の間に藍碧の水波を投げ付けるに反して、それと相並ぶ掘前には冷々として綠色せる同じ山水が眞直な水幅を滿々と流れて、鏡の如く滑かに、平靜として水勢緩く、克く柔順に克く馴致されてゐた。此の二流——即ち人間の知識と意思とを活かして自分が造つたマルテサナと其の姉に當る野蠻にして物凄く、自由に、奔激に、沸々として泡立てる見事なアッダと——此の二流の孰れがより美しいのだらうか？　レオナルド

は夫々兩者に對して了解を有し、同情と同等の愛とを寄せてゐた。

別莊の園にある築山から眼界廣く見渡されるロンバルヂーの大平野は宛然として莞爾たる一大花園の觀を呈した。夏ならば野は青々と繁つて乾草の匂ひは空中に漂ひ、小麥、玉蜀黍は伸びて葡萄樹の上を越し、麥の穗は梨、林檎、櫻、梅に接吻する筈であつた。コモの連岡は北に方つて黑く聳え、アルプスの第一支脈は更に其の上に重り、雷を戴ける山嶺は金色なせる夕陽の中に最も高く燃えてゐた。

ルカもガレオット・サクロボスコも共にヴェルチェルリナの附近にある陋屋を佛蘭西軍に破壞されたので此の別莊に來てゐた。レオナルドは此の兩人から遠ざかつて自ら孤獨を選んだが、併し又一方に主人メルチの子息フランチェスコと遊ぶのを非常に好んだ。

此の小兒は女の子のやうに臆病で且つ羞恥む性とて初めのうちはレオナルドを深く恐れて敢て近寄らなかつたが、それが或る日偶然レオナルドの部屋へ舞ひ込んだ事があつた。丁度其のときレオナルドは色硝子を實驗して色彩を研究してゐたので、黃や青、紫、綠等種々異つた色の硝子を目に當てゝやつた。稚いフランチェスコが平生見慣れてゐる物は珍らしい容を呈して色の異るに從つて世界は或は笑つたり或は顏を蹙めたりした。今一つレオナルドが發明した《黑カメラ》と稱する玩具は非常に小兒の注意を惹いた。これは白紙に映る物の形が動く活動畫で、フランチェスコの目に水車がぐる〳〵廻轉したり、燕が敎會堂のぐるりを飛翔したり、樵夫の灰色の驢馬が背中に柴を付けて泥濘の道を几張面に歩んだり、それから白楊樹が軟風に搖れてそよ〳〵と首を曲げたりした。これにも增して興味あるのは天候觀測器で、これは銅の環と、秤の桿のやうな棒と、二つの小さな球とから成つて、一つの球は蠟、今一つは棉紙を被せてあつた。それで空氣が濕氣を飽和してゐれば棉紙の球は重くなつて下の方へさがるため自然桿は傾いて銅の環の刻み目に觸れる、即ち濕氣の多少は精密に測量できて、二日乃至三日間の天候は豫め知れるのであつた。小兒は手から此の器械を作つて其の變化の樣子を考へて天氣模樣が見事に中つたとき其の喜びは實に大したものであつた。彼は村の學校へ通つて附近の寺の老住職の敎へを受けたのであるが、紙の隅の折れた拉典文法や算術初歩は大嫌ひな上に學問の進歩はのろい方であつた。併しレオナルドの敎へは小兒に取つて新規なものとてお伽噺のやうに愉快に覺え、光學、音響學、動水を研究する諸器械は宛ら新らしい魔術の玩具のやうになつたし、それに此の畫家の談話を聞いて倦むを知らなかつた。大人と談ずるときレオナルドは相手方の嘲笑、疑念を恐れてひたすら注意して口を利くのであるが、フランチェスコに對しては最も多く打ち解け

て最も率直に話した。そして自分は小兒に敎へると共に又小兒から學ぶところがあつた。聖書の本文をもじつて彼は獨語した。〈汝改心して小兒の如くなるに非れば知識の王國に入り難し。〉

〈星辰篇〉を書いたのは正に此の頃であつた。彌生の誰彼時、未だ薄ら寒い空氣に春の浮動を感ずる頃、彼はフランチェスコを携へて屋根に上つて、星の流れを見、月面の斑點を寫しつゝ圓錐を倒まにして其の中に紙切れを一つ轉ろがして端の孔を小兒に覗かせた。フランチェスコは星の光りがなくなつて唯きら〳〵と圓いそして喩へやうもなく小さな球を見た。

『球はそんなに小さく見えるけれど本統は大きいのです。大概の星は地球より百倍も千倍も大きいのですが、と云つて地球も矢張り星のやうに綺麗だし、それに星を輕蔑できないやうに地球も決して輕蔑したものではありません。此の世界に行はれてゐる機械的法則は人間が賢いから發見したのですが、此の法則は同時に此の澤山な星をも支配してゐるのです。』

『星の先きには何があるの？』と小兒は低い聲で訊いた。

『矢張り星が澤山あるのです、私らの目に這入らない世界があるのです。』

『そして其の星の先きは？』

『矢張り星です。』

『其の星の果てには何があるの、一等々々果てには？』

『果てなんぞはありません。』

『果てなんぞはありません？』とフランチェスコは叫んだ。そしてレオナルドは自分が握つてゐる小兒の小さな手が顫えるのを覺えた。其の顏は靑くなつた。

『ではレオナルドさん、極樂は何處にあるの？』と少年は遲い口調で言つた。『天使樣、聖徒樣、聖母樣は何處にゐらつしやるの？子の神樣とそれに聖靈と一緒にゐらつしやる父の神樣は何處にゐらしやるの？』

『神は到る處にゐる、天上界にゐると等しく沙の中にもゐる、宇宙の外にゐると等しく人の心の中にもゐる』と答へたかつたが、小兒の單純な信念を擾す事を恐れて默してゐた。

十

木の芽は萌え初めたので畫家と小兒は或は別莊の庭園に或は近くの森に屢々全一日を暮らして再び植物界に生命の復り來るのを見て歩いた。折々レオナルドは花や木を摘まみ取つて、人物の畫像に見るが如き瀉刺たる類似、即ち各モデルの有する唯一特自の形貌（此の同じ形貌には

二度と再び接する事は出來ない)を掴まうとした。彼はフランチェスコに種々な事を敎へた――樹幹の輪は該樹木の年齡を示せるものであつて各年輪の厚さは其の年輪を生じた年の濕氣の量を示せること、並びに樹幹の髓は常に南側に偏してゐるが、これ蓋し太陽の熱は最も多く此の方角を射るに依ると說き聞かせた。それから春になれば樹液は樹身の內緣と外皮との間に集まつて樹皮を厚くし且つ擴げて遂にはこれを破るに至ること、又枝に切れ目を入れると樹の生命力は其傷ついた部分に多量の養分を送るため樹皮は厚肥して創は癒えるけれども創痕は何時までも殘る、其の理由は營養液が餘り多きに過ぎ、溢れて瘤や結節を成すからであると敎へた。レオナルドが自然に就いて語るや常に乾燥無味、冷々たる態度を取つてひたすら科學的精密をのみ求め、決して熱するなく、正確に、綿密に、植物の生命に作用する春の活力をば巨細に涉つて解說すること機械の完成を語る時に異らず、時に抽象的數學に依つて松葉や水晶の面に存する驚くべき法則を闡明した。斯くの如く彼は冷々として好惡を設けなかつたが、然かもフランチェスコは聰慧にもレオナルドが一切の植物に對して等しく好愛を持する事を知つてゐた。即ち大君主たる太陽に向つて大きな手を擴げて歎願しつゝある枝を愛すると等しく又枯葉をも愛するのであつた。時々森の奧で莞爾として足を停めて、去年の枯葉は未だ枝に殘つてゐるのに其の下から綠の芽が噴き出て枯葉を逐ひ除けようとしてゐるのを眺めたり、又冬季の間知覺が遲鈍になつた蜜蜂が辛つとの事で雪割草の花の中へ潛り込むのを注視したりした。大なる靜寂の中に在つてフランチェスコは此の人の鐵の如き心臟が鼓動せる音を聞きおづ〳〵目を擧げて顏を見ると、木々の枝を斜に射れる大陽は彼の縮れ髮、長い髯、長い眉毛を照らして頭の周圍に暈輪を作り、宛ら牧野の神パンが刻々草の生長する音に耳を傾け、地下の春の囁き、甦る生の神秘力を聽いてゐるやうであつた。レオナルドに取つてあらゆる物は生きてゐた。人體に類似せる此の世界は一の巨大なる身體であり、從つて人類は矮小なる世界であつた。陸地を周れる水界の相似を露滴に於いて見、トレッツォの近くにあるアッダの飛瀑は諸川の瀑布、洄瀾を研究するに等しき機會を與へたし、そして其の洄瀾は婦人の毛髮のうね〳〵してゐるのに比較された。神秘なる類似に牽かるゝと共に夫々遠い世界から呼び交はすやうなる自然界の諧調の和樂に牽かれた。虹の起りを究めんとして同じプリズムの色を鳥の羽毛、寶石、豬水の泡、曇りを帶べる古硝子に於いても見得べきことを知つたし、又窓硝子に結ぶ霜の繪模樣の中に生命ある葉と花とに似た形を認めて、自然はやがて訪れ來る春の幻を水晶のやうに白く凝れる世界の中で逸早く見せて呉れるのだと思つた。常々知識の新領土に引き寄せられるやうに感ずるけれど此の

領土に足を踏み入れる者は自分ではなくて恐らく未來の世紀に屬する人々であらうと思つた。そして琥珀の物を吸ひ寄せる力に關して常に斯う言つてゐた——

『人の心は如何なる方法によつて神秘を考察するのか其の方法が私には分らない。未だ明白に知れない神秘力は幾らもあるが、磁石の力、琥珀の力の如きは即ちそれである。』

そして更に言ふ——

『可能力は數限りもなく世界に充滿してゐるけれども唯實驗が未だ其處まで及ばないのだ。』

或る日ベルガモのギドット・ブレスチナリといふ詩人が此の別莊を訪ねたとき、レオナルドは其の詩を餘り賞めなかつたゝめ彼は怒つて詩と繪畫の優劣論を始めた。レオナルドは成るべく口數を利かぬやうにしてゐたが、憤怒せる詩人から自分の畫に對する攻擊を受けたので稍興味に驅られて冗談半分に斯う言つた——

『繪畫は神が作つた永遠の物——然うです、決して人間が發明した物ではありません——を複製する限り詩に優つてゐます。少くとも當代の詩人は餘り人間の發明物に躊躇し過ぎると思ひます。彼等は描寫せずに說明するのです、有りつたけの身上を持ち出してお互に品物の商ひをする。彼等は單に知識の屑を集めるだけです。云はゞ贓品買ひですな。』

ルカ、ガレオット、それにメルチすら聲を揚げて制したがレオナルドは熱心になつてゐるので更に大聲で續けた。

『目は耳よりも自然の知識を一層完全に與へるのです。目で見る者は耳で聞く物よりも更に疑ふ餘地が少い。畫は沈默せる詩、詩は目に見えざる畫、即ち前者は後者よりも實證的科學に近爾してゐます。言語は次ぎ〳〵形象の連續を生ずるだけ、然かもそれは各個孤立してゐますが、繪畫に至つては然うではありません、あらゆる形式、あらゆる色が同時に現れて渾然と融和すること彼の音樂の一絃から發するあらゆる音調と異らないのです。ですから繪畫なり音樂なりが有する複雜なる調和はこれを詩に就いて見まするに兩者の以下に位してゐます。そして調和が豐富になればなるだけ喜びの情——藝術の目的、藝術の魅力なる喜びの情も豐富になります。ギドット君、君は誰でも好いから色女を有つてゐる男子に訊いて見て御覽なさい、あなたはあなたの愛人の容貌を言語で說明するよりも一層のこと其の畫像を有つ方が好いと思ひませんか、假令其の言語は第一等の詩人から出るものであつても矢張り畫像の方が好くはないですかと斯う訊いて御覽なさい。』

これを聞いて人々は破顏一笑した。レオナルドは直ちに論を續けた——

『これは私が親しく知つてゐる話ですからお聞きなさい。或る時私は宗教畫の中に或る婦人の顏を描いた事がありました。するとフロレンスの某といふ青年が非常に此の畫を欲しがつて到頭自分の手に入れたものですから畫面の宗教的な部分を悉く削り取つてしまひました。何故かなら自分の崇めてゐる女の顏に恐怖せず躊躇せず直ちに接吻したかつたからです。ところが覿面ですな、良心の聲が其の青年にありました、良心の聲は戀の欲念に打ち勝ちました、そして件の畫を手放して辛つと心の落着きが治つたのです。さ、此處です詩人諸君、諸君も又詞藻を以てこれと同じい猛烈な切望を男子から喚び起す事が出來ると考へますか？一寸念のため申しますがこれは決して私の事を言ふのではありません、私は未だ〳〵此の域に達しないのですから――達しない事は自分に分つてゐるのですから――私は唯技倆が渾然として完成した畫家に就いて言ふのみですから其の積りで願ひます。其の畫家は最早や人ではないのです。彼は神聖な、永遠な美の瞑思に懵然歡喜したり、巨大な、怪奇な、感傷的な、恐怖すべき形の研究に轉じたりして、一切のものを了知し且つあらゆる物に形體を與へます。彼は君主です、神です。』

これに類する感想はレオナルドの手帳の中に澤山書き留めてあつて僧ルカはこれらの草稿を整理して世間に發表せん事を勸めると共に自ら其の編輯の任に當らうとさへ言つた。然かもレオナルドはこれを辭した。そして決して公にしないと決心の臍を固めた。レオナルドの書いた物は凡て一讀者に宛てる形式であつた。そして自分の文章が聯絡を缺ける事並びに同一の趣旨を屢々繰り返す事を辯護して日記の一冊の卷頭に書き付けた――

『これを讀む人余を咎むる勿れ、題目は無數なるに余の記憶力は弱し、且つ余は長き時間を距て年を異にして記入するを以てなり。』

十一

三月の末つ方メルチの別莊へ不穩な報道が傳はつた。トレムーユを將とする佛蘭西軍はアルプスを横斷してロンバルヂーに馳せ下り再びミランを攻畧せんとするのに、イル・モロ公はあらゆる人々を疑ひ、迷信のため徒らに恐怖して敢て曠野に陣を布いて敵を邀へようともせず、日日『愚な女よりも周章狼狽』してゐた。

併し廣い世界から來た此の報道も別莊に對しては小さな聲が遠くの方でブン〳〵鳴いてゐる位にしか感じられなかつた。公や王の事は更々顧慮せずにレオナルドはフランチェスコを拉して、附近の丘陵、澗、森林を跋渉したり、折々はアッダの流れを遡つて松の密生せる山間に水

源を尋ね、人夫を雇うて化石貝、化石植物を發掘させたりした。

或る日の夕暮、二人は朝から歩み續けて疲勞した身體をアッダの險岸に懸かれる一本の老樹の下に休ませた。一望窮りなき平野は脚下に擴がつて、白楊樹は路傍に長い列を作つてゐるのが見え、ベルガモの白い家々は夕陽に輝き、雪を頂ける山々の巓は空中に浮かんでゐるやう、空はすつきりと晴れ渡つてゐたが怪しや遙か地平線に接せる遠くの方、即ちトレヴィリョ、ブリニャノ、カステル・ロッツォーネの邊と思はれる處に突如として一筋の明るい煙が見え始めた。

『何です、あれは？』とフランチェスコは訊ねた。

『さ、何でせう？事に依つたら戰爭かも知れません。多分火事らしいが……氣のせいか大砲が聞えるやうだ。大方ミランと佛蘭西の小競合でせう。』

蓋し此の種の不意の會戰は近頃屢々演ぜられた。二人は數分間默つて煙を眺めてゐたがやがて此の日に獲た發掘物に注意を轉じた。レオナルドは針のやうに鋭い大きな骨、即ち原始の魚の鰭を取り上げて感慨した——

『今日見付けたあの大洞窟で此の魚が永劫の眠に入つて以來、王や國民は何んなにか夥しく〔時〕のために滅ぼされたらう！そして此奴が一切人の目には觸れないで洞内に横はつて自分の骸骨で以て重い土壌を支へてゐた間に世界は何千年を閲したらう？何れくらゐ變化が起つた事だらう？』

そして手を大きく擴げて脚下にある綠の野を抱くやうな恰好をして語を續けた——

『フランチェスコ、今あなたが眺めてゐる土地は昔は凡て大洋の海底だつたのです、其の大洋は今の歐羅巴、阿非利加、亞細亞の大部分を浸してゐたのです。其の時分アペナイン山脈の巓は大洋中の群島でした、從つて鳥の囀る此の野には魚が泳いでゐたのです。』

レオナルドはそれなり口を緘して今一度遠くの方に靉ける煙と砲火の閃光とに眸を放つたが、これらは夕映のため薔薇色に染められて肅然として靜かな野の擴がりの中に在つて甚だ微微として殆ど目に這入らない程であつた。自分達の視界の内で唯今戰爭が始まつて殺し合ひを演じてゐるとは殆ど信じられなかつた。フランチェスコの心は脚下に見える戰火よりも塒に歸る鳥、人が忘却せる其の大洋の魚の方に忙しかつた。畫家も小兒も敢て口には出さなかつたが此の瞬間に胸には同じ思ひがあつた——

『勝利を得る者はロンバルヂーの人か佛蘭西人か、ルドヴィコか外國のルヰか、此の國の人か外國人かそれは取るに足らない一瑣事だ。國、光榮、戰爭、政略の爭ひ、高御座の顚覆、國

民の興起、凡そ人類に偉大の感を與へるもの、恐怖の念を起さすもの――これらは凡て彼方に見える小さな煙に等しい、あの煙は平和な薄明の中に溶けるのだ、大自然の不易な靜謐の中に融けるのだ。』

十二

レオナルドはフロレンスにゐた時分描き掛けて長い間其の儘にして放つて置いた畫があつたがそれを今ヴァブリオで仕上げたのである。唯見る巨巖峙ちて洞窟を圍み、聖母マリヤ其の中に坐して小兒の姿せる洗禮者ヨハネと聖子基督を各々片手に抱へて宛ら唯一の愛の緊密せる抱擁の中に人と神との結合を欲するかのやう、そしてヨハネは紅葉の手を合はせて、恭く基督の前に跪き、基督は指を二本高く上の方に擧げてヨハネを祝福してゐる。稚い裸體の救世主は裸の地に坐つて、ムッチリ肥えて窪みのある足を組み合はせ、沙の上につける太い片手の指の擴がれるのは未だ足の利かぬ事を示してゐるのに、圓滿なる智惠は早くも其の顏の幼い單純の中に入り交つてゐる。そして跪ける一人の天使は基督を抱き先觸れのヨハネを指してゐるが、傷い預兆をあり〳〵と浮かばせながら然かも一種不思議なそして溫かみの輝ける顏を此方に向けてしまつてゐる。巨巖の後ろは驟雨が催して其の中に太陽の靑白い光りを見るべく、藍色せる山々は空中に聳え立ち、峻峰は氣味惡るくも此の世のものとは思はれない。滑かなる岩石が鹽水の作用を受けて磨きを掛けたやうに光つてゐるのは素と海牀であつたのが今は干上れる事を示し、洞窟は深い影に鎖されて沸々と湧き上る泉は殆どそれと識別できないくらゐ、其の他水生植物の葉や紫の菖蒲の朦朧として靑白いのが此の窟の中に見えた。そして上に懸かれるアーチ形の黑雲石からは涓滴遲々として落ちるかと疑はれ、草の葉や下を這ふ雜草は何處までもじめ〳〵せる濕地と打ち濕める空氣の浸潤とのためグタリとしてゐるのに、單り聖母の顏のみは白石の如き美妙なる光輝を帶び、一道の光明が眩曜として燃えてゐた。天上の女王たる聖母は暗い薄光の中に坐しながら、地下の洞窟、そして自然界の最も幽秘なる場所（恐らくは古の牧神、幷に森の仙女が最後の隱れ家としたるところ）の中にゐながら、人の目に奕々と輝いて、神秘者中の神秘者、人にして神たる基督の生母として、萬物の母たる地球の胸臆深く閉ぢ籠もつてゐるのであつた。

實に此の畫は大畫家に兼ぬるに大學者たる人の作品たる事を證してゐた。明暗の動き、植物に宿る生命の法則、人體の解剖、服裝の知識、婦人のうね〳〵せる毛髮（此の髮の渦卷ける樣

をレオナルドは淵水の渦濤に見立てたのである)、並びに自然哲學者が(恕すなき峨嚴)を以て探り、數學に等しき精密を以て量り、解剖學者が人體を解剖する如くに解剖する一切のもの——凡てこれらをレオナルドは新らしき創作品、生命ある美、沈默たる旋律の中に混じ且つ神の母たる聖處女を頌せる神秘なる聖歌の中に混じたのである。愛に等しき知識を以て彼は菖蒲の花瓣に脈を描き、嬰兒基督の肘に窪みを描き、黑雲石の岩石中に古代の洞窟を描き、幽秘なる泉の中に水の搖らめきを描き、天使の微笑に於いて無限の悲哀の戰きを描いた。レオナルドは一切を知つて一切を愛した。果然大なる愛は大なる知識の娘である。

十三

或る日、錬金士ガレオット・サクロボスコは所謂(マーキュリーの棒)を實驗した事があつた。此の棒は桃金孃、巴旦杏、羅望子、其の他(古星的)樹木の類の總稱であつて、これらは凡て金屬と近緣を有するものと見做され、岩石の間にある金銀銅の鑛脈を發見するに用ゐられた。ガレオットはメルチに伴はれて鑛物の豐富を以て知らるゝレッコ湖の東に行つた。そしてレオナルドは此の行に加はつたが、これは(マーキュリーの棒)の効驗を信ずるからではなく却つてこれをばガレオットの他のくさぐさのまやかし物と同樣嘲侮を加へたのであつた。

カンピオネの山麓に位するマンデルロ村の附近に鐵の廢坑があつた。數年前土が陷落して多數の坑夫は生き埋めになつたのであるが噂に依れば鑛坑の底に罅目が一つあつて其處から硫黃の氣が噴き出てゐるとのこと、そして坑内に石を投ずると石は何處までも下の方へ落ちて行つて坑の底に打ち當る音は聞えないからこれは疑ひもなく底なし坑であるとの事であつた。レオナルドは右の口碑に好奇心を挑發されて一行の人達が忙はしく魔法棒を試驗してゐる間に鐵坑を探る事にした。百姓共は此の坑に惡魔がゐると信じてゐるので容易に案内者が見付からなかつたが漸つとの事で老人を一人雇つた。中央の竪坑に通ぜる洞坑の路は眞暗で非常に嶮しい且つ段が毀れて兎もすれば足は滑つた。案内の老人は先に立つて角燈を提げてのろ〳〵歩むし、レオナルドはフランチェスコと共に其の後に隨いた、蓋し小兒はレオナルドに同行を求めて止まなかつたので彼は已むを得ず連れて來たのであつた。段を降ること二百以上、然かも依然として降りて行つた。通路は益々狹く益々峻しくなり、地下濕潤の氣は鼻を打つて、ために窒息しさうになつた。レオナルドは鋤で坑壁を叩いて其の音響を聞いてから罅かして取つた岩の一片を檢査し、土の性質、並びに其の層、花崗石の脈中に閃々と輝く雲母なぞを檢査した。

其の時小兒は自分に獅噛み附いてゐるのに氣附いたので、恐いのですかと微笑して訊いた。

『あなたと一緒なら些つとも恐くはないんです』とフランチェスコは言つたが、やがて臆するやうに、『あなたは他處へ行つちまふの？お父樣が然う言つたが本統なの？』

『然うです。』

『何處へ行くの？』

『ロマーニャです、ヴァレンチノ公へ。』

『ロマーニャつて大分遠いのですか？』

『ロマーニャへ行くには幾日もかゝります。』

『幾日もかゝる？』と小兒は溜息した。『それではこれ切りあなたに會へませんね？』

『何故？會はうと思へば直ぐあなたの家へ行きますから。』

少年は思案した。そしてレオナルドの首玉に嚙り附いて叫んだ——

『僕を一緒に連れて行つて下さい！レオナルドさん、一緒に連れて行つて下さい！』

『駄目です、そんな事が出來るものですか？彼方でも矢張り戰爭が始まつてゐるのです。』

『戰爭なんかは構やしない。あなたとゐるんなら何にも恐かないと言つたではありませんか。此の坑の中より最つと〳〵恐い處だつても些つとも恐かあないんだから。あなたの下男になつて着物にブラシを掛けたり、馬に枯草をやつたり、貝殼を探したりするから。それから木の葉を描いて上げます。ほら、あなたは何日かフランチェスコさんは葉を描くのが巧いと言つたでせう。大人のやうに何んな用でも足すから連れて行つて下さい。吩付ける事は何でも屹度其の通りにするから。だからレオナルドさん、連れて行つて下さいな！』

『併しお父さんは何うです？お父さんは諾と言ひますか？』

『お父樣に泣いて賴めば肯いて呉れますよ。若しか可けないと言つたら逃け出すんです。ですから連れて行くと言つて下さい。ね、然う言つて下さい、レオナルドさん！』

『可けません、フランチェスコ、そんな馬鹿な事を言ふものではありません。あなたがそんな事を言つてもお父さんの許を出たくはないのです、ちやんと私は知つてゐます。お父さんは年を取つてゐらつしやる、あなたはお父さんが好きなのだ。』

『え、そりやお父樣は好きです。だけどもあなたも、レオナルドさん、あなたも好きです！未だ小つちやな奴だとあなたは思つてらつしやるのでせうが幾ら小つちやいたつてちやんと皆んな知つてるんです。家のボーナ伯母さんはあなたを魔法使ひだと言ひました、學校のドン・

ロレンヅオ先生も矢張り然う言つて、レオナルドさんは惡人だ、レオナルドさんと一緒にゐるとあなたの魂が亡くなると言つて聞かせました。學校の先生があなたの事を斯んなに惡く言つたけれど、巧く言ひ返してやつたもんだから口惜しがつて僕を打ちさうにしたんです！』

そして突然小さな目に涙が一杯に溜まつて唇がへの字形になつた。

『分りました、分りました、あなたがそんなに言ふ譯が分りました。あなたは僕を厭やなのだ、そして僕は……』と言ひ掛けてワッと泣いた。

『お默り！お默り！そんなに泣いたりしちや見つともないからお默んなさい！そして私の言ふ事をお聽きなさい。可いですか、フランチェスコ、最う何年か經つてあなたが大きくなつたら私の弟子にして上げる、そして始終私の側に置いて上げるから。』

小兒は目を仰向けた。長い睫毛は未だ涙に動いてゐる。

『だが本統ですか？氣休めにそんな事を言つて、後になつたら忘れるのではないですか？』

『決して、フランチェスコ。誓つて置きますから。』

『誓ひなさる？そして何時まで待つの？』

『八年か九年くらゐ、少くとも十五にならなければ可けません。』

『八年！』と小兒は嘆息して指を折つて數へてから、『其の時になると始終あなたと一緒にゐられるのね？』

『死なゝい限りは然うです。』

『八年と。ぢや好いです、あなたが然う言へば確かだから。』

そしてフランチェスコはニコ〳〵して特殊の美しい身振りをしてレオナルドに頬摺りした。

『レオナルドさん、何時だつたか僕、夢を見たんです——暗い中で矢張り斯んなに長い〳〵階段を降りて行きました、其の階段はこれとは違つて始まりも終りもなかつたのです。けども些つとも恐かありませんでした、誰だか連立つてゐる人があるからそれで恐かなかつたんです。あの僕のお母樣ね、未だ僕の目の明かない中に亡くなつたお母樣だらうとその時は思つてゐましたが、今初めて本統の事が分りました、あれはレオナルドさん、あなたでした。あなたと一緒にゐるとお母樣とゐるやうに嬉しいのです。』

レオナルドは名狀すべからざる溫情を含んで小兒を眺めた。清淨な目は輝いて美しい唇をば母に寄せるやうに距てなく持つて來た。そしてレオナルドは其の唇に接吻したとき小兒は自分に魂を呉れたのだと感じた。そして鼓動する小兒の小さな心臟を直と自分の心臟に押し附けて

歩み確かに地下の夜の中へ降つて行つた。

十四

ヴァブリオへ歸つて見ると佛蘭西軍が接近して來ると言つて村は大騒ぎであつた。ルヰ王はミラン市が謀叛を企てたのに赫怒して同市府を殘る隈なく劫掠して宜しいと軍隊に令した。多數の市民は山の方へ逃げて來た。家財を積める車、子供を連れて泣く〳〵歩む婦人、それらの行列は街道に涯もなく續いた。夜、別莊の最も高い窓から見ると依然ミランの方に火が見えた。ロンバルヂーの運命を決すべき一大血戰がノヴァラで始まる筈で、それが今か〳〵と日々待たれてゐた。

そして到頭ルカは戰爭終局の悲報を齎した。初め戰爭は四月十日と定まつてイル・モロ公は期に先ち兵を檢閲したとき瑞西の傭兵は進發を肯じなかつた、蓋し彼等は竊かに總督トリヴルチオに買はれたからであつた。公は涙を流して何うか自分の破滅になるやうな事をして呉れるな、忠義振りを見せて呉れゝば莫大なる額を報いるからとさへ悃願したけれど全然徒爾に終つて瑞西兵は心を飜へさなかつた。

そこで公は妾を僧侶に變へて逃亡せんとしたが、瑞西兵シャッテンアルプなる者これを佛蘭西の士官に密告した。公は捕へられて元帥の前に曳かれた。元帥は賞として瑞西兵に銀子三十枚を與へた。

トレムーユは令を下して公を佛蘭西に護送させた。宮廷詩人の所謂《神が運命の車を廻轉させた以來の第一人者》たる彼イル・モロは唐丸籠に入れられて、其の籠は荷車の上に載つた。其の狀宛として罠にかゝつた猛獸のやうであつた。公は警護の兵に一つの頼みをした。それはダンテの神曲を囚はれの身の友としたいと乞ふたのであつた。

メルチの別莊は日々危險に迫つた。佛蘭西兵はロメルリナを奪掠した。ヴェニス軍はマルテサナ掘割を破壞した。ヴァブリオの附近に强盜が出沒した。ヂェロラモ・メルチは逸早くフランチェスコと叔母ボーナとを伴つてキャヴェンナに避難する準備をしてゐた。

別莊の最後の夜が來た。レオナルドは當日得た感想を記して言ふ。

『尾は小さいが翼の大きな鳥が烈しく翼を動かした。そして翼の下に風を入れて高く飛ぶためにクルリと廻轉した。今日即ち四月十四日、私はベルガモ街道にあるヴァブリオ教會堂の上に若鷹を見て此の事を觀察した。』

そして何心なく其の紙の縁に附記した――

『イル・モロは彼の國、彼の財産、彼の自由を失つた。彼の事業の一として彼の手に依つて成就されたものはない。』

即ちスフォルツァ家の滅亡も、前後十六年間仕へてゐた君公の破滅も、レオナルドに取つては猛鳥の飛翔よりも興味が少なかつた。

十一の巻　翼を有するやうになる――一五〇〇年

鳥の如き人が初めて飛行をなすとき、世界は驚駭に満ち、あらゆる書物は彼の名譽を以て埋まり、彼が飛立つた其巣に永遠の光榮を齎す事であらう――レオナルド・ダ・ヴィンチ。

一

レオナルド・ダ・ヴィンチの故郷はヴィンチと名くる小さな町であつた。町はタスカニーのアルバノ山の西麓にあつて、フロレンス、ピサの間に位し、エンポリから餘り遠くなかつた。故郷にフランチェスコ・ダ・ヴィンチといふ叔父があつたが、これは絹織業に從事して財産を作つた人で、ダ・ヴィンチ家中此の叔父ばかりはレオナルドに溫い心を有つてゐた。で、レオナルドはローマニャへ行く前に叔父を訪ねて出來得べくば墜落して未だ本復しないアストロを預かつて貰ひた

いと思ひ立つた。蓋し藪醫者の調合藥を服用したり外科の試驗に供せられておもちやになるよりも靜臥して山氣を呼吸する方が病人のためになるからであつた。斯くてレオナルドはフロレンスに二三日滯留したのち、自分一人騾に乘つてヴィンチへと志した。即ちフロレンスのプラト門を出て道をアルノの河岸に取り、エンポリで廣い本道を捨てゝ紆餘として狹い山徑を縫つて行つた。此の日はどんよりと曇つて肌寒く、夕暮の太陽は堤の如き霧の中に沒したが、此の霧はやがて北風の吹き來る事を知らせるのであつた。左右の眺望は益々擴がつて、岡は次第に高くなり、勾配は未だ緩やかながら、岡の後ろに高山の屹立せる事を思はせた。地面は黑ずんだ綠色の草が疎らに生えて、褐色の土が鹿子形に縞を成せる畑、石垣、灰色の橄欖樹等、凡て色の調子は薄黑い中に白味を帶びて、北部地方の平穩と單純と貧弱とを示してゐた。此處彼處間を距てゝ一つ屋の敎會堂の側、或は窗を鎖せる農家の黃色い壁に接して、先が尖つてどゝ、黑い絲杉が物靜かな連岡と澄み渡つて且つ微やかなぼかしを成して居る空とを目掛けて突つ立つてゐたが、此の樹は早い頃フロレンス派が描いた畫の中に屢々見受けるのであつた。

山徑次第に峻險を益して空氣は新鮮且つ爽快になつた。サント・アウサノ、カリストリ、ルカルヂ、サン・ヂョーヴァンニを通り越すと、日は落ちて雲の絕えた靑空から一つ又一つ星が輝いた。案に違はず風は吹き始めて、トラモンタナと稱するアルプスの鋭い吹き下ろしが起つた。最早や低地の面影はすつかり亡くなつて、野が岡に變つたと同樣、今度は岡が山と變じた。そして徑が一曲り曲つたとき忽然ヴィンチの小邑が見えて來た。あゝ彼の町――石造の小さな家家は岩石に據り古城の黑い塔を周つてうじや〳〵群つてゐる。そして其の岩石の上に聳える小山は低いけれども峻しい姿であつた。

其の小山の麓に近い四辻に小さな祠があつたが、これはレオナルドが極く小さな子供の時分から見知り越しの物で、土細工の聖母像は靑硝子、白硝子の內に嵌められ、像の前には常燈明が點れてゐた。此處を通り掛りに見ると一人の女が首を垂れて跪き、兩手で顏を蔽うて悄然と祈つてゐた。地の薄い黑色の着物は雨に叩かれ風に吹かれて汚れたる上にズタ〳〵に裂けて見るからに憐れな百姓女たる事が察せられた。

レオナルドは我れ知らず小聲で『カテリーナ！』と叫んだ。カテリーナとは自分の母の名であつた。母も又憐れな百姓の女房、たび〳〵此處へ祈りに來たのであつた。

細徑は山の急流を橫切つたのち雜草蔓れる庭園の壁と壁との間を右手に折れた。庭園はすつかり暗いため薔薇の花が顏に接吻して淸香を空中に發してゐるので漸く其の枝が園の外へ出て

ゐるのだと知つた。レオナルドは園の壁に通ずる古木戸の前で馬を下りて鐵の止め物を石で叩いた。此の家は素とレオナルドの祖父の所有であつたのが祖父から叔父フランチェスコの手に移つたもので、レオナルドは幼い頃を此の垣の中で暮らしたのであつた。それが今は誰一人自分の音訪れに答へて出る者がない。暫らくの間水車の水の激する音、老いた番犬の震ふやうな吠聲が聞えるのみであつた。

やがて一人の老人が出て來た。顏は皺くちやで腰は弓のやう、髮の白きこと銀の如く、手に角燈を携へてゐた。耳は甚だ遠きが上に老耄れてゐるため辛つとの事で此の人がレオナルドだと認めたのであつた。

これは四十年前自分の手の中に抱かれてゐた人だと到頭氣付いた時、老園丁ヂアン・バッチスタはそゝくさと角燈を下に置き、嬉し涙に咽んで身をかゞめながらレオナルドの手をば唇でモグ〳〵嚙むやうにして、

『おゝまあ、あんた、レオナルド樣！あんたはまあ！』と啜り泣きした。犬の方では又愚め顏に老園丁に尾を振つて見せて、唯今の事柄は明瞭に私に分つてゐますと言ひたげな素振りをした。老人の言に依ればフランチェスコは兼て知り合ひの法師から胃痛の藥を貰ふため唯今は其の方へ行つてゐて二日ばかり家を明けてゐるとのこと、それでレオナルドは明日弟子のヂョーヴァンニがフロレンスから此處へアストロを連れて來る手筈になつてゐるので主として其の理由から叔父の歸りを待つ事にした。

老園丁は客を家の中に入れて髮も顏容も美しい今年十六になる孫娘に命じて夕餐の支度をさせようとした時、レオナルドはそれを止めて、パンと自製の酒とそれに此の家の所有に係る泉から湧く鐵鑛泉と此の三品を求めて其の他の御馳走を辭退した。蓋し先祖代々約しい簡易生活を旨としてゐるので此宅の叔父も一廉の金持ちでありながら此の家風を墨守して苟くも贅澤な事は微塵たりとも近づけなかつたからである。

レオナルドはよく知つて居る室に通された、これは臺所と室間との兼帶部屋で、其處らに並べてある少許の椅子、長椅子、櫃の類は孰れも無器用な作り方、然かも大分年代を食つてゐる事は滑かな光澤の出てゐるのでそれと察せられた。戸棚には重い白鑞の食事皿が澤山に置いてあり。天井の梠から藥草がブラ下がつてゐるし、壁は白ペンキを塗つた計りで何の飾りもなく、牀には煉瓦が敷いてあつて無暗に大きな爐は煤で汚れてゐた。

以上はレオナルドが記憶してゐたと少しも異らなかつたが唯つた一つ目新らしい事があつ

た、即ち昔は窗に桐油を張つてあつたのに今は稍黒味がゝつた綠色の厚い硝子を嵌めてある事で、これは上天氣の際室内を薄暗くする用意であつた。それから二階にある寢室の窗は木造の鎧戸で鎖されてゐたが、しつくり締まらないため左迄寒氣は防げなかつた。

園丁は匂ひの高い杜松と山に生えるヒースを燃やして火を拵へてから土燒の吊ランプに火を點じた。ランプの形はエトルリアの墓にあるものに似てゐたが、獨りこれのみならず此のタスカニーの地の器物、習慣、言語は人の記憶に留まらぬほど古い時代の面影を傳へてゐた。娘の子が酒とパンと萵苣のサラダとの夕餐を調へてゐる間に、レオナルドは二階に上つて部屋部屋を見て歩いたが以前此處へ來た時と少しも變りはなく、四本脚の大寢臺は相變らず目に付いた、自分はよく此の中へ這入つて祖母に寢かされたもので、今は他の重代物と共に叔父の手に傳はつたのである。壁に懸かれる耶蘇受難像、聖母像、聖水の貝、ネッピアといふ名の干し草、草書の拉典語で走り書きに書いてある祈禱文書（此の書物は隨分古いため紙は甚だしく黄ばんでゐた）なぞは能く見覺えがあつた。

そして客間に歸つてから爐邊に坐して氣持ち好い橄欖樹の匂ひのする木杯で飲み始めたが、其の間にヂアンと孫娘は彼方へ行つて寢に就いたので自分だけ室内に殘る事になつた。即ち擅に幼時の樂しい思ひ出に耽つた。

二

先づ父ピエロ・ダ・ヴィンチの事が頭に浮かんだ。父はフロレンス民主國の下に公證人を勤めてゐた人で齡正に七十、白髪の老人ながら未だ矍鑠たるもので、現にレオナルドは二三日前フロレンスのギベルリナ町にある父の宅にゐたのである。凡そ此のピエロくらゐ生活を（但し單調なそして厚かましい生活を）愛好した人は未だないと言つて好い程で、長子たるレオナルドに深い愛情を寄せてゐたが嫡子アントニオ、ヂュリアノの二人は父が此の庶子に溺愛する餘り家の財産を分けてやるやうな事があつては大變だと氣を揉んで、種々父子の仲を割く事に努めた。

即ちレオナルドは生みの親の家にゐながら赤の他人のやうだと感ぜざるを得なかつた。就中腹違ひの弟アントニオはレオナルドを無神論者と思ひ込んでゐるため一倍僻みを見せた。蓋しアントニオは熱心且つ嚴格なサヴォナロォラの信徒即ち稱して會葬人と云つた中の一人である上に羊毛商組合に屬して因習を尙び道德を念とし錢を愛する商人であつたからで、彼は屢々基督教の信仰、懺悔の必要、當代哲學者の異端に傾く事などをレオナルドに語つて聞かせて、自分

が編輯した(魂を救ふ法)なる書を呉れた。レオナルドはそれをポケットに入れて置いたが、今叔父の家の煖爐の前で坐しながらこれを引き出して見た。骨を折つて小さな字で書いてある此の小本は成程商人の手仕事に適はしいもので、

本書はフロレンス人たる余即ちアントニオ・デ・セル・ピエトロ・ダ・ヴィンチの編輯に係る懺悔の書にして義姉ナンナに贈りたるもの、凡そ犯したる罪を懺悔せんとする人々に有用なる書なり

と記してあつた。

弟の此の冊子を見ながら彼は自分が幼少の頃強ひられた傳襲と町人氣質から成る敬神の念が此處にもブン〳〵匂うてゐるなと思つた。此敬神の念は實に代々親讓りの家寶であつた。レオナルドの生れる一世紀前にゐた當家の人々は矢張り父ピエロに似て細心深慮、努めて客嗇を行ひ、敬虔なる僕としてフロレンス民主國の下に住んでゐたのである。先祖の名の初めて書き物に見えたのは千三百三十九年で、公證人ミケレ・ダ・ヴィンチなる人の事が記されてあつた。其のミケレをレオナルドは今尚ほはつきり記憶してゐる祖父のアントニオのやうな人であつたらうと想像してゐた。祖父は子息に教訓するに何等高きを望まぬやう、又名譽、榮聞、文武の公職、法外な富、法外な學問を望まぬやうにと說き聞かせた。

そして(低きに處るは最も安全なり)とは彼の不易の金言であつた。石橋を叩いて渡るやうな此の金言を祖父が口にする時の眞面目さ、泰然自若たる容子をレオナルドは思ひ出した。

三十年振りで此の祖父が有つてゐた家の屋根の下に坐して風の唸りを聞き煖爐に燃える薪を見詰めながら、自分の生涯は長い間(蟻蛛蜘)政略の軋轢であつたと共に又豐かに咲き綻べる花であつたと考へた(此の花は弟アントニオに依れば寧ろ節制のコンパスを以て測り鐵の鋏を以てこれを剪むべきであつた。)

三

翌る朝老園丁が目覺めぬうちにレオナルドは家を出て憐れにも小さなヴィンチの町を通つて隣村アンキアーノに達する險しい道を登つて行つた。昨日と同じく太陽は色が失せて冬らしく寒く、雲なき冷めたい空の藍色は遙か地平線に漂へるぼんやりした紫色の中に溶けて、トラモン

タナ即ちアルプス颪は強く北の方から吹いて、ヒュー〳〵鳴る一本調子の音を耳の端で唸つた。植物も依然無色に近く且つ貧相で、痩せた小半圓形の葡萄畑、疎らに生えて活氣に乏しい草は罌粟の搖れに混ざつてゐた。そして到る處沙塵にまみれて灰色なせる橄欖樹があつて、其の幹は非常に古いので瘤が出來て黑ずんで曲りくねりしてゐた。そしてアンキアーノ村に這入つたときレオナルドは思はず足を停めた。何故なら見ようと思つて來た場所が見當らないからで、即ち斜曲城と並びに此の城の塔（斜曲城には數多の塔があつたが其の頃これ一つのみが殘つてゐたのである）の中にあつた一軒の酒店とは共に跡形もなく消え失せて其の廢墟には今は葡萄畠が拓かれ滑かな白壁の家が一軒建つてゐたからで、そして一人の農夫が葡萄の樹の間に溝を掘つてゐたが、其の說明に依ると件の酒店の主人が死んでから地所をばオルビニャーノから來た羊飼ひが買ひ取つて、城址を取り拂つて葡萄畠と橄欖の林とに切り拓いたのであつた。

レオナルドが其の小さな酒店を見に來たのには相當の理由がある、彼は實に此の酒店で生れたからで。

五十年前の頃アンキアーノ村の此の酒店は非常に繁昌した。店は往來から少しく引き下がつて酒旗は樂し氣に風に翻り、近村の人達はサン・ミニアト又はフチェッキオに開かる〻市に行く道すがら凡て此所で會合する事にしてゐた。其の村民は羚羊を狩る獵夫、馬子、收稅吏、其の他これらの人と一座になるのをさして嫌はない氣質の人達であつた。酒屋の女中は十六になる孤兒で、ヴィンチ町の田舍乙女、其の名をカテリーナと云ふのであつた。

偖て千四百五十一年の春の一日、フロレンスの公證人ピエロ・デ・セル・アントニオ・ダ・ヴィンチなる者此のアンキアーノ村へ招かれて、或る油搾器械の六分の一に當る借地契約證書を作成した事があつた。そして其の用が滯りなく濟んだので百姓達は斜曲城の古塔にある酒屋へ此の公證人を請待したところ、素よりピエロは常に慇懃にこれらの賤民に接してゐた事とて一議に及ばず右の請待を受け納れた。其の時酒宴の席に出たのはカテリーナであつた。そして未だ年若い公證人は後に白狀した通り一目見て此の女中に參つたのであつた。それからはフロレンスに歸る事を延ばすため鶉狩といふ口實を設けて繁々酒店に通うてカテリーナを攻めたてた。

ピエロは當年取つて二十四歲、容貌の秀麗に加ふるに膂力强く、幾分めかし屋の風さへあつて、夙に女たらしとして饒名を馳せ、剩へ戀をする男になくて叶はぬ辯舌、自信ある辯舌があつた。

初めカテリーナは孤疑して聖母に祈つて冥助を求めたが、それでも到頭兜を脫いでしまつた。

そして鶉がニエヴォレの谷を飛び去つた頃身持ちになつてゐた。

父アントニオは子息のピエロが村の居酒屋の女中と乳繰つてゐる次第を直きに知つてこは一大事とピエロをフロレンスへ引き寄せ、大急ぎに急いでヂョーヴァンニ・アマドリの娘アルビエラを嫁として押し付けてしまつた。アルビエラはさして若くもなければ又美人でもなかつたが唯持參金だけは夥あつた。父は又アッカタブリーゲ・デ・ピエロ・デル・ヴァッカといふ百姓にカテリーナを娶らせたが、此の百姓は酔つ拂ふとカテリーナを死ぬ程打擲するといふ噂が立つた。ピエロの父の處置にカテリーナは一言も爭はずに言ふなりになつたが内心の悲歎の遣る瀬なさに遂に熱病を發して牀に就いた。そして生みの子レオナルドに乳を哺る事が出來ないためアルバノ山から山羊を連れて來て其の乳を呑ませてゐた。一方ピエロはカテリーナの子を家へ引き取つて養育したいと父に乞ふたが、これは當時にあつては手かけの子供のある事を格別恥としなかつたからで、それのみならず庶子は往々嫡子と同じ資格を以て教育を受け時としては却て嫡子よりも愛好される事さへあつたのである。斯くしてレオナルドは德を持する事嚴に神に仕へて敬虔なるヴィンチ家に引き取られて祖母レナ・デ・ピエロ・ダ・バッカレートの愛護に託さるゝに至つた。

母カテリーナをレオナルドは恰ど夢の中で見たやうに覺えてゐたが就中あの微笑――瞬間的ながら神秘に滿ちて纖美に、且つ溫乎たるうちに慳のある微笑こそは最も深くレオナルドの記憶に留まつてゐた。そして其の微笑は美しい中にも愁ひを含んだ顏（それを非道く峻い顏だと思ふ人がないではなかつたが）に常に現はれる表情と不思議にも反對してゐた。嘗てレオナルドは地球に於ける太古の女神シベリーの古いそして小さな青銅像の顏に其の微笑を見た事があつた。そしてそれは實にヴィンチ家の若い農婦、即ち自分の生母の特徵として記憶してゐるものと同じ美妙な微笑であつた。

レオナルドは心の中で思つた――

『粗服を着てゐる山の女の方が何れ程盛裝の美人に優るか知れない！』

カテリーナを知つてゐる人達はレオナルドは母に似て、すらりとした長い腕、金髮、微笑は確かに母から承けたのだと言つてゐた。父のピエロからは巖疊な體格と生活の醍醐味ともいふべき健康とを承け、また彼レオナルドが有する殆ど女性に近い魅嬌の力は母から承けたのであつた。父の家で養育されたけれど全然母のカテリーナから遠ざかつてゐた譯ではなかつた。蓋し母の家は祖父の別莊の近くにあつたので、丁度晝頃アッカタブリーゲが牛を連れて外へ出て行つてゐる時分に葡萄畠の間を通つて塀に搔き上つて母のところへ走つて行くと、手に絲繰棒を

持つて闘の上に立つて我が子を待つてゐた母は、それと見るなり兩手を擴げて抱かうとするので、レオナルドは行きなり其の手の中へ飛び込むと、目や唇や髪に無暗と接吻するのであつた。それから夜は又アッカタブリーゲが屋酒屋で賭博をして大酒を飲んでゐるので、レオナルドは竊と寢臺を拔け出して、窓から無花果の樹に下りて母の家へ走つた。そして自分に樂しかつたのは露を宿せる草葉の冷めたさ、蚊喰鳥の啼き聲、足に怪我をさせた蕁蒜や石礫、遠くに輝く星で、若しや祖母が目を覺まして自分が家の中にゐない事を見付けはすまいかといふ心配さへ甘い氣分を與へて呉れた。

併し祖母のレーナも此の孫を愛して甘やかしてゐたのでレオナルドには祖母の記憶が明かに殘つてゐた。濃い鳶色の着物を着て、白い頸卷を附け、老いて皺のある顏は黑いけれど併し深切が籠もつてゐた。それから寢んねこ歌、古代タスカニーの製法に倣つて自分に食べさせるために燒いた饅頭から食慾を誘ふやうに發する匂ひなぞも記憶にあつた。併し祖父アントニオとは餘り好い和合が出來なかつた。初めの間祖父は自ら孫に敎へてゐたが、レオナルドは學問の方に氣が向かなかつたので、丁度七歲のときサンタ・ペトロニルラ禮拜堂の學校へ入學する事になつた。入學はしたものゝ矢張り拉典の文法は好きではなかつた。一體彼は生徒としては懶け者で、町の後ろの崎嶇たる谷間を迂路ついた擧句は其處で仰のけに寢轉んで鶴の飛ぶのを凝と眺めて羨望の餘り心を苦めたり、或は蕾を開いて見たり、色鮮かな花瓣や、花粉で蔽はれて蜜の濕ひある雄蕊を見て驚駭に打たれたりした。祖父は折々家にゐない事があるので、其時小さなレオナルドは一日中山へ遊びに行つて山羊の足跡を便りにするか又は嶮崖の端を傳ふかしてアルバノ山の絕巓に通ずる道を歩んだ。此の山の巓に立つて眺めると牧場、田圃、小林、森林の無限の廣袤が望まれるし、フチェラキオに散在する沼、ブラト、ピストイア、フロレンスの諸邑、アルプスの雪峰、並びに晴天の際は地中海の霧深い紺碧が見えるのであつた。そして到頭家に歸つて自分の姿を見ると身體は一面に埃だらけ、日に燒けて手は引つ搔かれ着物は裂けてゐるが、祖母は可愛孫のさも嬉し氣な樣を見ては叱る心にもなれず祖父アントニオに告口をするでもなかつた。父も叔父のフランチェスコもフロレンスにゐるためレオナルドの顏を見る事は稀で、從つてレオナルドは一人ぼつちの月日を送つてゐた。彼は學校友達と遊ぶ事もなかつた。彼等の遊戯を見ると自分が不快になるばかりであつた。或る時彼等は蝶の翅を捩いで苦悶する樣を見ては笑つてゐるので、レオナルドは顏を蹙めて靑くなりながら其の場を立ち去つた。そして彼が不平な顏をして居るので遂に其の苦情は祖父の方へ持ち込まれた。そこで祖父は大に怒つ

て笞つて嚇した上に實際階段の下の戸棚の中へ三日間入れた。レオナルドは公正を失せる長い鎖の丁度此の條の環を思ひ出したとき日記帳を取つて次の如く書き附けた――

『小兒のときに義務を果したゝめ監禁されるとすれば、大きくなつたら何んな目に遭ふだらう？』

四

其の頃ヴィンチ町から遠からぬ處に新築中の一大別莊があつて、棟梁はフロレンスの人でピアヂオ・ダ・ラヴェンナと云ひ、フロレンスの大建築師アルベルチの弟子であつた。レオナルドは其處へ行つて壁が築かれたり、或は石工が石垣を同じ高さに積み、或は器械で大きな石を上げたりするのを見てゐたが、或る日棟梁と話をした事があつた。棟梁は此の小兒が有する理解力に驚いて、初めは冗談半分に後には眞劍になつて算術、代數、幾何、機械學などを敎へた。そしてレオナルドは各概念をば宛らそれが翼の上に載つてゐるやうに易々として會得して自家藥籠中の物とするのを見て益々驚いた。餘り無造作なので、これは學習するのではない、單に記憶から取り出すのだとさへ思つた程であつた。然るに祖父は此の好き心に對して常に横目を使つて睨んでゐたが、就中此の子が字を書く際好んで左の手を用ゐるのに氣を揉んで緣起でもないと思つた、何故なら凡て飯綱使ひ、魔法使ひ、其の他惡魔と契約を結ぶ者は左ぎつちよで生れるからであつた。殊に隣家にフォルツニアノから來た者がゐて、其の人はレオナルドの哺乳した黑山羊はアルバノ山の或る老婆から買入れたものであつて然かも其の老婆は疑ひもなく巫女であつたと斷言したとき祖父の疑念は一段と高まつた。

『あの畜生、何うでも勝手にするが好い。併し彼奴が狼を養ふと其の狼も始終森の方に目を配るだらう。まあ好いや、一切天の思召しに從ふ事だ！何家だつても一人くらゐ出來損ひはあるものだから』と老公證人は獨りで思つてゐた。

それに付けても愛子ピエロに早く嫡子があれば好いと燒けになつて待つてゐた。斯くして道ならぬ戀の所産たるレオナルドはそれ以來甚だ名譽ある此の家に間違つて生れて來た者であるといふ事實を益々明白に示すやうになつた。元來アルバノ山にある動植物の色は大抵不思議にも白くなると言ひ傳へられて（これがためアルバノ即ち白いといふ名を得たので）此の山の森や牧場を徘徊すると白菫、白苺、白雀に出會したり、未だ巢立ちせぬ黑鶫の雛の白いのを見たりする事があつた。そして小レオナルドも又白山に於ける幾多の不思議の其の一つであつて、

フロレンスの德操高きそして平凡な公證人の家の變り種であつた。黑鶫の巢の中に大きな白い杜鵑がゐるのであつた。

五

レオナルドは十三のときヴィンチ町からフロレンスの父の家に移されて、それ以來故鄕を訪ねる事は稀であつた。それからずつと後、千四百九十四年に書いたレオナルドの雜記帳の一冊に《昨年七月カテリーナ來る》との文字が見えたが、これは恐らく下女を雇ひ入れたといふ意味であらうと人々は解してゐたが、其の實該記事は生母の事に關はるものであつた。カテリーナは既に夫を失つてゐたし、それに臨終が追々近いて來る事を知つて、責めて一度なりとも倅の顏を見たいと切望した餘り、ミランに擧行される聖釘の祭禮に行く賽客の一行に加はつて、タスカニーから遙々レオナルドの家へ來たのであつた。レオナルドは深い敬愛の情を以て母を迎へた。母に取つて彼は依然たる小兒のレオナルドで、夜竊かに跣足でやつて來ては自分の側で横になる昔の儘のナルドであつた。

母はアンキアーノへ歸らうとしたがレオナルドは肯かずに、ヴェルチェルリナ門に近いサンタ・キアラ寺の靜かなそして萬事につけて便利な一室に母を住まはしめた。後にカテリーナは病氣に罹つたとき、フラチェスコ・スフォルツァ公の建築に係つてミランの病院中最も壯麗な大病院（ッヴァオーレ）に自ら求めて這入つたが、其の入院の數月の間レオナルドは一日として母への見舞を缺かした事なく、最後には一時間として病牀を離れなかつた。そして斯くまで母を一念に懸けながら友人は勿論弟子にさへ母がミランに來てゐる事をば露ほども話さなかつた。

併し自分を生んだ此の農婦の冷めたい手に最後の唇を押したとき自分はありとあらゆる物を此の女に負うてゐるやうに思つた。そして母のために立派な葬式を出した。

それから六年にしてルドヴィコ・スフォルツァ公の沒落を見たのであるが、其の時レオナルドはミランを退去せんとして一つの櫃を開た。すると丁寧に包んである小さな風呂敷包みが現れたので、それを解くと帆布で拵へた粗末な肌着が二枚、山羊の毛で織つた靴下が三足入れてあつた。これは母が倅のため手細工で拵へて態々ヴィンチ町から持つて來た物で、レオナルドは今まで一度もこれを着用せずに打遣つて置いたのが今や科學に關する書籍や器械、立派なリンネルの着物の中に此の見窄しい物を發見して名狀すべからざる感動を覺えた。そして後年自分獨り國から國、町から町へと流浪して歩いた時、憐れにも小さな風呂敷包をば最も大切な寶の中

に詰め込んで決して手放す事がなかつた。

六

幼少の頃馴染みであつたアルバノ山の坂に登つたときレオナルドの思ひ出は以上の如くであつた。今岩蔭に坐して記憶に明かな景色を眺めると、瘤だらけなそして矮小な櫟の樹は未だ枯葉を着けたまゝ前後左右に生えてゐるし、百姓が箒と呼ぶ馥郁たる杜松や、面恥ゆ氣な白い菫、並びて枯れて背の低い山ヒースの叢からは陽春の匂ひの感觸せられぬ新鮮な氣が立ち上つてゐた。遙か遠くにあるアルノオの河谿は天に接するかと見れば、裸々たる高峰右手に聯り聳えて蜿蜒たる陰影や、大蛇の蟠蹠せるが如き洞穴や、妙なる紫の廣い谿があり、直下に見えるアンキアーノは白色を帶びて日光に輝いてゐるし、向ふの方圓錐形の小丘に膠着せるヴィンチ町は宛ら山蜂の窩に似、其の城の塔はアンキアーノ街道に面して二本の絲杉のやうにくつきりと黒い。

自分が生れて初めて此の山道を登つた時と今とは少しも變りがなかつた。尤も四十年の其の時《等》は夥しく繁つて、菫と百里香は空氣を匂はせ、櫟の樹の枯葉はかさこそと鳴つてゐたのに、今はアルバノ全山に色もなければ、葉もなく北方の山たるに負かぬ觀を呈してゐるが、それでも古代人の所謂エトルリア、今の即ちタスカニー、永遠の春の地、錯りなき再生の地たる此の地方は、レオナルドの目には彼が初めて農婦たる母のカテリーナの顏に於いて見たと同じい美妙な、そして溫い、そして美しさの輝ける微笑を湛えてゐた（若し此の微笑がなければ流石の美も餘り端嚴に過ぎる嫌ひがあつた。）

レオナルドは立ち上つて歩み續けた。徑は益々險しく、風は益々冷氣を帶びて鋭く、愈々北地の風致を添へた。少壯時代の思ひ出は心に群づて湧き上る。

七

父ピエロ・ダ・ヴィンチは幸福な境涯であつた。業務の練達に加ふるに氣立ての善い人とて彼の生活は油を點せる車の走るやうに圓滿無碍に進んだ。生きよ且つ生きん哉――これが彼の金言で、何人とも能く調和したが就中僧侶社會との間は甚だ善く、サンチッシマ・アンヌンチアア僧院をはじめ、其の他幾多の富裕な財團の管理者として莫大なる財產に加ふるに更に夥しい富を得たが、然かも父から學んだ簡易生活を墨守して決してこれが變更を敢てしなかつた。

三十八歳の時に妻を喪ひ、直ちにヂョーヴァンニ・ランフレヂニ氏の息女フランチェスカを後妻に迎へた。フランチェスカは容姿雅美なる上に可なり年下であつたが前のアルビエラと同樣矢張り子がなかつたので庶子レオナルドは父と居を共にして九分九厘まで家を繼ぐべき見込みがあつた。

當時バオラ・ダル・ポッツォ・トスカネルリと云ふは天文學者、數學家として其の名著れフロレンスに住んでゐた。彼はクリストファー・コロンブスに書を寄せて他の半圓球から印度に到るのは世人が想像するやうに爾く遠距離でもなければ勞苦の多いものでもない、これは余の精確なる計算に徵して確實であると斷言して彼に冒險の擧行を激勵し且つ成功を預言したのであつた。即ちフロレンスの一學究が空寂たる小房の中で考察した事をコロンブスが實地に試みたので、新大陸の發見者は言はゞ樂師の手で奏でられた樂器であつた。時人はトスカネルリを稱して《聖者の生活》をなせる人と言つてゐた如く、彼は交際を避けて極めて質素なる生活を營み、身を持すること貞潔、赫々たるメヂチの宮廷に出入せざるは勿論、古代の新プラトーン派の模倣者流が集まつて空談する會に出席する事なく、容貌は不思議なほど醜いが眼光の烱々たるはこれを償ふて餘りあつた。

さて或る夜、未だ子供と言つて差支ない一人の少年が此の學者を訪ねて來た。トスカネルリは生半可な物好きから出た訪問と見縊つて冷かにこれを待遇したが、併し若いレオナルド——蓋し少年はレオナルドであつた——と語を交へる事少時にして此の天文學者は、嘗て棟梁ピアヂオ・ダ・ラヴェンナの時と同樣、少年が數學に對して驚くべき性向を有する事を知り、甘んじて彼の師となつた。夏の夜、先生はレオナルドを携へて自分の天文臺のあるポッヂオ・デル・ピノへ行つた。これは花の都を帶のやうに匝れる丘陵の一つで、松が一面に生え、ヒース草は毛氈を敷いたやうになつて香氣馥郁として漂ふてゐた。彼は宇宙の法則に關して自分の知れる限りの事を少年に敎へた。レオナルドが世の哲學者達の餘りに閑却せる自然に對して實驗的に研究するてふ信念を懷くに至つたのは實に此の時の敎授に基いたのである。

父ピエロ・ダ・ヴィンチは息子の學問に就いては何等干涉がましい事を持ち込まなかつたけれど今少し金になる職業を選ぶやうにと勸告した。そしてレオナルドが彫塑、繪畫の方面に嗜好を有する事を知つて其の作品の若干をアンドレア・ヴェルロッキオに示した。そしてそれから暫らく後レオナルドは正式に此の畫家兼金工に弟子入をした。

八

ヴェルロッキオは素と煖爐の火焚きを業としてゐた者の子で、レオナルドより長ずること十七歳、青味を帶べる容顏は靜肅として平かに、腭は二重に垂れ、屹と結んだ唇と鋭い目に於いてのみ不可思議な知性の閃めきがあつた。眼鏡を鼻の上に載せ、蟲眼鏡を手に持つてヴェッキオ橋の近くにある薄暗い店に坐せる彼は何う見ても詰らない店番のやうに見えてこれが大畫家とは兎ても受け取れない程であつた。彼はバオロ・ウッチェルロの門に出た人であるが、師と同じく遠近法は宜しく學理に叶ふべしと主張し、且つ（數學の一部分たる幾何學はあらゆる知識の母であつて同時に又繪畫の母である。そして繪畫はあらゆる藝術の父である）と言ひ、美を完全に知る事と完全に享樂する事とは同一不二であると見てゐた。ボッチチェルリ並びに其の流派の人々とは違つてヴェルロッキオは怪奇な美に接するとき恍惚として己れを忘れる事がない代り又異常の不具を拒斥する事もなく、兩者に於いて共に研究の機會を見出してゐた。初めて解剖學を應用して人物を描いた者は實に此のヴェルロッキオであつた。ボッチチェルリはオリンパスとゴルゴダとを一つに混じたるが如き神秘な靄、並びに奇蹟と妄誕とに於いて藝術の魅力を發見したが、ヴェルロッキオは忍耐刻苦して自然界の眞實相を攷究したる後、これを確實に把握するところに藝術が存すると見たのである。彼に取つて奇蹟は眞理ではなかつた。眞理が奇蹟であつた。

ピエロが入門せしめた十七歳の少年の師匠は實に斯くの如き人であつた。初め彼はレオナルドの師であつたが後には弟子となつた。嘗てヴァルロンブロサの法師から基督洗禮の圖を依頼して來たとき、ヴェルロッキオは其の畫中の跪ける一天使をレオナルドに割り當てゝ描かせたが、其の結果自分がこれまで朦朧と感得して宛ら霧の中を大骨を折つて遲々たる歩みを以て手探りに模索してゐた或る物を、此の弟子は直觀的に且つ明白に領會してゐる事を知つた。

後になつてヴェルロッキオが畫界から退いたとき人々は噂してそは蓋し此の若い弟子の技倆を嫉妬したからであると言ひ合つたが、其の實師弟の仲は膠漆も啻ならぬ程圓滑であつた。弟子には運筆の輕捷と精緻とがあり、師匠には堅緻と注意力の集中とがあつて、互に嫉妬せず、敵意を挾まず、兩者各如何に多く負ふところあるかを殆ど知らずに與に斯道に携はつてゐたのである。

其の頃ヴェルロッキオはオルサンミケレのために（聖トマスの不信）と稱する青銅の群像を製作

したが、これはアンヂェリコの作品に見る天上の幻夢と異ると共に又サンドロ・ホッチチェルリに伴へる夢幻的の主觀とも異つてゐた。釘附された基督の傷痕の中に指を突込みながら莞爾たる笑顔を示せる聖トマスの微笑は人間の大膽さを初めて神の前に於いて表出せるもの、正にこれ理性が奇蹟に向つて顔を突き合せてゐるのであつた。

九

レオナルドが一本立になつて描いた最初の作はフランドル織のカーテンの模様畫であつた。これはフロレンスから葡萄牙王に贈る獻上品で、畫題を人類の墮落と云ひ、椰子の葉、種々の花、極樂に棲める獸の描寫は精を竭し微を穿つてゐたゝめ批評家ヴァサリは不拔の忍耐に一驚を喫したくらゐであつた。

知慧の樹に片手を伸ばせるイーヴが好奇の大膽な微笑を帶べるは師匠ヴェルロッキオが聖トマスに與へたのと同じものであつた。

それから少し後に父ピエロはレオナルドをしてロテルラと稱する木の圓牌に繪を描かせた事があつた。ロテルラとは家々の飾りに用ゐる看板の事で、多くは寓意の畫を描く習はしとてレオナルドはメヅサの顔のやうな恐ろしい獸を描いた。即ち蜥蜴、蛇、蟋蟀、蜘蛛、百足、蛾、蠍、蝙蝠、其の他有害なるあらゆる動物を集めて其の特性を研究した後、各動物が有する眞性を夫々選擇し且つこれを誇張して、言はゞ寄せ集め物を以て一箇の怪物を揑つち上げた。此の怪物は決して存在しないのであるが、然かも一ユークリッド氏、或は一ピタゴラス氏の精密を以て或は有から無を引き出すを得て能く此の怪物の存在を可能ならしめるかも知れないのであつた。怪獸は將に岩窟を出ようとする圖で、沙上の鱗は黑光りして逆立ち、あんぐり開けた口からは惡臭を發して鼻孔から煙を吐き、目は火燄のやうに燃えてゐた。そしてこれは物凄い形相には違ひないが、然かもそが畸形よりも寧ろ魅力に於いて驚くべきものがあつた。そして其の魅力は美の魅力に劣らず力強いものであつた。

爬蟲類の死體から發する臭氣に毒せられて部屋の中は窒息するやうに苦しいのに、レオナルドはそれにもめげず晝夜共に熱心に研究し熱心に描いて遂に畫は出來上つた。そこで臺の周りに黑布を卷いて其の上に圓牌を戴せ、且つ光線が怪獸をのみ射るやうな工合にして置てから父を呼んで繪を見せた。ピエロは這入つて來て獸を見るなり思はず知らず後へ退つたが、やがて氣を鎭めて再び眺めたとき大恐怖の顔は見る〳〵大喜悅の顔に變じた。

『看板が出來上つたのです。預期した通りの結果を得ました。何うかお取りなさつて下さい』とレオナルドは言つた。

其の次ぎにサン・ドナト・ア・スコペトの法師から東方聖人拜禮の圖を注文されたが、此の畫の下圖に於いて披瀝した解剖上の知識並びに精緒を外形に表現するの知識とに於ては既往の如何なる畫家よりも優つてゐた。畫面の背景は殆ど古代希臘の風に模して美はしく描出せられ、聖母に抱かれたる聖子は內氣に微笑して異國の賢者が齎した貴重な奉獻の品々に驚異せるかの如く、一方賢者達は現世に關する古代の知識の重荷に疲れたと見えて膝を曲げ、頭を垂れ、目に手を翳して、奇蹟中の奇蹟即ち人の形を假りて出現したる神を一心に凝視してゐた。

最初の畫《人間の墮落》には理性の大膽即ち蛇の知慧を示し、此の拜禮の畫は鵠の清淨、換言すれば信仰の謙讓が表されて、兩者相補してレオナルドの哲學範圍を遺憾なく發揮してゐた。

併し此の第二の畫は遂に完成を見なかつた。これが仕上げを促まれて筆を取つては見るが到底打ち勝ち難き諸種の困難が生じた。レオナルドはペトラルカの所謂《餘りに烈しく渴するため假令渴を醫さうとしてもそれが出來ない》のであつた。

父ピエロは三たび妻を迎へて新妻マルゲリタにアントニオ、ヂュリアノが生まれた。そこで繼母はレオナルドを憎んで夫が適法に生れた兩子に讓るべき財產をば巫女の黑山羊に哺乳されたといふ庶子のために支出するのを責めた。これに加へて若き畫家は相弟子の間にも敵があつた。そしてレオナルドとヴェルロッキオが嘗て告發された事があるとチェサレがヂョーヴァンニに話した其の告發を敢て企てた者は實に右の弟子の一人であつた。そして此の讒訴が幾分眞實らしく思はれた所以は一つは兩者の交情が異常に親密であつたゝめ、今一つはレオナルドはフロレンスの青年中隨一の美男子でありながら（レオナルドと時を同じふせる某氏の言に依れば彼の外貌には美が輝いてゐたゝめ愁ひある心も彼を見れば喜悅を覺えるに至つたと）婦人との交際を避けてゐたからであつた。素より告發は全然事なきを得たが併し彼は師の許を去つて獨自で描くやうになつた。

すると此の度は異端に與し無神論を懷抱するといふ噂が立つて益々フロレンスに居堪らなくなつた。父はレオナルドを君主ロレンツォ・デ・メヂチに紹介したが元來此の大君は敢爲に過ぎ非因習に過ぎる精神家を嫌つて常に卑屈なる諂諛を欲するの人、然るにレオナルドは勿論かかる事をするに不適當な性格とて折角の紹介も徒爾に終つた。そして無聊に倦む餘り彼は埃及大使に談じてシリアの《ヂオダリオ》に對する主任建築師たらん事を望んだ。それにはマホメッ

ト教を信奉すべき必要のあるのを知つては居たが。彼に取つてフロレンスを去るのが唯一の希望であつた。そして機會は遂に彼に幸した。彼は銀を用ゐて馬の首の形せる多絃の琵琶を製作したところ、ロレンツォ・デ・メヂチの心に叶つて、これをルドヴィコ・スフォルツァに贈るため製作者自身に持たせてミランに遣した。

此の故にロンバルヂーの宮廷は科學者又は畫家としてレオナルドを迎へずに琵琶彈きとして迎へたのであつた。

併しミランに出立するに先ち彼は公に長文の書翰を送つて自分が公に取つて甚だ有用の材である事を進言した——

最も高名におはす君主、余は諸發明家の手に成りたる戰爭用の機械に就いて研究し且つ評價致し候ところ、何等目ぼしき新機軸を見ざるに依り、甚だ差出がましく候へ共敢て余の技術の秘奥を陛下に開陳仕るべく候。

一　余は橋梁に關して一工夫を心得居り候。これに依れば甚だ輕くして運搬するに易く、然かも甚だ丈夫にして火に燃燒致さず候。

二　要塞或は城にして堅緻なる岩石を切りて築けるものは格別、さもなくば爆裂彈を使用せずして如何なる種類のものをも破壞致す新方法を心得居り候。

三　塹濠乃至水流の下に在つて迅速且つ靜肅に坑道、通路を造るべく候。

四　敵に向けて大砲を運搬する際敵が抵抗する能はざるやうに保護されたる兵車を工夫致し候。

五　優美なる新式射石砲、大砲、臼砲、小砲を鑄造致すべく候。

六　並びに城壁破壞車、彈丸鑄造器、其の他驚駭すべき諸器械。

七　海戰に就いては攻守兩樣の工夫を有し居り候。即ち側面に石彈、鐵彈を受くるもこれを撥ね反す船、及び未だ何人も知らざる破裂彈との事に御座候。

八　又平和の際に在つては建築、公私の家屋造營、掘割、水道の工事を以て陛下の御滿足を得べく候。余は又あらゆる美術家と等しく繪畫、彫刻の術を心得候ゆゑ大理石、金屬、粘土を以て或は油の繪具を用ゐて御尊命に應じ得べく候。且つ陛下の御父君並びに高名なるスフォルツァ家の多幸なる記念のため騎馬像を青銅にて鑄造して永遠の光榮と致すべく候。

陛下若し上述の諸項中餘り誇張に過ぎ或は到底企及すべからざる事と思召され候はゞ請

ふ余は陛下の御苑に於いてこれを實驗して叙覽に供すべく候。或は御苑ならずとも陛下の御思召に叶ふ場所にて致すべく候。玆に陛下の優渥なる御眷顧にまで敢て不肖レオナルド・ダ・ヴィンチを推薦致し候。恐惶謹言。

そして初めてロンバルヂーの綠野の上に輝くアルプスの雪峰を見た刹那、自分は新生活に這入つたのだ、眞に自分の鄕國となるべき不可思議な國土に來たのだと感じた。

＋

アルバノの山路を登りながら回顧した五十年の生涯は以上の如くであつた。路は棒を立てたやうに直立し、植物は既に下方にて盡き、寂然として恐ろしい禿山は地球ならぬ他の遊星に屬するかのやう、そして氷のやうに冷たい風は猛烈に吹いて、ために目を開ける事が出來ず、石ころは足の下から壞れて轟々と谷間に落ちる。然かもそれに屈せず山を登つて行つた。一歩は一歩毎に眺望は擴がつて、周圍に聳える高山を次第に俯瞰するやうになり、從つて山々の寶ともいふべき草木は見えなくなる。山徑を攀ぢ躋る努力のために却て歡喜の情が湧いて來る。フ

ロレンスは眼界から逸して廣大なるエンポリ地方は脚下に擴がつた。先づ寒さうに黑ずんで廣い影を帶べる紫色の山々が見え始めて、それから無數の波濤のやうにリヴォルノからサン・ヂミニアノにかけて起伏せる丘陵が現れた。到る處空氣と虛空と空間とがあるばかり。狹い山徑は將に盡きんとする、宛ら自分は素晴しい翼に乘つて無限の擴りの上を飛翔してゐるやうに感じたが、併し自分が未だ翼を有しない事に思ひ到つたとき不意に足を切斷される時に感ずるやうな驚駭が起つた。そして自分が子供の時分毎時も鶴の翔るのを眺めてゐたが、其の鳴く聲が恰ど(此處までお出で)と自分を呼ぶやうに聞えるのに自分は空を飛んで鶴のゐる處へ行かれないのだと口惜しくなつて泣いた事を思ひ出した。こつそりと祖父の鳥籠を開けて鳥を放してやつたとき自由を得た鳥どもが勢好く飛ぶので、それを見て喜んだ事もあつた。それからアイカルスの話を聞くのが面白かつた。アイカルスは蠟で翼を拵へてそれで飛行しようと思つたのに不幸にも墜落して死んだのであつた。そして學校の先生が昔の英雄の中で誰を一番偉いと思ふかと訊ねたとき、自分は一秒も躊躇せずに《アイカルスです、デーダルスの子のアイカルスです》と答へた事を思ひ出した。それからヂオットが建てたフロレンスの鐘樓にある薄浮雕のうち自分の大切なこのアイカルスの拙い像を見出して有頂天になつた事もあつた。一體自分には幼稚

な時に得た一つの記憶が保存されてゐる、これは他人から見れば馬鹿々々しからうが自分に取つては預言の意味があつた。それに就いて自分は斯んな事を記して置いた——

『これは未だに記憶してゐるが私の極く小さな時分、搖籃の中で寢てゐると一羽の鳶が飛んで來て私の唇を開けて翼を唇で擦つたと思ふた事がある。だから私が生涯翼の事を口にするのは或は私の運命かも知れない。』

實に人間の飛行てふ問題はレオナルド一生の先入主であつた。四十年前の其の頃と同じく今再び白・モンテ・アルバノの阪に立つて以爲く、人類が翼を有たずにゐるとは堪ふべからざる不正である、寧ろ不可能の事に屬すと。

そして『一切を知る人は一切をなし得るのだ。私は知りさへすれば好い。知れば自ら翼を有するやうになるのだ』と考へた。

十一

山徑の葛籠折りをなせる箇處を登り了へたとき誰か知ら自分に觸るやうに感じたので振り反つて見るとそれは別人ならぬヂョーヴァンニ・ボルトラフィオであつた。ヂョーヴァンニは帽子を手に掴んで目を半ば閉ぢ、首を曲げて風と戰ひながら一しきり先生の名を呼んだけれどそれがレオナルドの耳に達かなかつた。先生が長い髮を疾風に靡かせ打ち勝ち難き意思を面に表して、目は思索を以て深く、額に皺を溜め、長い眉毛を八の字に寄せてゐる容子は此の弟子に甚だ奇に且つ恐ろしく見えて、宛ら別人のやうであつた。そして風に脹らむ赤マントの廣い襞すら化異鳥の翼のやうに見えた。

ヂョーヴァンニは努めて大きな聲で叫ばうとしたが息切れが甚だしいため切れ〴〵にしか言葉が出なかつた。

『今……フロレンスから……來たのです。手紙が……重要な手紙が參りまして……直ぐに先生の手に渡して呉れとの事でした。』

レオナルドはケーザル・ボルヂア公からの來翰だと推察したが果して公の秘書アガピトの手蹟であつた。

『さ、これで下へ降りなさい。私は直ぐ後から行くから。』

ヂョーヴァンニが寒さのため青くなつてゐるのを見てレオナルドは斯う言つた。そして弟子が暴風と戰ひつゝ山を降つて、小さな灌木の脆弱い枝に掴まり、岩石の上を這ひ、腰をくの字に

曲げて行く樣は周圍の事物に比して無暗と小さく、風伯の怒りに對して餘りに弱く、恰ど一切人類の〔弱さ〕を縮寫せるやうであつた。其のヂューヴァンニを凝と眺めながらレオナルドは不圖自分の全生涯が無爲に終るべき呪詛を受けてゐる事を思ひ出した。そして其の呪詛は菅に學友から寄せる同情を奪ふのみならず自分に永遠の石胎を宣告したのであるまいかと氣遣はれた。

『あゝ私の翼！翼も亦他の物のやうに失敗に終りはしないか？』と思つた。

そしてアストロが諺言の中で言つた事を思ひ出した。それは惡魔が深淵の恐怖、飛行の面白さを以て人の子を誘うたとき、人の子は〔主たる爾の神を試むべからず〕と答へた其の語であつた。

彼は頭を擧げ口を閉ぢ山と風とに打ち勝つて再び登攀した。徑は遂に斷えて恐らく未だ何人も足を踏み入れなかつたと思はるゝ裸々たる岩石の上に出た。そして突然自分は斷崖の緣にゐる事が分つた。其の斷崖は今が今まで目に這入らなかつた。霧深い黑ずんだ紫色は頭上に滿つると共に脚下にも塞がつて、恰ど空雲漠々たる天涯が上にも下にもあるやうに見えた。風は今は旋風と變つて雷鳴のやうに間斷なく吼え且つ唸つた。それは目に見えぬ惡鳥が次ぎ〳〵群を成して大きな翼を羽搏きして自分の側を飛び行くやうに思はれた。最早や先へは進めない。

自分が隨分久しく有つてゐる此の懷かしい翼の問題は未だ曾て斯くまで强大な力を以て逼つた事は一度もなかつた。飛翔力の理論と必然とを斯くまで强大に感銘させる事は一度もなかつたのである。

彼は叫んだ。

『必ず翼を有するやうになる！私が完成しなくても他人が完成する。翼は必ず製作されるのだ。精神は横になつて寢てゐるものではない。人間が一切を知つて翼を有つやうになれば實に一箇の神と化するのだ。』

そして人間の知性を局限せるあらゆる法則を絶しあらゆる境界を超えて空中王を心に描いた。光榮と力とを有して驤て來らんとする人の子、青空の中に光其の物のやうに輝ける白い巨大な翼ある大白鳥を心に描いた。

其の時彼の魂は恐怖に近い喜悅を以て滿たされた。

十二

アルバノ山を降りたとき日は沒しつゝあつた。尖れる絲杉は金色の空に對して黑色に見え、

遠ざかり行く山々は紫水晶の如く溫乎として半透明に光つてゐた。風は最早や靜かになつた。

段々アンキアーノは近づいて來る。山邑ヴィンチは既に眼界に這入つた。

レオナルドは足を停めて呟いた——

『人間は征服者（ヴィンチはヴィンチェレ即ち征服者の義）といふ名のある山から最初の飛行をなすのだ！』

そしてアルバノ山麓にある自分の出生の場所を凝視して言つた。

『彼を生んだ巢に永遠の光榮あれ！』

アガピトからの書面はフアエンツァの包圍の近づけるを報じて新任工學技師兼建築技師が即刻ケーザル・ボルヂアの陣營に到るべき事を要求してあつた。

それから二日の後レオナルドはフロレンスを去つてロマーニャへと出發した。

十二の卷　ケーザルか然らずんば無——

ケーザル・ボルヂア。　千五百年——千五百三年

「君主は人たり又獸たる事を要する」

——ニッコロ・マキャヴェルリ君王篇。

一

神寵によりてロマーニャ公とビオンビノ卿と神聖羅馬教會の旗手とを兼ね且つ司令官たる朕即ち佛蘭西のケーザル・ボルヂアは

將校、城守、主將、浪士の統領、官吏、臣民に告ぐ、

朕は朕の建築師にして且つ戰爭工學技師長たるレオナルド・ダ・ヴィンチ氏を汝等に紹介す。

氏は名聲最も籍甚にして最も敬愛すべきの人、汝等克く氏をして隨處に通過せしめて敢て

妨碍するなく、就中城塞の調査を望むの際は宜しく全部の檢閲と測量と判斷とを許し且つ氏に力を假すは勿論所要の人員はこれを供給すべし。更に朕の技師等は一切の事に就いて一に氏の意見に遵ふを要す。朕は氏に委ぬるに朕が所領内に在る凡ての要塞と城との監督を以てせり。

紀元千五百二年、即ちロマーニャに於ける朕の統治の第二年、八月十八日バヴィアに於いてこれを布告す。

ロマーニャ公、ケーザル

レオナルドの新信認狀は以上の如く記してあつた。

近年ケーザル・ボルヂア公は法王アレキサンダー六世の代理として往昔コンスタンチン大帝より羅馬法王に寄進したと傳へられる教會の舊所領を漸次回收するに努めて、都會ファエンツァを十八歳の幼主アストルレ・マンフレヂより奪ひ、フォルリを女君主カテリーナ・スフォルツァより收めて、此の兩名の保護を委任されしを幸ひ聖アンヂェロ城に幽囚し、更に詐欺の協約をウルビノ公と締結したる後千五百二年にボローニャ征伐を計畫したが、これ皆公が伊太利を統一して絶對唯一の支配者たらんと欲する熱心に出でた事であつた。然るに十一月に至つて公の敵たるペルヂア、シエナの君公を初め其の他の有力者はムヂオーネに會し、秘密同盟を結んで公を伐たんとし、ヴィテルロッツォ・ヴィテルリの如きはハンニバルの口吻を眞似て、今後一年を出でずして余は必ず共通の敵ケーザルを投獄する、投獄せずんば追放すると誓言した。此の同盟の報諸方に傳はるに及んで勢威ある君主は續々これに加擔して先づウルビノの叛起を見、尋いでケーザルの軍隊が謀叛を計つた。佛蘭西王の救助は遲々として容易に來さうにもない。公は宛ら破滅の淵に立てるやう、岌々乎として殆かつたが、然かも公は此の瀕戸際に在つて能く機策を周らした。敵は手間取つて直ちに決行しない。斯くして機會は遂に逸して合縱の諸公は此の簒奪者と和議を講ずる事になつた。そこで公は敵を出し抜いて更に策を弄して彼等を抗爭せしめ、搗てゝ加へて深大なる虚僞と禮儀とを用ゐて稍己に有利なる態度に出でしめてから、直ちに新に征服したるシニガーリャ市に於いて敵と會して商議を行ふため急いで其の準備を整へた。

一方レオナルドは間もなく宮廷の重要人物となつて、公の命に依り諸市を飾るに宮殿、文庫、學校、兵營、掘割を以てした外、或は戰爭の器具、軍事地圖を製し、且つ公の最も激烈な戰爭

ある毎にこれに臨んだ。

然かも周圍に起り來る事柄に對しては餘り明確に餘り緻密に眼を注ぐを避け、成るべく政事に遠ざかるやうにして、菓樹園の作り方、シエナ伽藍の鐘を鳴らす機械、リミニの泉から落ちる水の低い音樂、ウルビノ城の鳩小舍等、凡て物理現象、社會現象のみに殆ど己れを委ねてゐた。アペナイン山麓に住める羊飼ひの角笛を見るに孔深く口の開け方が狹いがこれは反響の音量を大きくするためであつた。それから幾日となく朝から晩まで寂しいピオンビノの濱に立つて波の落ちるのを注視した。そして四圍悉く人間の正義の法則が破れてゐる間に在つて獨り造化の不變不易を想ひ、深く力の源の永遠の正義の中に存せる歡喜を發見した。

六月某日、幼主アストルレと其の弟の屍體がチベル河にあるのが見付かつた。屍體の首に石が結へてあつた。人々は其の所業をケーザル公に歸したが、併し其の日レオナルドは、

『ロマーニャの荷車を見るに前の二輪は小さく後ろの二輪は大きいが、此の造り方は間違つてゐる。重味は凡て前の方にある。』

と手帳に記入した。

二

千五百二年十二月の下浣、ケーザル即ちヴァランチノア公は悉く廷臣を引き具し、チェセナを發してファーノへ行つた。ファーノはアドリア海に濱してシニガーリヤを去ること二十哩、公は一たび自分の敵であつたオリヴェロット・ダ・フェルモ、ヴィテルロッツォ・ヴィテルリ、ヂアン・パオロ・バリョーニの三人に對して此の地を會見の場所に指定したのである。そして數日の後レオナルドは公に會するためペサロを出發した。

ところが途中であらしに遭つて、山々は吹雪に埋もれて進み難く、馬は氷の上を滑るし、斷崖の眞下は海岸と見えて韃靼たる波浪の音が耳を打つ。更に夜になつてから路を間違へた。最早や絶體絶命、仕方なく手綱を放して馬の本能に任す事にした。併しレオナルドの馬は不意に停歩して何うしても前へ進まうとはせず、頸を伸ばして絞殺された男の屍體を嗅いだ。屍體は此の時尚だ木の枝にブラ下つてゐた。

そして漸つとの事で遠くに明りが見えて來た。それがノヴィララの旅館である事が案内者に分つた。ノヴィララは丁度ペサロとファーノの中央に當る山中の町であつた。旅客は一齊に馬を

速めて、程なく旅館の入口の重い扉を叩いた。扉は恰も城門のやうに鋲を澤山打つてあつた。先づ馬丁が目を擦り〳〵出て來て次に亭主が顏を出したが、亭主は此の新來の客を拒絶した。

『何うも相濟みませんが部屋も厩もすつかり滿員でございまして……お泊りのお客樣はケーザル陛下のお歴々ばかり、大官も軍人も宮人もゐらつしやりまするが、それでゐて寢臺一脚に三人四人とお休みになる始末ですから……』

併しレオナルドは姓名を告げて公の御璽ある證明書を示した。すると亭主は頻に謝つて自分の部屋を宛行つて呉れた。部屋の相客は佛蘭西の將校三人限りであつたが三人とも可なりに飲んだと見えて熟睡してゐた。

部屋を出てレオナルドは料理場へ行つた。料理場と言つてもロマーニャ地方に於ける宿屋の習慣として客室兼帶のもので、室内太く汚れ、壁は裸の儘で處々雨に染んだ汚點が見え、珠〳〵は止まり木の上で眠つて、小豕は扉の邊を鳴いて歩き、葱、胡瓜、腸詰の類は天井に吊る下がつてをり、火の盛んに燃える竈の前には一匹の豚が燒いてあり、客は長い食卓を圍んで酒を飲んだり骨牌を玩んで爭つたりしてゐた。

レオナルドはストーヴの前に腰掛けた。そして傍にある四角形の食卓にバルダッサルレ・スキピオニのゐるのを逸早く認めた。スキピオニは嘗てケーザル公の槍兵隊に長であつた人、並びにスキピオニと共に大藏大臣アレッサンドロ・スパノッキア、フェルララから來てゐる公使バンドルフォ・コルレヌッキオが目に這入つた。そして今一人其處に自分の未だ知らない人がゐた。其の人は盛んに身振り手振りを交へて細いキー〳〵いふ聲で喋つてゐた——

『諸君此の事實を證明するに足る例は古代史、近世史の中に尙だ〳〵あるのです。諸君は試みに甲兵を以て譽れを得た國を思ひ出して御覽なさい。羅馬人、スパルタ人、雅典人、エトルリア人がそれです。アルプス以北の漂浪軍がそれです。そして偉大なる武將は凡て自國の民を以て軍隊を編制しました。即ちニヌスはアッシリヤ人から、サイラスは波斯人から、亞歴山はマセドニヤ人から兵を募りました。勿論ビルルスとハンニバルは傭兵によつて勝利を得たけれどもあれは此の兩將が異常の天才であつたからです。諸君は又私の主張の根柢を成すもの——まあ言つて見れば兵法學の基礎ともいふべきものですが、どうかこれを見逃さないで下さい。それは軍隊の强みは歩兵、然り單に歩兵のみにあるといふ事です。決して騎兵にあるのではありません。勿論近世の發明中滑稽なること玩具に類する銃砲、彈藥にあるのでもありません。』

『ニッコロー君、君は些つと言ひ過ぎたと思ふが』と前の槍兵隊長はニコリ笑つて言つた。

『銃砲は可なり重要になつて來たぞ。君は羅馬やスパルタの事を喋々するけれど拙者の考へでは現今の軍備は昔に比して整ふてゐるやうに思ふ。佛蘭西兵の一中隊乃至三十門の射石砲を有する一砲臺は君の言ふ古代羅馬兵を手も足も出なくするからな。』

『詭辯だ〳〵！』ニッコローと呼ばれた人は斯う叫んで益々熱心になつた。『あなたの說には恐ろしく危險な誤謬があると思ひます。他日伊太利人はどえらい目に遭つて初めて傭兵の弱い事、騎兵砲兵の憐むべく無力な事が分るでせう。あなたはルクルルスの事を考へて見なさい。ルクルルスは一握の手兵を提げて敵の騎兵一萬五千を擊破したではありませんか。そして其の一萬五千の中には現時の佛蘭西騎兵中隊と全然同一な騎兵がゐたのです！』

宛らルクルルスの勝利を見て來たやうに言ふ此の人をレオナルドは物珍らし氣に眺めた。薄黑い赤味を帶びて長い襞が眞直に垂れてゐる其の着物はフロレンス共和國の官吏並びに同大使館の書記官が着用する服裝に似てゐるが、併し古びて汚れ目が見え、袖は既に絲が拔けて其處のリネンは磨れて汚くなつてゐた。そして骨張つた大きな手にインキがどつさり着いてゐて一本の指には疣があつた。痩せた顏の線は尖つて不規則な形を示し、一體の容子に品威なく、肩は窄んで年配は四十恰好、人と話しながら時々相手の頭の上を見詰める癖があるが、これは恰ど遠眼の利く食肉鳥が空間を覗くのに似てゐた。そは〳〵と落着きのない擧動、土臺が黑い兩頰も今は熱を疾めるやうな赤さを帶び、就中大きな灰色の据つた目の鋭さには烈々たる火熱の潛める事を示してゐるが、然かも時々其の目に現れる冷笑と冷かなる不快の色とは殆ど傷しいくらゐ弱みの表現を帶びてゐた。

ニッコローは引き續き自己の意見を吐いた。彼の談話に眞と不眞とが奇妙にも混合してゐるばかりか如何にも大膽な言を弄する事、何かと言へば直ぐ古代人の權威を楯に取る事などにレオナルドは驚かされた。ニッコローが其の射擊距離の不正確なるを理由として大口徑の銃を使用するの難きを說いたが、それは學理に合してゐるのでレオナルドは成程と肯いた。併し直ぐ其の後に彼はスパルタ人、羅馬人が要塞を築かなかつたから要塞なるものは無用であると斷言した。此の人が古代の希臘人、羅馬人の說を重要視するのはレオナルドが數學の公理を尊重するに似てゐた。然かも此のとき亭主が來てレオナルドに二階の寢室の用意が出來た事を告げたため論爭の結果が聞けなかつた。

三

雪は夜つぴて降つて翌る朝道案内の者は發足を肯じなかつた。

『此の模樣ぢやお前さん犬だつて外へ出るもんぢやねえ。』

そこでレオナルドは已むを得ず今一日逗留する事にして兼ての發明に係る燒串の試驗に取り掛つた此の燒串は打遣つて置いても獨りで廻轉する仕掛であつた。

そして魂消た顏をしてそれを眺めてゐる人達に說明して聞かせた。

『此の道具を用ゐますと肉を焦がす心配がありません。何故かなら火熱が平均に當るからで、熱が增せば增すだけ益々早く廻轉するのです。まあそれくらゐの事ですな、此の串は。』

レオナルドにとつては此の割烹道具の完成が飛行機の成功に劣らざる喜悅を齎すかのやうであつた。

矢張り其の部屋で昨日のニッコローは若い砲兵軍曹を捕へて、此の方法は抽象數學から割出したもので百發百中だと說いてゐた。それは賭博必勝法、換言すれば彼の《所謂運命女郎を騙して機嫌氣褄を取る》法であつた。そして彼は其の必勝法の確實なるを實際に示すため幾たびか賽の目を振つたが、其の都度負けるばかり、ハテ凭んな筈ではなかつたがと自分は一方ならず吃驚りするし、說明を聞いてゐた人達は面白相に笑つた。そして勝負が附いたときニッコローは案に相違した結果を見てすつかり面目玉を踏み潰した。彼は馬脚を露した——財布は既にないふになつてゐて負けた金は拂へないのであつた。

其の夜遲く一人の女客が此の宿へ到着したが、下部に扈從に馬丁に童坊に黑人の奴隷に種々の愛玩動物を伴ひ、長持、挾箱といふ仰々しい觸れ込みであつた。そして此の客は誰あらう綽名を大姐と言つて先年サヴォナロォラの少年審問者のため既んでの事に裸にされさうになつたヴェニスの藝妓レーナ・グリフィンであつた。今を去る二年前同じ泥水稼ぎの人達がする例に習ひ此の新マグダレンは罪障消滅のためとあつて綠の黑髮ふッつと斷り、殊勝にも庵室に閉ぢ籠つたところが焉ぞ知らんこれは策略に出た事であつて、藝妓が市に納賦する稅金の番附面（此の稅金番附は樣子の分らない嫖客のために出來てゐるので）に於ける自分の價格を高める手段であつた。即ち尼寺の蛹は目が覺めると蝶となつて以前に比して一段と立派な新らしい世界へ飛び出した。斯くて其のヴェニスの花魁は一躍して聲價を揚げると同時に其の頃一流の藝妓の間に行はれた系圖の僞作を企てた。出來上つたレーナの系圖は實に堂々たるもので、ミラン公ルドヴィコの弟にして樞機官の一人であつたアスカニオ・スフォルツァの姫君になり濟ましてゐた。尋いで或る樞機官の妾となつたが此の老僧は數多の醜聞を巧く金で隱し了ふせた程の財產家、

レーナを慰めんばかりに可愛がつた。そして目下ケーザル・ボルヂア公の軍營に附屬してゐるので、此の愛妾は公の行幸地なるファーノへ旅する途すがら今宵此の旅館へ來たのである。素より旅館の亭主は斯んなに羽振りの好い客を斷る譯には行かなかつた。そこで先づアンコナから來た先客の商人連に掛け合つて宿泊料の割引を約した上、鍛冶場で寢て貰ふ事にして可なり大きな寢室を明けさせ其處へレーナの供人を入れ、更に同じ懸け引きをニッコロー氏並びに其の合客なる佛蘭西の將校に持ち込んだ。これは言ふ迄もなくレーナを此の部屋に据ゑるためであつた。

然るにニッコローは憤然として抗議した。『貴樣氣が違つたのでないか』、『此の私を誰だと思ふ』、『往來から轉げ込んだ、何處の馬の骨だか解りもしないスペタの機嫌を取りたさに却て尊敬すべき人に侮辱を加へるとは前代未聞の無禮であるぞ』と亭主に喰つてかゝつた。すると其處へ神さんがまあ〳〵暫らくと割つて這入つた。此の神さんは主人の權勢あるしたゝか者、俗に言ふ『猶太人に舌の入質』をしてゐない女であつた。夫に代つてニッコロー氏に詰め寄り、そんな大聲で呶鳴り散らす前にお前さんとお前さんの家來衆と馬との勘定を拂つて貰ひませう、それに前週の金曜日に家の人が立て換へてあげた四ヅカットの金も返濟して欲しいと明かに言はねど其の意を仄めかした。然う當て擦つて置いて今度は芝居もどきの耳打の體宜しく、大道に群集して大人物を氣取り、ロハの場所に住んで眞直な人達を愚弄する山師、乞食共は何うかしてどえらい目に遭へば好いと思つてをりますと言ひ足した。疑ひもなくお神の此の言葉は幾分利いたと見えてニッコローは默り込み、今は唯如何にすれば毫も面目を損せずに此の場を逃れる事が出來るかと思案してゐる體に見受けられた。それに頓着なく宿の下男共は既に氏の荷物を運び出してゐるし、それにレーナの猿は氏の方に齒をムキ出して机の上の紙や皮表紙の大きな書物の上を飛んで歩いた。其の書物はリヴィウスの年代記とプルタークの英雄傳とであつた。

其の時レオナルドはニッコロー氏の側へ行つて帽子を脱ぎ。

『お氣に入りますまいが私の部屋へお出になつては如何でせう。斯んな些細な事でも御用に立てば難有い仕合はせですが』と言つた。

ニッコローは驚いたらしく狼狽の容子が見えた。併し氣が落ち着くと共に相應の禮を述べてレオナルドの懇請を容れた。レオナルドは自室に導いて一番好い場所を取らせた。斯うして此の人を見れば見る程益々興味を感じて牽き付けられるやうに思つた。そして直ちに彼の名を知つた。彼はフロレンス共和國十人議政府の書記官ニッコロー・マキヤヴェルリであつた。

狡猾にして用心深きメヂチはケーザル・ボルヂアと條約を結ぶ目的を以て今より三月前にマキャヴェルリを派遣した。するとケーザルは自分の敵にして又フロレンスの敵なるペンチヴォーリョ、ヴィテルリ、オルシニに對する防禦同盟をフロレンスに申し込んだ。併しフロレンスではこれを容るれば公が餘りに厚く親和を希望するに至らん事を恐れたし、若し又拒絶すれば何れくらゐ深い敵意を挾むか知れないので、そこで使臣マキャヴェルリに命じて公の提議をば單に外交上の好辭令と曖昧なる好意とを以て折衝させ、並びにフロレンスの商人がアドリア海に瀕せる公の領内を自由に通過する事を竊に要求させた。此の通過の件はフロレンスの通商上極めて重要の事であつた。

レオナルドも姓名を名乗り官職を告げて二人は直ぐ種々と談話を交へた。互に反對の性質を有しながら常に孤獨に且つ瞑想に耽る人は、兎もすれば互に造作なく自然に打ち解ける事がある。今の場合は即ちそれであつた。

『レオナルドさん』と言つたマキャヴェルリの眞率な態度は滿更畫家の心を牽かぬでもなかつた。『大畫家としてのあなたの名聲は聞いてゐました、併し一寸斷つて置きますが私は畫に對する知識がありません、のみならず畫は餘り好まないのです。斯う言へばあなたは定めし往來でダンテを嘲弄して無花果を一つ與へようとした奴に大詩人は假令貴樣が二十の無花果を寄こしたつて私は私の有つてゐる一つと換へないぞ、と答へたあの論鋒を向けるでせう……が併しケーサル公からあなたは兵法學に精しいと聞いたものですから畫よりも其の方に一段の興味を感じたのです。レオナルドさん、兵法學は實に重要です。偉大なる文明は戰爭を基礎としてゐます、規律ある軍隊に據つてゐるのです。私は此の頃君主國、共和國に關する著述をやつてゐますが其の中で恰ど數學者が數の法則を論じ自然哲學者が物理學を論ずるやうに私は各國の生命、發育、衰亡、死を司る自然の法則を論じようと思ひます。一體これまで國家の事を書いた人達は……』

と言ひ差して不意に言葉を切り惡る氣のない微笑を浮かべて自分と自分で咎めた。

『いや失禮しました、何うも手前勝手な事ばかり言ひまして……定しあなたは政治に對して趣味をお有ちではあるまいと思ひますが、恰ど私が畫に對して興味を有たないやうにですな。』

『然うでもありません。それは何ちらかと言へば政治上の談話は一體に下らないものですから私は好まないのです。併しあなたの御意見は非常に新らしいしそれに驚くべきものがありますから正直なところ私から望んでお聞きしたいのです。』

『分りましたかレオナルドさん、政治論は實際私の十八番なのです。私は聰明な人と政治を語る事が出來れば飯なんか食はなくても好いのです。ところが困つた事に聰明な人といふものは薩張りないものでしてな、私のフロレンスの大官は絹や羊毛の値段を考へるだけです。其の他の事は何一つ考へてはゐません。然るに私には(と苦い微笑を浮かべて)其の絹もなければ羊毛もないのですからな。』

レオナルドは彼を宥めて談話を續けさすため斯う言つた。

『するとあなたの御意見では政治は必ず數學を基礎とせる正確な科學である、自然の觀察と實驗とに其の確實性を發見すること將に機械學の如きものである——と私は斯う受け取りましたがこれで宜しいのでせうか?』

『正に其の通りです』とマキャヴェルリは顏を蹙め彼の癖として遠目の利く鳥のやうな恰好をしてレオナルドの頭をなして向ふを眺めた。

『實は私は人事に關する新事實を人類一同に知らせたくて堪らんのです。自然律なるものはあらゆる社會生活の先導となる法則でありまして、超然として人間の意思以外、善惡以外に立つてゐるのです。それだのに昔の著述家は善惡貴賤といふやうなものを假りて自然律の說明に供しました。私は政府は必ず斯くあるを要すと說くのではありません。將來或は斯くあるべきかと言ふのでもありません。單に現存する政府即ち共和國乃至君主國の名ある大團體の性質を攻究するだけです。そして政府に對しては數學者、解剖學者に倣ひまして稱揚も非難も一切加へは致しません。私は人類に向つて眞理を說くのです、それがために假令私の身體は焚かれても——ヂロラモ師のやうに焚かれても好いから眞理を說きます。眞理の宣傳は由來危險な業ですからな。』

レオナルドは微笑しながらマキャヴェルリの昂奮の狀を見て心の中で思つた。

『妙な人だ、あんなに熱情を湧かして非熱情を稱揚してゐる!』

そして聲を出して言つた。

『ニッコローさん、あなたの目的通りに成功すればあなたの事業はユークリッド以上です。アルキメデース以上です。』

まことレオナルドはマキャヴェルリの說が常套を脫してゐるのに驚いたのであつた。そして十三年前に自分は解剖用の手帳の隅に斯う書き入れた事を思ひ出した——

『最と高き神よ、余を助けて人間の性質と氣質と習慣とを研究せしめ給へ、恰もこれに於い

て人間の內部諸機關を研究したる如くに。』

四

不意にマキャヴェルリは嬉しさうに目を光らせて叫んだ。

『レオナルドさん、御說を聞くに付け二人の斯うして一緒になつたのが益々不思議に思はれてなりません。多分これは運命を司る星が稀有な周り合はせをしたのでせうな！ 私は人間の性質には三種類あると主張するものです。自己を見得る人が第一です、他人に示されて初めて自己を見得る人が第二です、自分でも見れず人に示されても見えないのが第三です。それであなたと私は――私は伴つて謙抑するの罪を犯したくないから斯う率直に申すのですが、あなたも私も第一の範疇に屬する方ですな。おや、お笑ひなさる？ 併しレオナルドさん私は斯うしてあなたと落ち合ひましたが、これは死んで墓の中に這入つてからならばいざ知らず、生きてゐるうちでは然う容易く私にはない事だらうと思ひます。實際選ばれたる人は此の世では稀なものですから。それは然うと一寸御免を蒙つてリヴィウスの最も美はしい一節を讀んで見ませう。』

と言つて机の上にある件の書物を取つて蠟燭を直し、毀れて絲で繕つてある鐵緣の眼鏡を掛けたとき大きな丸い硝子玉のため彼の容貌は俄に重々しくなり敬虔の相をさへ添へて恰ど禮拜を執行する人のやうであつた。そして讀まんとする句を見付けてやをら口を開けようとする途端扉が開いて小さな皺くちや婆が這入つて來て膝を屈めて丁寧に禮をしながら、

『御免下さりませ、旦那樣、斯樣な御迷惑を掛けまして誠に相濟みませんが主人のレーナ・グリフィン樣の可愛がつてゐらつしやる奴が一匹ゐなくなつたものですから――はい、兎でございます、首に青い紐が着いてをりまして……もう二時間も前から皆で搜してゐますけれども何うしても見附からないのでございます。』

『兎なんか此の部屋にゐるものか、此の婆あキリ〳〵出て失せろ』とニッコロー氏は嗄鳴つて、件の老婆を突き出さうとしたが何故か急に其の手を止めて、眼鏡を外しては見、掛けては見て充分に顏を眺めてから叫んだ。

『此の婆あ、お前はアルヴィヂアぢやないか。然うだらう、アルヴィヂアだらう。私は又お前の老耄れた身體は疾くの昔に惡魔に呉れたのだと思つてゐたよ。』

老婆は目を瞬き畏つて傷ましい微笑を見せてニッコロー氏の禮儀ある挨拶に答へた。

『まあ誰樣かと思つたらニッコロー樣でございましたか。隨分久しいぢやございませんか、何時かお逢ひ申してから餘程の年數になりますこと。豈や神樣は二度と斯んな嬉しい目に遭はして下さるものとは思ひませんでした。』

マキャヴェルリは何くれと昔の話をするため老婆を料理場へ誘はふとしたが、レオナルドは御遠慮には及びませんから其處で悠つくりお話しなさいと言つて自分は書物を抱へて隅の方へ行つた。そこでニッコローは此の宿屋で第一の上客であるやうな堂々たる威容を示して酒を注文した。

『おい貴樣の主人の客ん坊に然う言へ、昨日の酒は酸つぱい味がしたから注意しろつて。此のアルヴィヂア婆さんも己も坊主のアルロット見たやうな人だからな、アルロットは酒が惡るければ御祈禱が上げられなかつたんだぞ。』

アルヴァヂアは兎を忘れニッコローはリヴィウスを忘れて共に德利を抱へて舊友のやうに喋つた。アルヴィヂアは自分の若い折の話をして聞かせた。其の頃自分は縹致好し、引く手數多で思ふが儘に振舞ひ、頓着せずにしたい三昧、バヅアでは僧正の法冠を取り上げて自分の頭に載せた事すらあつた。それが年取るに從つて移りにけりな花の色、男共には捨てられる、貸間と洗濯仕事をして辛々其の日〳〵を送つてゐたところ憐れや病氣に罹つた。一時は此の勢ひで進めば寺の入口にうよ〳〵してゐる乞食共の仲間に這入つて最後は毒藥を服んで一思ひに往生せにやならぬかとさへ思つたが、難有い事に聖母樣のお助けがあつて一命は何うにか取り留めた。そして間もなく或る老住持の力添へで（此の住持は鍛冶屋の若い女房と通じてゐた）洗濯仕事よりもずつと金になる商賣に取り掛かるやうになつた……。

此處まで話したときレーナからの使ひが婆を呼びに來て話はこれ切りになつてしまつた。レーナの用向きは猿の創ある足に塗る鬚附とボッカッチオの十日物語とを持つて來て呉れとの事であつた（十日物語は常に枕の下の祈禱文書の側に置いてゐた。）

老婆が去つてからマキャヴェルリはペンを削り直して紙を延べフロレンスの君公に上るべきヴァランチノア公の性格と行狀との報告書を作りにかゝつた。此の報告書の文體はすら〳〵として殆ど談諧に近く然も深い政治的手腕の閃めくものであつた。

『レオナルドさん』と彼は畫家の方を向いて叫んだ。『私は古代スパルタの長所に就いて論じてゐたのに、それが急にあの婆と口を合はして下らない女共の事を喋つたものですから嘸あなたは吃驚なさつた事と思ひます。併し何うぞ私を餘り輕躁な奴だと思はないで下さい。我々

は自然を模倣する必要があります。我々は人間ではありませんか。昔アリストートルは其弟子亞歴山大王の見てゐる前で自分の背に四人の情婦を乗せたり自分も又順ぐりに四人の背に乗つたりしたといふ話がありませう。ですから我々單純な罪人は彼アリストートルに比して不謹慎の度が少いではありませんか？』

今は家の中の人々は眠つてゐて唯蟋蟀の鳴く聲、アルヴィヂアの吃く聲、及びアルヴィヂアに藥を擦らせながら唸つてゐる猿と、此の三つの外は凡て森として靜かであつた。レオナルドは牀の中へ這入つてから目を擧げて一種變つた友の方を凝と見守つた、友は依然ペンを噛みながら胸を曲げて書き續けてゐた。蠟燭の火によつて壁の上に映る彼の頭の大きな影を見ると角角は鋭く尖つて首筋細く、鼻は嘴に似て長く、下唇は突き出てゐた。マキャヴェルリは報告書を書き上げてから書翰の常用語『急に至急に迅速に』を記入し、尋いでリヴィウスの年代記を開いて數年來著手せる纂注に取り掛かつた。

蠟燭の火がチラ〳〵と動いて深く燃え去つたとき壁の影もゆら〳〵と踊つて顔を蹙めたが、併しフロレンスの秘書の顔は森嚴にして凛乎たる平靜と古代羅馬の盛時の反映とを保つてゐた。唯折々目の奥と唇の隅に僞りの狡猾、嘲笑の皮肉が現れた。

五

翌日あらしは鎮まつて氷の結べる窓に太陽はキラ〳〵と光り、鳥の柔毛のやうな雪の野と小山は青空の下に白く輝いてゐた。レオナルドは目を覺まして見るとニッコローは早や室にはゐなかつた。そこで着物を着て料理場へ行つた。料理場では例の自働燒串で大きな肉片が燒けてゐるので料理番の男は喜んでゐた。

レオナルドは馬の支度を命じてから朝飯を喫するため腰掛けた。すると側でニッコロー氏は激昂の體で新に到着した二人の客と談話してゐた。其の一人は五分の隙もないめかしやの青年と見受けられて顔に目立つた特徴がなく、名をルチオと稱してフランチェスコ・ヴェットリの緣者であつた。ヴェットリはフロレンスの著要人物で、同府の(旗手)たるピエロ・ソデリニと交り深く、マキャヴェルリを非常に贔負にしてゐる人、今諸友から來た手紙を本人のニッコロー氏に屆けさすため甥のルチオを遣したのである。

『金の事ならば御心配なさらないで下さい』とルチオは言つてゐた。『叔父の言葉によりますと先週の木曜に十人議政府の人達は約束し……』

『おい〳〵君、家來二人に馬三頭は約束だけで食へますか？成程イモラで六十ヅカットを受け取つたけれど拂ひは其の上を超して七十ヅカットだつたのだ。幸ひ慈善家の憫みがあつたから好かつたもの丶然もなければフロレンス共和國の秘書は餓死するばかりになつてゐたのだ。全體議政府の諸公は外國へ遣した使臣に全く金がなくなつたから何うぞ願ひますと請求させるやうでは幾らフロレンスの名譽を喋々したつて其の甲斐がないぢやないか。』

ニッコロー氏は今更愚癡を並べたところで始まらないとは承知しながら責めてもの氣晴らしに斯んな事を毒突くのであつた。蓋し料理場には殆ど誰もゐないので遠慮なく話す事が出來たからであつた。

『ルチオ君、此の方は矢張りフロレンスの方でレオナルド・ダ・ヴィンチさんと言ふのだ、確か（旗手）のソデリニ君の舊知の筈だ』とマキャヴェルリは畫家を紹介した。ルチオはレオナルドに恭く一禮した。

『レオナルドさんは昨晩私が侮辱を受けたのを御覽になつたが昨晩ばかりぢやない、毎日あんな目に遭つてゐるのだ。ルチオ君、私は要求する、分つたかね早く私に役目を廢めさして貰ひたいね、これは請願するのでなくて要求するのだ』と言つた。そして尙もブン〳〵憤つて此の若いフロレンス人が議政府諸公の全體であるかのやうに唖々呶鳴り附けた。『君、私は金のない人間だ。委任を受けた事柄は段々惡い形勢になるし、健康だつても其の通りだ。今の儘で進めば私は棺桶の中に這入つて家へ歸るかも知れないのみならず私は出來るだけ一生懸命に盡した積りだ、委任の權限は實に憐れなものだが併し其の權限内で隨分働いた積りだ。談判を開いてさ、ぐる〳〵方々を奔走して、前へ一足後へ二足、行ると言つたり行らないと言つたり、全く私としては遣り切れたものぢやない。それで以て相手のケーザル公と來てはあんなに怜悧だから斯んな子供騙しの手に乘らないし。然う〳〵私は君の叔父さんに手紙を送つたが……』

『ニッコローさん、叔父は屹度あなたのために出來るだけの事は盡しませうから。正直のところあなたから來る報告書を十人議政府の人達はフロレンス共和國の福祉に對して甚だ主要なものだと考へてゐますから、あなたが退職したいと言つても許容はしますまい。（マキャヴェルリ君の代りをする人物がゐるものか。彼れは黄金に等しい人だ、我々共和政府の耳だ、目だ）と斯んなに言つてゐる位です。私は斷言します、あなたの報告書はフロレンスで素晴しい成功を收めたのでこれ以上偉くは成らうたつて成れない位なものです。あの文章の絢爛として豐麗なこと、あれには誰一人として魅せられない者はありません。これは叔父に聞いたのですが、此の

頃政事室で會合がありまして其の席であなたの興味ある書翰を一つ讀みましたところ閣員は餘りの面白さに大笑したと……』

『ほう然うか？』と叫んだマキャヴェルリの顏は憤怒のため歪んで見えた。『おゝそれで分つた！私の書翰は議政府諸公の興味を牽くと言ふのか、諸公は願を解いて私の言ひ廻し方を歎賞するのか？それでは神に謝さなくちやならん、此のニッコロ！マキャヴェルリは滿更捨てたものでもないと見える！それだのに其の當人は犬のやうな生活をしてゐるのだ。凍えて饑餓に逼つて、熱のため身體が顫へて、宿屋の亭主からは侮辱される。そしてそれは皆んなフロレンス共和國のためを計るからの事だ。畜生、共和國も旗手もあつたものかい、奴等皆んな惡魔に取つ攫まれば好い水鼻垂らしの婆奴！君等も然うだ、懺悔もせず入棺もせずに埋葬されちまへ！』

そして市場で行はるゝ尾籠な罵詈を浴せ掛た。彼等十人議政府の諸公——賤劣極まる人物でありながら然かも自分が服事し且つ庶民の上に處る奴だと思ふと堪られない程癪に障るのであつた。其の時ルチオはマキャヴェルリの心を外らせようと思つて彼の若い妻君マリエッタから託された手紙を渡した。それは粗惡な灰色の紙に子供らしい大字で書いてあつた——

最とも懷かしきニッコロー樣、偖も承れば御滯在の地方には熱病をはじめ其の他の病氣猖獗に候由、妾の心配御察し下されたく候。夜晝ともに安き心地も御座なく候。

子供は仕合はせと丈夫にてめき〳〵と太りあなたにそつくりに御座候。小さき顏は雪のやうに白く候へ共爭はれぬものにて頭の形はあなたに似、濃き黑毛生えをり候。あなたに似てをり候ゆゑ美しと見受けられ候。それは〳〵活潑にてニコ〳〵せる容子は丸一歲經ちたるやうに御座候。生るゝなりパッと目を開けて家中に聞ゆる程の大聲を揚げて泣き申候。

何卒々々母子の事は片時も御忘れ下さるまじく候。

何よりお願ひ申上げたきは成るべく早く御歸り遊ばされたき事にてこれ以上御待ち申上げ候は妾に堪へがたく候、神樣聖母樣共にあなたに御保護あらん事を祈りをり候。シャツ二枚、ハンケチ二つ、タヲル一筋入れて置き候。かしこ

フロレンスにて　　マリエッタ拜

手紙を讀めるマキャヴェルリは宛ら別人のやうに見えるとレオナルドは思つた。彼の峻しい顏に斯んな溫かな微笑があらうとは思へない程であつた。然も其の微笑は直きに消えて彼は肩を

聳やかし手紙を皺くちやに丸めて手荒く財布の中へ入れて荒々しく言つた――

『私が病氣だといふ事を誰が言つたのだ？』

『それはニッコローさん、マリエッタさんは毎日會議の人達へあなたの事を尋ねにいらつしやるのです。そしてあなたが今何處にいらつしやつて何人な容子だとお訊きになるのです。』

『分つた〳〵！多分そんな事だらうと思つてゐた。偖て〳〵國の政治は獨身者に限るね。政治と妻君と――これは兩立しないものだ、二者宜しく其の一を選ぶべきなりだ。』

そして急にルチオを顧みて言つた。

『そして君は？君は未だ若いから早く結婚したいだらうね？』

『唯今は然うでもありませんが。』

『結婚なんてあんな馬鹿な事をするものぢやないぞ。地球を背負つてゐるアトラスの肩があるなら兎に角、然もない以上は廢す方が悧巧だ。何うですレオナルドさん、そんな物ぢやありませんか？』

併しレオナルドは悟つた、此の人はマリエッタを深く愛してゐるのに自分ではそれを恥ぢて否認したのだと。

宿屋は急に空になつた。そこでレオナルドも出立の支度をしてマキャヴェルリに同行を誘つた。併しマキャヴェルリは首を振り悄然としてフロレンスから來る金を待ち受けてそれを得てから勘定を拂はなくては此處を立てないと言つて、今迄無理に見せかけてゐた氣輕さは忽ち消えてしまひ、如何にも病人らしく憐れな樣に見えた。長く一つ場所に逗留してなす事もなく日を過すのは彼に取つて苦痛であつた。併し又彼が理由なくして突然居處を變更する結果十人議政府はそのため國務に支障を來すと呟くのであるがそれも一應は尤もの次第であつた。

レオナルドはマキャヴェルリを側の方へ引いて行つて金は御入用なだけ都合しますからと言つた。それをマキャヴェルリは拒絶した。

『それでは私の好意を無にするといふものです』とレオナルドは押しかへして言つた。

『斯うして二人が逢つたのは運命の星の不思議な周り合はせではなかつたのですか？まあまあそんな事を言はずに私に惠みを垂れて下さいませんか。』

レオナルドの聲には深切が滿ちてゐた。マキャヴェルリは拒絶する勇氣がなくなつた。そこでフロレンスから來れば返濟するといふ約束で二十ヅカットを借りた。そして俄にお殿樣のやうな勘定の拂ひ方をした。

六

そして兩人は出立した。これは申分のない靜穩な朝であつた。日蔭の方は尙だ凍つてゐるが、日に當る方は春のやうにぽか〳〵して、濃い青色の影ある雪を馬の足が踏む毎にサク〳〵と音を發する。雪白妙の山と山との間から冬の海の白い綠が輝いて、かなたこなたにちらつく黃色い三角形の眞帆片帆は宛ら蝶々が止まつてゐるやうであつた。

ニッコローは話したり、冗談を言つたり、笑つたりした。極く詰らない事でも何か知ら珍妙な考へ方をしたり皮肉な見方をしたりした。

漁村を通つたとき丸々と肥つて陽氣さうに見える何人かの僧達が寺の階段で女達に珠數を賣つてゐた。そして女の夫や兄弟共は遠くの方に離れて間抜けた顏をしてそれを見てゐた。

と見たニッコローは叫んだ。『鹿馬だな！ 總じて太つちよといふものは直き火が附いて熱くなるのが分らないか、そして美人連はあの坊主を《聖父》と呼ぶ計りか又《父親》にするのだせ。』

レオナルドはサヴォナロォラに對しての感想をマキャヴェルリに求めた。ニッコローはこれに答へて、一時は師をフロレンスの救世主だと思つて熱心に味方をしたけれど餘りに迅くあの預言者の弱點が目に附いて來たと言つた。

そして『脾病疾みのやうに忿りつぽいあの宗徒全體が大嫌ひになりました。其の事を思ふだけでも忌やで堪らないのです。彼奴ら惡魔に取つ憑れゝば好い！』と力を入れて言ひ足した。

七

ファーノ市の門に馬を乘り入れたのはやがて晝頃であつた。家々はケーザル公の廷臣、將校、軍人で賑はつてゐた。技師長のために最も位置の好い室が二つ割り當てゝあつたので、レオナルドは其の一つをマキャヴェルリに與へた。斯んな人込みの中とて宿を取る事が六づかしかつたからである。

マキャヴェルリは直ちに參內した、そして重要な報道を得て歸つて來た。それは公の管領ドン・ラミロ・デ・ロルクッが死刑に處せられた事で、耶蘇降誕祭の日、首なし屍體が池の如き血の中に轉がつて、其の側に手斧が捨てゝあり、物凄い首は槍の穗先に刺し貫いてあつた。

『死刑の原因は不明ですが全市擧つて此の事一つを話題にしてゐます』とニッコローは言つた。『何うです、外へ行つて巷談の推測を聞いては。これも政治學に於ける自然律を學ぶ一つの

機會ですからな。』

そして古刹サン・フォルツナトの前へ來ると人々は群つて公が軍隊檢閲のため出御せんとするのを待ち受けてゐるので、レオナルドとマキャヴェルリは其の中へ立ち混つた。口々に論ずるところは成程唯かの一事であつた。

『それに就いては俺は少しも分らないが』と言つたのは活氣はないがお人善しらしい顏せる若い職人であつた。『併しドン・ラミロ樣は朝廷で誰よりも一番愛されて又金がある方だと思つてゐたのだに。』

栗鼠皮の裏ある上着を着て風體卑しからぬ某店主がこれに答へた。

『ドン・ラミロ樣は陛下を欺いたからそれで罰せられたのです。それが唯一の理由でした。吾吾人民を壓抑したり拘禁したり掠奪したりしながら陛下の前では何食はぬ顏して羊の着物を着たやうに溫柔しく畏つて、事柄を隱蔽して置きさへすればそれが假令御法度に觸れる事項であつてもそれを守らなくても好いと高を括つてゐたのです。併し年貢の納め時が來ましてな、陛下は堪忍袋の緒を切らしなさつて臣民のためには友を惜しみになりませんでした。他人への見せしめとあつて、審問せず、躊躇せず、遲延せずスパリ首を刎ねられたのです。これで以て陛下が逆鱗遊ばすと如何に恐ろしいか、陛下の裁判は如何に公平無私であるか分りました。陛下は權勢のある者を免黜して低い者を登庸なさつて其の職に補せられるのです。』

と、一人の法師が叫んだ。『宜しく鐵の棒を以て彼等を治むべしぢや。』

『左樣々々、あの狗ころ共、あの人民の壓制者共は鐵の棒が要るのだ。』

『陛下は宥すべき時と擊つべき時をちやんと心得てゐらつしやる。』

『あれ以上の明君は我等に不要ぢやぞ。』

『主は到頭此のロマーニャをお惠みして下されたのぢや』と農夫が言つた。『以前はお前さん死んだ者も生きた者も身の皮を剝がれて稅金のために饑に逼つてゐたものぢや。厩には牛が唯つた二匹しか殘つてゐないのに、それさへ引き出された始末。其處へ丁度ヴァランチノア公がいらしつたゝめ下々の者は吻と息を吐いたのぢや。おゝ神樣、何卒陛下の御健康を御護り下さりませ！』

『裁判官だつても然うです。裁判を延期してばかりゐて毎時も人を苦しめてゐたものが、今では然うでなくなりましてな』と店主が言つた。

『陛下は孤兒を保護して下さるし寡婦を慰藉して下される』と法師は口を挾んだ。

『そして慈善深い方だ。それは〳〵人民に對して慈悲深いこと、それを否認しようたつても駄目だぜ。』

『そして人の氣を惡るくなさらない所が偉い。』

『お丶神樣』とよぼ〳〵した老婆は公を稱賛する餘り狂氣のやうになつて言つた。『お丶聖母樣、陛下は私達の父でござります、恩主、太陽でござります、何卒陛下の御身の上を御護り下さりませ。』

『彼等の言つてゐる事をお聞きでせう』とマキァヴェルリはレオナルドに言つた。『民の聲は神の聲です。私は常に言つてゐるのですが、人は野に在つて山を見、民に就いて君主を知る事が必要です。實は私はケーザル公を暴君だと言ふ者があれば好いと思つてゐましたが――總じて這般の事情は賢者にも分らず、思慮綿密なる人にも分りませんが、それが案外頭の單純な奴から知る事が出來るのです。』

此の時軍樂が聞えて人々は動搖めいた。

『そら陛下の御出だぞ！』

人々は一齊に爪先きを立て丶首を鶴のやうに伸ばした。そして奇妙な事に女や娘も窗から首を突き出した。彼等の英雄（金髪美貌のケーザル）を見たさに露臺、柱廊に走り出た彼等の目は愛に滿ちてゐた。公は滅多に人民に顏を見せなかつた事とて是は實に得難き好機會であつた。

先頭に立つ音樂隊は兵士の重い步調に合はせて鐘鼓の響耳を聾するばかり、それに續くロマニョール親衞軍を選り拔きの美男子揃ひ、三十キュビットの長さある戟を携へ、鐵の兜に鎧を着込んで陣羽織は右側が黃、左側が赤の段々染めであつた。正眞羅馬風に模した此の服裝をニッコロー氏は飽かずに歎賞した。次ぎは此の上もなく派手な裝ひせる侍從及び扈從の一隊で、金襴の上衣に金絲の開き口ある天鵞絨の外套を纏ひ、刀の鞘と蛇の鱗ある帶には七つの頭から毒を吐ける蝮（これはボルヂア家の紋章であつた）の鐶を施し、其の胸にCÆSARてふ文字を刺繡してあつた。これに續くはストラヂオットと稱するアルバニヤ人の護衞兵で、彫りのある長劍を佩き。其の次ぎは軍の司令官バルトロメオ・カプラニカで羅馬敎會旗手の劍を拔身の儘で捧持し、其の次ぎが即ちロマーニャの君主にしてヴァランチノア公たるケーザル・ボルヂアであつた。公は鉢卷にダイヤモンドの太陽を嵌めたるバルバリ產の靑毛に跨り、さらりと着流せる水淺黃の絹の外套には佛蘭西の紋章たる百合の花を白く眞珠にて現はし、獅子が口を開ける胸當てを着、眞鍮で鍛へた龍の兜には鱗、翅、鰭が備はつて身を動かす度に鏗爾たる音を發した。

今年二十六になる公の顔はレオナルドがミランのルヰ十二世の宮廷で見た時よりは痩せこけて憔悴して見え、あの時に比べて一段と峻しく、磨ける鋼鐵のやうに烱々たる眼光は一層の重重しさを加へ、愈他人の窺知を許さぬ事を示してゐた。頭髪と尖々たる髭とは黒味を増し、長き鼻は益々鷲の嘴に似、冷々たる顔は彼の時と同じく依然として落着き拂つてゐるが然かも今は一層勇奮敢爲の氣を加味し、更に磨ぎ澄ましたる拔身の劍先きのやうに恐しい鋭さがあつた。

公に續けるは伊太利中最も精鋭との聞えある公の砲兵で、眞鍮の大砲、小砲、鐵の臼砲、發火石を牡牛に曳かせ、重き兵車は不活潑な音を立てゝ大地を轢り行き、喇叭と鑵鼓はこれと和し、大砲、胴甲、兜、槍は落日の光りに當つて電光のやうに閃いた。勝利者たるケーザル公は紫色の帝衣を着て血のやうに赤く且つ大きな太陽の方に馬首を向けてゐた。

沈默せる群衆は息を怺へて此の英雄を凝視し、歎呼の聲を揚げん事を望みつゝも然かもこれを敢てするを恐れて偏に恐怖に近い嘆賞の念に打たれて恍惚となつてゐた。或る乞食の老婆の如きは頰を涙で濡らしながら小聲で斯う言つた。

『おゝ聖徒樣！聖母樣！基督樣の御惠みで陛下のお顔を拜む事が出來ました！おゝ陛下は私達の日輪樣でござりまする、美しい日輪樣でござりまする！』

法王がケーザルに託した閃々たる劍は宛ら大天使ミカエルの明煌々たる戟のやうであつた。群衆と同じ天眞の熱誠をレオナルドはマキャヴェルリの顔に見て思はずニコリとした。

八

レオナルドは歸宅して見ると秘書アガピトから手紙が來てゐて明日ケーザル公に謁見すべき事を命じてあつた。暫らくして青年ルチオが訪ねて來たがこれはアンコナへ行く途すがらファーノを通つたから立ち寄つたとの事であつた。そこでマキャヴェルリは管領ドン・ラミロ・デ・ロルクッの死罪に就いてルチオに話した。

『ケーザル・ボルヂア公のやうな統治者の行爲を判斷するに眞の理性を以てする事は不可能だ。君が公の此の所業に就いて私が何んな風に考へてゐるかと訊くから君に言つて聞かすのだが、一體公が征服する以前のロマーニャは多くの小暴君に束縛されて到る處無秩序、掠奪、暴虐が行はれてゐたのだ。そこでケーザル公は此の騷擾を鎭壓するため聰明且つ忠實な臣ドン・ラミロを自分の代理として執政せしめたところ、ラミロは人民に有益な恐怖を懷かせ全然國内を靜謐に歸せしめて事業を完成したが併しこれを完成するには殘虐な刑罰を久しく續けたのであつ

た。兎に角これで目的は達したので、公は此の兇暴な器械ラミロを亡き物にしようと決心して、誅求を理由にこれを捕へて死刑に處し屍體を曝して偏く見物させた。勿論此の恐ろしい觀せ物を見た人民は喜ぶと共に又恐怖を感じたが、公は此の行爲に依つて明瞭に三つの利益を收めたから賢い行爲であつたと言へやう。即ち多くの暴君を殺したのが其の一、ラミロを罰した、め公自身は管領の兇暴に坐さない事になつて結局公の性格は溫和だと認められたのが其の二、それから寵臣を犧牲にして清淨潔白な公平無私の例を示した事が其の三だ。』

マキャヴェルリは定理を推論するやうな冷淡な低い聲と表現のない容貌とを以て以上の事を語つたのである。

ルチオは叫んだ。

『ニッコローさん、果してあなたが言つた通りなら其の所謂公平無私は罪惡の極致でせうな。』

と聞いた秘書の目の中には火花が閃いたが併しあらぬ方を向いて依然冷淡に、『それは然うか知れない』と同意して更に、『併しそれが何うしたと言ふのだ？』と返し矢を放つた。

『それが何うしたと仰有る？だつてニッコローさん、あなたはそんな惡徒の政略を是認なさるのですか？』

『フン、未だ若いな、流石に無經驗な青二才の言ひさうな事だ。政事ではね君、規範的に人の行はざるべからざる方法と實際的に行ふべき方法との間に非常な相違があるのだ。そして其の相違を忘却すれば或る種の破滅を見る譯さ。由來人の性は惡であり且つ兇猛であるのだ。それが道德的になるのは單に自己に利益のためか或は恐怖のためだ。そこで即ち破滅を避けんとする君主は是非ともあらゆる危險を冒して有德を裝ふ術を學ぶ事を要するのだが、併し場合に應じて有德たる事を要する時もあり要しない時もあるのだ。それら密々の方策は權勢の維持を可能にするものだから、君主たるものは宜しく良心のあらゆる不安を無視してこれに從即する必要がある、何故なら善惡の性質を精確に知つて論ずると往々にして君主の權勢は德を行つて破壞され罪惡を犯して却て增益される事のあるのは明瞭だからな。』

ルチオは再び抗議した。

『あなたのやうに推理すれば何んな事でも許して差支へない事になります、そしてあなたは如何なる惡をも是認するのでせう。』

『其の通りだ』とマキャヴェルリは極度に嚴肅に答へて且つ自分の言葉の意味を强めるが如く手を擧げて『如何に統治すべきかを知る人に一切の事は許されるのだ』と嚴肅に言ひ足して、

更に以前の如き冷淡な調子に復して論じ續けた。『であるからヴァランチノア公がロマーニャの掠奪と暴虐とを終熄させたあの峻嚴を我々のフロレンスに比して見ろ、フロレンスは國内の諸州をして反亂を繼續させ不秩序を釀成させてゐるのだが、あの寛裕を公の政策に比して見ると公の方が合理的であるのみならず、フロレンスのそれと同樣慈善的であると私は結論するのだ。放恣の結果、一國を擧げて滅亡するよりも若干名を擊つ方が實際得策だからな。』

ルチオは稍怯んだが併し默つてはゐなかつた。

『併しそんな殘虐を行はない君主はなかつたでせうか？例へばアントニヌスやマルクス・アウレリウスの事を考へて見なさい。』

『おい〳〵忘れちや可けないせ、私は征服者の政府の事を論じてゐるのだ、世襲國ぢやないのだ主權を獲得する事であつて維持する事ではないのだ、勿論君が擧げた其の皇帝は寛仁を施せる譯だ、何故なら血醒い行爲が其の以前の時代に澤山あつたからだ。ルチオ君、羅馬の建設者が弟を殺したのは實に恐ろしい罪惡だ。併し弟を殺す事は單一の主權を樹立する上に於いて必要だつたからだ、若し生かして置けば羅馬は内爭のため國が弱くなつて必ず滅亡した事と思ふ。そして弟殺しの罪を『永遠の府』が有するありとあらゆる德と知慧とに釣り合はして是非する人があるだらうか？疑ひもなく我々は最も微賤なる命數を撰んで惡行を基礎とする偉大を顧みてはならないが、併し人にして一たび抽象的正義の途を捨てゝ且つ滅亡を欲しない以上、宜しく斷乎として最後まで惡の道を步み續けねばならない。元來人間といふものは區々たる微小な惡事を復讐するだけで、大きな惡事は人間の手から復讐の力を奪ふものだから、君主は專ら重大な害を臣民に蒙らしめて小つぽけな不正は控目にした方が好いのだ。ところが大抵の人を見るに惡と正義の中間を選ぶが、あれは最も危險だ。彼等は大きな勇氣を要する罪惡を回避して何の利益にもならない卑劣をのみ行ふのだ。』

『ニッコローさん、あんたの言葉を聞くと私は髮の毛がスク〳〵立つやうです』とルチオは非常に戰慄して言つたが、やがて返答の最も禮儀に叶へる形式は冗談に紛はすにありと考へて、『ニッコローさんの仰有る事は眞理でせうが、併し私はあなたの隱すところなき說を信ずるのは眞平御免ですな。』

『凡て眞理は何の時たるを問はず不可有らしく見えるものだ』とマキャヴェルリは冷淡に言つた。

傍で聞いてゐたレオナルドはニッコロー氏が態と平氣の體を裝つてゐるに拘らず實際は自分

の言葉の結果が現れたか否かを知るためルチオの方に狡猾な瞥見を投げてゐる事を既に看破した。マキャヴェルリには自制なく、平靜なく、征服の力のなかつた事は明白だ。一つは他人と考へを同じふするを欲しないのと今一つは平凡を憎む餘り彼は反對を力説して却て錯誤に陷り、誇張に陷り、奇拔にして聳動すべき説ながら然かも完全を缺き、逆理的な意見の僞飾に陷つたのであつた。彼が德、又は恐怖といふ語を弄ぶは宛も手品師が拔身を弄ぶに似、且つ磨きて煌々と光れる誘惑的に危險な武器を藏せる武庫を彼は所有して、以てルチオの如き人、並びに聰明にして尊敬すべき且つ因習に囚はれたる群衆を何時にても無力にする事が出來るのであつた。換言すれば彼等の得々たる平凡と自分の長所を彼等の認めないがために彼等を罰して、或は負傷せしめ或はカスリ傷を負はせるが併しこれを斬殺し或は重傷を負はせるのではなかつた。レオナルドは嘗て父ピエロのために木のロテルロに描いた怪獸を思ひ浮かべた。あの獸は嫌忌すべき各種の爬蟲類を集めて夫々相異せる部分を揑ね合はせたものであつたが、ニッコロー氏も超人的に狡猾にして且つ良心なき君主に於いて無益且つ不可能な怪畸を寄せ集めたのではあるまいか？俗物を恐怖せしめるメヅサの如きものを發明して、然かもそれは本然の性質と相反してゐるのではなからうか？そしてレオナルドは以上の如きニッコロー氏の想像の放恣、態と扮へる冷淡の底に、例へば劍を弄ぶ手品師が錯つて自分の急所を突くやうに、ニッコロー氏の魂の中に大苦痛の存するのを看取した。

そして畫家は思つた。

『これは不幸な病人ではあるまいか？疵口に毒を入れて安靜を求めんとする人ではあるまいか？』

然かも彼は自分の心と酷似してゐるやうで其の實然うでないマキャヴェルリの暗い魂が有する秘密の最後の奥を突き留める事が出來なかつた。

ルチオが心の内でニッコロー氏の引き出したメヅサの首と爭つてゐる樣は、宛ら魘されてゐる人のやうであつた。

『まあ〳〵宜しい！あなたと議論は致しますまい。我々は雄々しい德行、勇敢な偉動のために君主の多くの罪を宥してやります。併しこれは失禮かも知れませんがあのロマーニャ公は然うした種類の君主でせうか？ジョーヴの神に宥しても牛には宥すな（Quod licet Jovi non licet bovi）といふ諺の通り、亞歷山大帝やチュリアス・シーザーに宥しても法王アレキサンダーやケーザル・ボルヂアに宥されない事があるかも知れません、何故なら此の二人は眞のシーザーであるかそ

れでも無であるか疑とした事は言へないからです。少くとも私は此のやうに考へてゐるのです、世人も皆私に贊成だらうと思ひますが……』

『勿論誰だつて君に贊成するさ』とニッコロー氏は性急に遮つた。『併しルチオ君、多數者の贊成は事實の證據にはならんぞ、凡て眞理はあらゆる人が往來する大道にないものだからな。それは然うと私は議論の幕を閉ぢるが、唯最後の言葉としてこれだけの事を述べたい。私はケーザルの行爲を觀察すればする程實に瑕瑾のない立派なものだと思ふ、實際公は武器の力、冒險の成功を以て權力を得んとする人の龜鑑なのだ。殘虐と道德とを相聯ねるあの巧妙さ、そして愛撫する時と粉齏する時とを具さに心得てゐるし、それに彼の王業の基礎は置かれて未だ間がないのに早くもあんなに鞏固なものだから既に堂々たる覇王となつてゐたのだ。公の如きは伊太利に於いて唯一人、否、歐羅巴に於いて唯一人だ。實際あれは空前の事が、空前の事だから恐らく又絶後かも知れない。』

と言つたマキャヴェルリの目は燃え、聲は顫え、痩せ悴けた兩頰は所々赤くなつた。彼は預言者のやうに見えて、皮肉家の假面の下から嘗てはサヴォナロォラの弟子であつた狂信者の顏が覗いてゐた。

併しルチオは最早や議論に飽いてゐる。メヅサの幻影が消えるや否やマキャヴェルリに向つて近所の酒店から二三本の酒壜を取り寄せませうかと言つて、それとなく休戰の調印を申し込んだ。

と聞いてニッコロー氏は熱心に叫んだ。

『それよりか他の酒屋へ二人で出掛けやう。斯んな事に掛けちや私の鼻は鋭敏だ。別嬪のゐるところは先刻心得てゐるから。』

『斯んな汚い小つぽけな町に別嬪が？』

『お聞きなさい』と嚴然としてフロレンス共和國の秘書は言つた。『君は此のファーノのやうな他の小都會を見ても決して蔑視してはならん。不潔な小路に時として素敵な奴を發見して喜びの餘り自分で自分の指を舐る事があるからな。』

ルチオはニッコロー氏の背を叩いて『此の狡るい犬めが！』と言つた。

マキャヴェルリは尙も續けて、

『さ、提灯を持つて、外套を着てと、それから假面を被つて行くかな。斯うした遠征は神秘なのが却て半分は愉快なものだ。如何ですかレオナルドさん、あなたも御同行なさいませう

ね？』

レオナルドはこれを謝絶した。

女に關する話は定まつて下品なるものであるが、彼は此の種の談話に興味を有せざるのみらず自らこれを嫌忌して避けるやうにした。齡知命に達したる彼は自然理の秘密を一心不亂に窮めんとするの人、死刑の罪人と同行して其の目に現はるゝ最後の恐怖を見んとする此の人は屢冗談を聞いて赤面する事があつた。何方に顏を向けて好いか慌て惑ふて學校に通ふ兒童のやうに赤面する事があつた。

ニッコロー氏はそれ以上は勸めずにルチオを伴つて出て行つた。

九

其の翌日朝早く內匠頭たるレオナルドの許へ侍從が來て旅館が氣に入つたや否やを尋ね且ケーザル公からの下賜品を進呈した。當時行はれた作法に依り賜品の目錄は食料品即ち麥粉一袋、淸酒一樽、羊一頭、肥えたる閹鷄十二羽と並びに大きな火把を二本、蠟燭三把、コンフェッチ二箱とであつた。マキャヴェルリは此の伺候を見て感動して、自分が公に謁見できるやうに執成して貰ひたいとレオナルドに乞ふたので、夜の十一時即ちケーザルの定規の謁見時刻に兩人は打ち連れて參內した。一體公の生活法は奇怪を極めたもので、夏と冬は朝の四時乃至五時に寢に就くのであるから公に取つて東の空は午後の三時に白み、四時に大陽が上つて、着衣も食事も政治を攬るのも凡て等しく五時であつた。凡そ公の行爲は不思議だらけであるが、これは自然に秘密を好む外に一つは故意にそんな打算をするせゐもあつて、滅多に宮中を出る事なく、假面は常に被つた儘、そして盛大な竟宴の時に限り臣民に接し且つ極めて危急の際にのみ兵士の前に姿を現すのであつた。公は人を呼と驚かす事が好きで、彼の容貌は半神半人のそれのやうに常に芝居染みてゐた。

彼が金錢を浪費するといふ噂は容易に信を措き難い程甚しく、間斷なく流れるやうに聖彼得寺の金藏に這入つて來る金貨は羅馬敎會のこの旗手の支出に足りないと云ふ。諸國から駐箚せる使臣の報告に依れば公の一日の費用は千八百ヅカットを下らず、偶々馬に乘つて外に出ると大勢の者共は公の後からゾロ〳〵跟いて行くが、これは公の馬に打つたる銀の馬蹄が容易に外れるからで、公の意は蓋しこれら人民への施物としてこれを拾ひ取らせるためであつた。彼の體力の强壯に關しても不思議な噂が立つて、痩せて婦人のやうに纖い指で蹄鐵を折つたり、鐵

の棍棒を曲げたり、船の錨綱を斷つたり出來るし、それに公が未だヴァレンツァの樞機官であつた數年前のこと羅馬で牡牛の仕合ひが催された時若年のケーザルは劍を拔いて一擊の下に牛を眞二つに斬つた。廷臣や列國の大使達の目を竊んで彼は屢々チェセナを周れる丘へ行つてロマーニャの荒くれ牧夫の拳闘を見るばかりか時として飛入りする事もあつた。

同時に公は騎馬の士としては理想の人であり、重ねて流行の師表であつた。曾て妹ルクレチアがエステのアルフォンソ公と結婚式を擧げた事があつたが、丁度其の頃公は或る城堡を包圍してゐたのに、誰にも見附からぬやう密と陣屋を拔け出て結婚の式場へ乘り込んだ。そして黑い假面に黑い天鵞絨の着物を着て、會釋しながら賓客の間を過ぎたとき人々は驚きの餘りタヂ〳〵後に退き下つたが、公はそれに頓着せず音樂の調べに合はせて物の見事に踊つたので一齊に《ケーザル！ケーザル！無比のケーザル！》と稱揚した。

そして公は賓客や花聟の前をも憚らずルクレチアを傍に延いて何事かを耳語した。すると新婦は目を伏せて顏を赧めたが、軈て眞靑になつたゝめ、眞珠のやうな美しさに一段と魅力を添へた。ルクレチアは或は潔白であるかも知れないが併し性質が脆いのは疑ふ餘地もなかつた。噂は更にルクレチアは素直な女性である、兄の恐ろしい心に靡いて敢て罪を犯すを厭はぬくらゐ素直であると傳へた。

これを察するに公は或る一點、即ち微塵も證據を留めぬ事に意を用ゐてゐるらしい。恐らく公は名聲のために罪を誇張されて傳へられたかも知れないが、然かも事實は名聲よりも更に恐しいものであつた。それは兎に角、公は巧みに惡行を隱蔽して其の形跡を綺麗に拭ふ術を心得てゐたのである。

十

ファーノのゴシック式の古い市役所が公の柳營に當てゝあつた。レオナルドとマキャヴェルリは身分の重くない參內者のために設けてある殺風景な大廣間を通り拔けて以前禮拜堂になつてゐた奧の一室に這入つた。槍の形を成せる窓にはステンドグラスが嵌まつて、唱歌隊の坐る高い席の上に槲の木で彫つてあるのは使徒並びに羅馬教會の聖父達の像であり、天井には神聖な鴿が瑞雲と天使との間を飛翔せる壁畫の褪せたのが見られた。陛下が幾つか壁を隔てた彼方にゐられると思へば氣がさして廷臣達は立つたまゝ低い聲で話してゐた。玆にリミニから來てゐる使臣といふのは年老い頭禿げてよぼ〳〵した人であるが、公に拜謁するため三月此の方待ちに

待つてゐるけれど運惡るくもそれが叶はないため今夜も溜りの間へ來てゐた。そして幾晩も眠らなかつたと見えて居眠りしてゐると、時々扉が明いて秘書アガピトが鼻の上に眼鏡を載せ、筆を耳に挿んで心配らしい顏で室內を見渡して謁見を待つ人々の一人を陛下の前に案內するのであるが、其の都度禿頭老齡なるリミニの使臣は身顫ひして飛び上るものゝ、今度も自分の番ではない事を見て溜息しながら再び居眠りするのであつた。然かも彼の居眠りは一人の藥劑師が乳鉢を棒で擦つてゐる音に心地よくされたのである。蓋し適當な部屋がないので此の禮拜堂は謁見の控室と醫療室とを兼ねてゐたからで、神壇の方にある一脚のテーブルには種々の壜、藥壺、醫者の藥局のレトルトなどが並べてあり、テーブルの後ろに控へてゐるサンタ・デュースタの監督にして且つヴァランチノア公の侍醫頭たるガス・バレ・トレルラはコロンブスが新發見の島から持ち歸つて當時大流行となつたグヤコオ（俗にこれを聖木と稱へてゐた）の煎藥を調合して、其の恰好のよい手で黃色の塊を揉みながら病氣を治する此の木の性質を話してゐると、唱歌席の上にゐる欅の諸聖徒は主の羊群を牧する此の新しい人の奇異なる談話をば目を丸くして聞いてゐるかのやうであつた。禮拜堂にある燈火といへば此の國主の前にチラ〳〵搖らぐランプ一つだけ、そして空氣はグヤコオの刺激的な匂ひに滿ちて窒息するかのやう、加ふるに以前に焚いた燻香が未々室內に殘つてゐるため例へば或る隱秘な儀式を行はんとて高僧達が此處に集まつてゐるとも見られた。一方フロレンスの秘書マキャヴェルリは彼方此方廷臣の傍に寄つて巧みにケーザルの政略に就いて聞き出してゐたが間もなくレオナルドに近いて左も不思議さうに呟いた。

『私は朝鮮薊を食ひますよ、朝鮮薊を食ひますよ！』

『何んな朝鮮薊です？』とレオナルドは當惑して言つた。

『何んな朝鮮薊ですと問ひなさるのは御道理です。ケーザル公はフェルララから來てゐる大使バンドルフォ・コルレヌッチオに一つの謎を提出して（予は朝鮮薊を葉ぐるみ食ふのだ）と言つたさうですが、これは察するところ敵の同盟を離間して片端から滅ぼすといふ意味でせう。私は一時間も此の事に就いて頭を迷はしたのですよ。』

そして更に聲を低くして、

『此處の人は凡て謎と罠ですな。下らない事なら幾らでも喋るが一旦國政の事を持ち出すが最後忽ち食事中の坊主のやうに默り込むのです。併し奴らに騙される私ではありません、顏を見れば何か知ら能く分りますから。本統にレオナルドさん、私は魂を賣つても宜しいから何

か知りたいのです。』

そして彼の目は死物狂ひの博奕打ちのやうにキラ〳〵と輝いた。其の時レオナルドはアガピトに呼ばれたのでマキャヴェルリに答へる遑がなかつた。

レオナルドはアルバニヤのストラヂオット兵が立ち並べる陰森な長い廊下を通つて公の寢室へ這入つた。寢室には垂幕や絹が廣々と懸かつてゐた。天井の壁畫はバシフェーと牡牛の情事が描いてあつたが、牡牛はボルヂア家の紋章とて、寢室にある一切の什器には三重冠と聖彼得の鍵、それに牛の模樣を飾つてあつた。寢室は暖かく且香氣が匂つて、杜松の火は大理石の竈に燃え、ランプの油には菫が匂うてゐた。ケーザルは晴衣を着、室の中央にある平かな寢椅子の上に横つて(彼が好む姿勢は椅子に倚るか馬上に坐するか此の二つに限られてゐた)一切の事に無頓着らしく裝ひ、枕に肘を載せかけて一人の秘書からの報告を聞くと同時に、傍の碧玉の臺の上で二人の侍臣が將棋を鬪はすのを見てゐた。即ち彼には注意を分つ能力があつた。そして緩緩と均一な且つ機械的の運動を以て、香氣滿てる黃金の珠を前から後へと左右の手に渡してゐた。此の珠は恰も自分のダマスコの匕首のやうに宗教上の意味から持つてゐるのであつた。

十一

公は特別の儀禮を以て嬉し氣にレオナルドを迎へ、拜跪せんとするのを制して自ら手を執つて傍らの肱掛椅子に坐せしめてから、兼てイモラの市(こは嚮てヴァレンチノと改稱される筈)に一字の精舍を建立する積りで、ブラマンテに調製させた設計書に就いてレオナルドに相談した。公は此の他に尙ほ病院、巡禮の宿泊所、見事なる禮拜堂の設備をも志してゐたが、これは斯くの如く寬仁なる慈善事業に依つて基督敎に對する自己の善行を記念せんと欲したからであつた。ブラマンテの設計書の後、公はファーノに於けるヂロラモ・ソンチノの新印刷工場で丁度彫つたばかりの活字を出して見せた。蓋し公は美術工藝を領內に於いて熱心に奬勵したのであつた。其の時秘書アガピトは宮廷詩人フランチェスコ・ウベルチが作つた奉頌の詩集を公に呈した。公は鄭重にこれを受け取つて作者に充分報酬を與へるやうにと命じてから、奉頌の詩も然うだが諷刺詩をも見たいものだと言つて肯かなかつたので、秘書は當時羅馬の聖アンヂェロ城に幽閉されてゐたネーブルス人マンチオニの作つた一詩を公に示した。其の小曲は罵詈讒謗を極めて、公をば騾と呼び、これは素と私窩子と法王から生れた雜種で、嘗ては基督の椅子に坐

してゐたけれど今は惡魔の椅子に坐し、割禮を施したる土耳古人であると共に衣を着ざる樞機官であつて、妹を姦し、信仰に背き、兄を殺した不義不道の大惡徒だと罵つてあつた。

詩に言ふ——

お丶神よ、何故神は待ち給ふぞ、聖敎會は驟の厩、竟宴の洞と化したるを神は知り給はざるか。

アガピトは恐る〳〵訊ねた。

『陛下は此の惡漢を如何やうに御處分なさりませうか？』

『予が歸るまで其の儘にして置け、手づから處分するから』と公は靜かに答へた。『斯んな三文文士に作法を敎へる方法は心得てゐるから』と低聲で附加した。

そしてケーザルが何のやうにして作法を敎へるかは大方察せられぬでもなかつた。蓋し右の罵倒詩より輕い無禮に對してさへ其の者の手を斷ち赤熱した鐵を以て舌を燒いたのであつた。

秘書は報告を終へて退き下ると尋いで謁見したのは星を占ふ、ヴァルグーリで、新に一種の占星術を發明した人であつた。公は星の威力を信じてゐる事として熱心に耳を傾けた。ヴァルグーリは陛下の此の頃の御不例は火星が天蠍宮に這入つた丶めだから金星が牡牛座に現れさへすれば全快になると說明して、且つ陛下は若し差當り重要な事があればそれを十二月三十一日午後に決行する方が宜しい、陛下の星の相合は此の日が吉であるからと言つた。そして公の耳の方に身を屈め、公に印象を與へるやうに指を上の方に擧げ、次の如き不思議な呟きを三たび繰り返した。

『然うなさりませ、〳〵、〳〵。』

ケーザルは返答しなかつたが顏の曇りの消え失せたのがレオナルドに見えた。公は此の預言者を退出せしめてから再び內匠頭の方を向いた。

そこでレオナルドは軍事上の計劃圖と地圖とを開いた。地圖には地質、流域の方向、山河等を科學的に記載せる外に自然色の彩りを施し、一々巨細に遺漏なく描ける各地方の美術的鳥瞰圖とも見るべきものがあつて、夫々都會の廣小路、街路より塔に至るまで指示し得べく、これを開いて見てゐる公は宛も地上を飛行して脚下に無限の擴がりを俯瞰するが如くに感じて、此の地方の地形即ち南を限るボルセナ湖、北はエマの谷、東はアレッヨ、ペルヂアの二州、西はシ

エナから其の海岸に至る間を甚だ注意して檢した。これは伊太利の中核にしてレオナルドの故國、即ち公が久しく垂涎せるフロレンスの地方であつた。公は深く考へに沈んで想像の飛行に喜びながら久しくレオナルドの繪圖面を凝視して、自分と此の大發明家とが恰も同一の仕事に從事してゐたやうに感じた。公はレオナルドの顏を見て懇ろに彼の手を執つた。

『難有う、レオナルド。何時までも予に仕へてゐて呉れ。予は君に報いる方法を知つてゐるから。君は予の宮廷で滿足してゐますか？』と氣遣はし氣に言つた。『俸給に不滿はありませんか？何か予に要求する事はありませんか？予は君の滿足を得さへすれば愉快なのだから。』

レオナルドは此の機を外さずニッコロー氏の謁見を乞ふた。すると公は快く微笑して肩を搖がせた。

『其のニッコローと云ふ男は妙な奴で予と謁見したいと言ふから會つて見ると實に下らない事ばかり喋るのです。何故あんな奇妙な奴を予の方へ派遣してよこしたか知ら？』と呟いたが、併し直ちに此の人に對するレオナルドの所見を求めた。

『陛下、マキャヴェルリ君は私がこれまで會つた人の中で最も聰明で最も目の明るい人だと思ひます。』

『左樣、確かにあの人は聰明です、そして國政に對して理解力ある事も疑はんが……併し……信頼するに足らぬ男ですな。一體手段方法の心得はないのだから。併し予は快く逢つてやります。君の言葉添へがあるから尙更の事です。一體彼は自分くらゐ狡猾な者は人間の中にゐないと已惚れてゐるけれど、其の實は正直者です。そして此の予をフロレンス共和國の敵と見て何うとかして欺かうとしてゐるが、彼は自分自身の魂よりも自分の國を愛しゐるのです、それを予は知つてゐるから彼を宥してゐるのです。宜しい、會ふから君から其の通り言つて下さい。それから彼の男は政治道と戰術とに關する書物を編んでゐると聞きましたが？』と言つて、曾て擽つたく感じた事を今思ひ出したものゝやうに低く笑つた。

『君はマセドニヤの方陣の事を聞きましたか？未だ？では聞きなさい、それは斯うでした。或る時ニッコローは予の司令官バルトロメオ・カプラニカや其の他の將校を集めて今言つた其の著書の中にある方陣によつて軍隊を排列する法則を說明しました。そして其の說明が非常に雄辯であつた結果、將校は其の方陣を實地に見せて貰ひたいと言ひ出して予らは適當な原へ行く事になりました。ニッコローは此處で命令を與へようといふのです。然るに殆ど三時間近く二千の兵士を寒氣風雨に曝して一生懸命になつたが方陣は何うしても出來ないのです。と見たバ

ルトロメオは癇癪を起して軍書は未だ一冊も讀んだ事がないのに軍隊を提げて瞬く間に所要の形に歩兵を排列しました。即ちこれで實際と空論との差違が分つたと言ふものです。併し此の事は口に出さぬやうにしてゐなさい、ニッコローはマセドニヤに關する事は一切回想を好みませんから。』

時は丁度三時で、公の前に夕餐が備へられた。見れば果物が一皿、鱒、白葡萄酒の三品で、眞正の西班牙人のやうに（蓋しボルヂア家は西班牙の出であつた）最も質素な飲食を取つた。

レオナルドは退出したときケーザルは再び地圖の禮を述べた。三人の扈從は松明を持つて内匠頭を旅館まで送つた。

レオナルドは公との會談の模樣をマキャヴェルリと語つた。そしてフロレンスの地圖の事を話した時ニッコロー氏は思案氣に言つた。

『何ですつて？あなたがですか？吾々の共和國の一市民が最も恐ろしい敵のためにそんな事をしたのですか？あなたは其のために謀叛の罪名を着るのですがそれを御承知ですか？』

『それは實際でせうか？』とレオナルドは驚いて言つた。『私は左樣に考へたくはありません。私は政治家ではないのです、盲人のやうに唯順ふだけです。』

兩人は默々として目を見合はせた。そして各自の差違を認めた。一人は國のない人と言つて差支なく、一人はケーザルの言つたやうに《自分の魂以上》に鄕國を愛する人であつた。

十三

其の夜ニッコロー氏は用向き、行先きを告げずブラリと出て行つたが、翌日寒さに凍え身體疲勞してレオナルドの部屋に入り來り、扉に閂を懸けてから、偖て或る大秘密の件をあなたに打ち明けたいのですがと言つて其の話を始めた。

それは今より三年前の冬の一夜、ロマーニャのチェルヴィアとチェセナチコとの間、即ち人里離れた寂しい邊陬を一隊の騎兵が夫人ドロテアと其の姪マリアとを警護して通過した事があつた。夫人はヴェニス大統領の歩兵軍長バッチスタ・カラッチオロの妻、マリアはヴルビノ尼院の新發意で當年十五歳、共にウルビノからヴェニスへ行く途中であつた。然るに其の時不意に武器を帶び假面を被れる騎馬兵が此の一行を襲うて夫人と尼とを馬に載せ、何處ともなく奪ひ去つてそれ切り二人の消息は聞えなかつた。ヴェニスの内閣と議會は隊長の一身に加へられた暴行は則ち内閣と議會とに加へられたに等しいと考へて西班牙王ルヰ十二世と法王とに上書し、强

奪した者はロマーニャ公に外ならぬとケーザルに罪を歸したが、併し其の證據を掴んでゐる譯ではなかつた。斯くと聞いた公は空嘯いて、女に不足するケーザルではなし、何の必要あつて道に要して盗まうかと、せせら笑つた。然かも噂は益々弘まつて、夫人ドロテアは直ぐに諦めを附けて夫の事を忘れてしまひ、今では公のあらゆる征旅に隨行して居ると傳へられた。

然るに小尼マリアの兄にヂオニヂと云つてフロレンスに仕へてゐた若い將校がゐた。彼は右の事變をフロレンスの大統領に訴へたが、併し大統領の告訴はヴェニスのそれと同樣何等の効果を見なかつたので、ヂオニヂはそれでも自分の力一つで事を行はふと決心し、名を改めた上ケーザル公に接近して信任を得、終にチェセナ城の牢に入るを許されて其處に妹を見出し、これを少年に扮せしめて共々逃亡した。併しペルヂアの國境で追手に掛りヂオニヂは斬殺されマリアは拉して元の牢屋へ打ち込まれた。

そしてフロレンス共和國の秘書たるマキャヴェルリは勿論此の事件に關與してゐた。彼はヂオニヂと善かつたので、妹を救ひ出す謀の外に、妹が禍を得るに至つた詳細の事、並に妹は奇蹟を行ふ名譽ある聖徒で、シエナの聖カテリーナと等しく聖痕を有せる事などを此の兄から聞いてゐた。

ケーザルは軍長の夫人ドロテアに飽きが來てマリアに目を附け始めた。そして自分は從來あらゆる女――最も强情な女に對してさへ何等の困難を覺えなかつたから此の少女の如きは容易に我が物になる事と信じてゐたのに、其の目算は外れて少女の抵抗に遭ひ、公はそれに打ち勝つ事ができなかつた。そして此の頃公は絶えず牢を訪ねて、長い間マリアと二人限りでゐると噂されたが、併し如何なる事が此の間に行はれるのかそれを知る人はなかつた。

マキャヴェルリは此の話を終へたとき斷然マリアを救ひ取る決心を顏に現した。

『レオナルドさん、若しあなたが私の擧に贊成なすつて助力して下さる積りなら私は巧く事を計つて此の企てにあなたが加擔してゐなさると云ふ事を何人にも知れないやうに致しますが――それでマリアはサン・ミケレ城に監禁されてゐますから、城の内部の模樣、間取りの具合ひをあなたに報告して貰ひたいのです。あなたは内匠頭ですから容易に城内へ這入つて私の要する一切の事を發見できる筈です。』

レオナルドはこれに答へんともせず驚いて相手の顏を眺めた、するとニッコロー氏は稍怒りを含みながら强ひて笑つて言つた。

『レオナルドさん、マキャヴェルリは餘り情に脆い奴だ、餘り武俠的の情け心があり過ぎると

あなたに考へて貰ひたくはありませんな。ケーザルが此の少女を口説き落すと否とは私に取つては何でもありません。それでは何故私が此の事件に關與するのか？其の理由の第一は私のやうな者でも與太ばかりやつちやゐない、何かの役に立つ男だといふ事を大統領に示したいからです、そして第二は――これは主眼ですが、詰り私は興味を有ちたいからです。人間と云ふものは馬鹿を演らないでゐると無聊に苦しむために頓智が亡くなつてしまひます。私は饒舌に飽きました。賭博、女郎買にも飽きたしフロレンスの羊業商達に報告書を作るのも厭やで耐りません。其處で以て此の冒險を計畫するに至つた譯ですが、これは口の先だけではないのです、私は斷じて實行します。此の機會をムザ〳〵逸してはなりません。そして計畫の準備はすつかり出來てゐます。必要な警戒も致しました。』

彼は自分を辯明するやうに慌てゝこれだけの事を言つたが、然かも彼は純なる深切を打ち明けるのを差ぢて此くの如く皮肉の假面の下にそれを押し隱してゐるのだとレオナルドは悟つた。

『マキャヴェルリさん、此の事件に就いては私をあなた同樣に信賴して下さい。但し萬一失敗すればあなたの責任を私にも分けて下さる條件で……』

と聞いたニッコロー氏は太だ感動してレオナルドの手を握つた、そして直ちに右の計畫に着手する事になつた。レオナルドはこれが果して實行できるか何うかを心の中で疑つてゐたけれども敢て善いとも惡るいとも批評は挿まなかつた。女囚の救ひ出しは十二月三十日と定まつた。

ところが事を擧げる二日前にニッコロー氏が賄賂を遣つてゐた牢番の一人がアタフタ駈けて來て、陛下はすつかり計畫を嗅ぎ附けなすつたと注進した。併し本人のマキャヴェルリが不在のためレオナルドは此の報道を齎して彼を搜し廻るうち遂に或る酒屋にゐるのを見付けた。酒屋には賭博師の一團就中西班牙の兵士が陣取つて賽やカルタでいかさま博奕を打ち素人連から捲き上げてゐた。そしてフロレンスの秘書は陽氣な放蕩少年の一群に取り卷かれて、ペトラルカの（ラウラ）に與た有名な小曲の

吾は彼女の心の深く傷けるを見ぬ。

といふ結末の句を說明して、各行毎に何か知ら猥褻な喩へを持ち出して聽衆をゲラ〳〵笑はしてゐた。

と、不意にマキャヴェルリの隣室にワッといふ音が起つて、女供は泣き叫び、卓子は引つくり返

され、劍を拔いて打ち合ひ、德利の缺片や錢が壁と牀とに投げ附けられた。これは博奕打ちの一人が相手のいかさまを看破したからで、ニッコロー氏の聽衆は喧嘩に加はるため隣室へ駈け附けた。そこでレオナルドは牢番の知らせを氏に囁いて共に家に歸つた。

夜は森として星が輝いてゐた。新に積つた雪は足の下でザク〳〵音がする。窒息するやうに苦しい酒屋にゐた身には夜の空氣の匂ひが快く感じられた。ニッコロー氏はマリアを救ひ出す兩人の計畫が公の知る處となつたと聞いたとき案外平氣で、目下の場合たとひ公の耳に這入つたにもせよ慌てるには及びませぬと答へた。そして口達者に自分の行爲の辯解を試みた。

『私があの下等な西班牙人を相手にして馬鹿騷ぎをやつてゐましたから定めしあなたは驚いたでせう。だつてレオナルドさん、あれ位の事は構はないぢやないですか。あれも實は必要の法則から起つた事です。必要は跳躍します、必要は舞踏します、必要は歌ひます。成程彼等は無賴の徒でせうがそれでもフロレンスのメヂチよりは優つてゐますからな。』

斯う言つた言葉の中には痛く悲哀に惱み自己を非難してゐる事が分つたのでレオナルドはこれを聞くに堪へなかつた。

『それを私に言ふのは間違ひです。私はあなたの友人で、世間並みの判斷をあなたに加へるものではありません。』

マキャヴェルリはあらぬ方を向いて低聲で答へた。

『それは私だつて知つてゐますとも。何うかレオナルドさん、私を殘酷に判斷しないで下さい。折々私は詼諧を弄したり笑つたりしますが、あれは皆な心が悲しくなつて泣きたくなるのを紛らすためなのです。併しそれが私の運命でせうね、詰り生れた時の星廻りが惡るかつたのです。何等智能のない私の同僚は萬事に成功して、名譽ある生活、奢侈な暮らしをして權力と富とを得てゐるのに、私といへば毎時も彼等の後塵を拜して、あの愚昧の奴らのために除け物にされるのです。一體、奴等は私を幇間か何ぞのやうに思つてゐます。成程私は幇間かも知れませんが、併し私は決して多大の勞力に怯む者ではありません、危險を恐れる者でもありません、唯私の堪へられないのは僅かばかりの金のために毎時もビク〳〵して月々の收入と出費とをうまく合はして行く事の出來ない事と、それに毎日々々私より劣る奴等が失敬な無禮を私に加へるのを凝と我慢する事と、此の二つが何よりも辛らいのです。私は實に詛はれた生涯ではありませんか。若し神が救ひに來なければ私は私の仕事、私のマリエッタ私の息子は斷然捨てます。私の妻に取つて又世人に取つて私は厄介物でなくて何でせう！然うです、構ひませんと

も、何とでも考へるが好いです、私を死んだ者だと思つて呉れゝば好いです。然うすると私は遠い〳〵小さな村へ隱れます、誰も私を知らない地球の或る隅つこに隱れます、そして官吏の書記になるか、でなければ村夫子になつてイロハを敎へます。そんな事でもして居れば私の五感が利く限り恐らく餓死はすまい。本統にレオナルドさん、事を成す力が自分にあると知りながら、然かも自分は何一つ成就せずに此の世を終るのだと思ふくらゐ恐ろしい事はありますまい。』

十三

冒險の日が近づくに從つてレオナルドは注意して見てゐると、マキャヴェルリは成功疑ひなしと信じてゐる癖に動もすれば冷靜を失して過度に警戒したり時には又餘り噪急に失する事もあつた。併しレオナルドに此の心理狀態は能分つてゐた。これは臆病乃至小膽のためではなく意思の叛逆即ち實行よりも思惟の人として造られた者に固有なる先天的不決斷のためであつて、將に一擊を加へんとする刹那卒然として到來するものであつた。

愈々快擧の日の前夜、ニッコロー氏は最後の準備を整へるためサン・ミケレの城塔の附近にある或る小さな家に行くし、レオナルドは又翌朝早く其處へ行く筈になつてゐた。そして自分獨りになつた時レオナルドは今にも凶報がマキャヴェルリから來るやうに思はれて、此の事件は學童の惡戲と同じて、九分九厘までは馬鹿な失敗に終るに相違ないと見極めてゐた。

そして懶い冬の夜が明けて、これから出掛けようとしてゐるとき思ひ掛けなくマキャヴェルリが歸つて來た。青醒めた顏色は悲しみに沈んで半ば失神したやうに椅子にドッカと掛け、『駄目です！』と簡短と言ひ放つた。

『多分然うだと思つてゐました！到底失敗は免れないと思つてゐたのです』とレオナルドは叫んだ。

『失敗したのぢやありません、時期が後れたのです。鳥は逃げました。』

『逃げた？何うして。』

『今朝夜明け前にマリアは牢屋の牀の上で喉を突いてゐたと言ふ事です。』

『其の加害者は多分……』

『否、加害者は何者だか分りません。ケーザル公ではないのです。ケーザルにしろ死刑手にしろ、あんな不間はやりませんからな。何しろ可哀さうに滅多斬りにされたのです。噂では死

骸は未だ淨い處女であつたといふ事です。私の考へではマリアは自分で自ら……』

『そんな事はありません！それは何ぼ何でもしなかつたでせう。マリアは聖徒ですもの……』

『否、何だつてしようと思へば出來ない事はありません。あなたは未だあの手合は何んな性質の者であるか御存じないのです。そしてあの不名譽な殺人犯――然うですあの不名譽な殺人犯は斷じて何んな事でも行るのです！聖徒が自殺するやうに仕向ける事も出來るのです。マリアが未だ死ぬ前、そんなに嚴重な見張りの附いてゐない時分私は顏を見た事が二度ありました。纖弱な體で、小兒のやうに邪氣ない顏をして、嵩の少い髮の毛が薄い金色を呈せる容子はバチアにあるリッポ・リッピの聖母を見るやうでした。レオナルドさん、あの少女は何んなに可愛らしかつたか、何んなにかよはい娘だつたか兎てもあなたに想像は附きまん。』

彼は涙で睫毛を濕して横を向いたが、併し力ある尖つた聲で言ひ續けた――

『だからち眞に尊敬に値する人は此の宮廷では揚鍋の中にゐる魚のやうだと始終私は言つてゐるのです。そんな例は最う澤山です。私は奴隷になるために出來てはゐないから是非大官に然う言つて他へ轉職させて貰ひます。實際斯んな處にゐたくはありませんからな。』

レオナルドは心の底からマリアを憐れに思つて、彼女のためならば極力努める積りでゐたが、事茲に至つては斷乎たる行動を取る必要がなくなつて、自分も將たマキャヴェルリもこれで安心出來るのであつた。

十四

ケーザルの率ゐる軍の大部分は十二月三十日の昧爽にファーノを進發してシニガーリャの郊外に陣營を張り、公は翌日（即ち星占師が勸めた日）其處へ行く事になつてゐた。元來シニガーリャを包圍した者はムヂョーネの同盟諸將で、彼等は曩にケーザルと和睦して今は公のために働いてゐるのであつた。シニガーリャ市は降服を誓つたが併し城の司令官はケーザル自身が來なければ城門は明けられないと言つて肯かないので、偖てこそ公は親しく出馬する旨を傳へ且つ軍兵をメタウロ河の岸に駐めるゆゑ軍事會議を其處で開くから來つて會合して呉れと叛將連を請待した。以前の敵今は同盟者たる此の人達は恐らく身に禍難の及ばん事を慮つて公との會見を謝絶しようとしたが、併し公は後にマキャヴェルリが記したる如く（亞非利加の沙漠に住む怪物が好調の歌曲を以て巧みに餌食を引き寄せるやうに彼等諸將を魅し去つて）安心せしめた。

マキャヴェルリは公と共にファーノを去るし、レオナルドは數時間後れて其の行を追うた。

道は濱傳へに南の方を指して右手の山々は海岸に逼つて截立つやうに聳え、其の裾では狹い道路すら通じ難い程であつた。此の日は空も海も灰色に曇つて甚だ穩に睡げなる空や鳥の囀り、雪の面に見える黑い斑點と孔竅、これらは凡て雪が融ける前兆を示してゐた。

やがてシニガーリャの煉瓦塔が見え始めた。市はアドリアの海岸を隔つる事一哩弱、然かもアペナイン山の麓から弩を射る距離すらない。即ち海と山とに挾まれて宛ら罠のやうな地形であつた。道は小流ミサに會して急に左折し、其處に斜に架せる橋の後、即ち低き建物の並べる廣小路を横切つて、市の門は嚴しく立つてゐた。右の建物といふのは主としてヴェニスの商人の有に係る倉庫であつて、當時シニガーリャは半ば東歐方面の大互市場たる觀を呈し、伊太利の商人は此處で土耳古、アルメニヤ、波斯の人々並びにモンテネグロ、アルバニヤのスラヴ族と商品を交換するのであつた。然かもレオナルドが到着した時は最も繁華な町すら洞然として、途で逢ふ人と言へば獨り軍人のみで、往來の兩側に單調に擴がれる其處此處の長き拱廊、店舗、倉庫には掠奪の痕が見えて、硝子は毀れ、錠前は扭ぢ切れ、門や門の鎖は割き斷たれ、扉は明け放した儘、商品や荷物の梱は無殘にも表に曝され、木なくさい匂ひが鼻を衝き上げて、半燒けの家々は今尙ほ煙を吐き、幾多の死骸は宮殿の隅の鐵のランプ柱にブラ下がつてゐた。

宮殿近くの大きな廣場にレオナルドが來たとき日は暮れかゝつてゐた。廣場ではケーザル公が親衞軍と共に陣取つて、市街を掠奪した兵士を罰し、アガピトをして其の宣告を讀ませ、公親らは合圖を與へて處罰兵を刑場に引かしめた。其の時レオナルドの傍へマキャヴェルリが來て、

『で、あなたはあの事を何う思ひます？若し實際お聞きになつたのなら……』と熱心に言つた。

そしてレオナルドを伴つて隣りの往來に出て、其處から雪の堆い狹い小路を通り抜けて寂しい海岸にある般大工の後家の家に這入つた。これは崩れかゝつた破家であるが、マキャヴェルリは市中を隈なく歩き廻つて宿るべき家を搜した擧句、僅に此の家に小さな空き間が二つある事を見附けてこれを借り入れて、一つをレオナルド、一つを自分が占める事とした。そして今此家へ這入るなり蠟燭に點火して、ポケットから酒の壜を取り出し壁に叩き附けて其の口を折つてレオナルドに對して坐し、目を光らせて相手の顏を見詰めた。

『それでは未だお聞きになりませんか？』と頗る重々しい口調で言つた。『實に稀代なそし

て記憶すべき事が起つたのです。ケーザルは敵に復讐しました。一味の叛將は捕へられたのです。オリヴェロット、オルシニ、ヴィテルリの三人は死刑を待つてゐるのです。』

そして椅子に背を投げて、レオナルドの驚く樣を興味あり氣に眺めたのち、强ひて熱奮を抑へ、平靜たらん事を努めて、公がシニガーリャで陷穽を作つた話をした。

ケーザルは朝早くメタウロ河畔の軍營に着して、騎兵の中より二百を割いて前進を命じ、別に步兵を動かして親らは殘りて騎兵を率ゐて其の後から行つた。公は連盟の諸將が必ず會見に來る事を知り且つ彼等は市を繞れる諸處の要塞に兵を分派して新に到着するローニャ軍のために餘地を作る事を知つて、門外の路が彎曲してミサの河岸に聯れるを幸ひ、公は騎兵を二列に組みて步兵が通るだけの隙間を列の間に明けたので、步兵は停步せずして橋を渡り、市の門に這入つて行つた。

そして聯合軍のオルシニ、グラヴィナ、ヴィテルロッツォは公に見えるため僅少の騎馬兵を從へて馬を進めて來た。ヴィテルロッツォは禍身に振り懸るのを蟲が知らせるのか非常に陰氣臭く且つ薄ぼんやりしてゐるので、平生此の人のハキ〳〵しないのを熟知せる人達すら驚いた程であり、且つ宛ら死に行く者のやうに妻子と訣別した事さへ分つてゐた。三將は馬を降りて公に敬禮すると公も又馬を降りて一々握手を交しながら抱いて接吻して彼等を予の親愛なる諸兄と呼び、過分の儀禮を示したばかりか、公の諸將も豫め謀つて置いた手順に從つて三將を取り卷いて夫々會釋したので、各將はケーザル幕下の士の一團宛の中心になつた。公はオリヴェロットの來ない事を見て部下の將軍ドン・ミケレ・コレルラに或る合圖を與へた。忽ちコレルラは馬を馳せて行つて見るとオリヴェロットは軍隊と共にゐたので、これをケーザルの前に引くため巧に口實を作つて途々睦まじ氣に軍事並びに將來の兵法に關する話を語りながら、轡を並べて宮殿まで來た。宮殿は丁度要塞の前面に位してゐた。

そして宮殿の玄關で四將は退き下らうとしたが、公は相變らず鄭重を盡して宮殿の中に請じた。

そして取つ附きの室に足を入れるか入れぬに扉は締まつて武裝の兵士がバラ〳〵と競ひ懸り刀を奪つて縛り上げた。餘りの事に四人の者は呆然として手向ひさへしない程であつた。そして公は今夜直ちにこれらの囚人を宮殿內の寂しい場所で絞殺して、安心の息を吐く積りであつた。

『本統にレオナルドさん、公が彼等を抱擁して接吻した模樣をあなたに見せたかつたです。

これつぱしも不信な容子は見えず、あの態度ではそれと感附けるものでもなし、胸中の密計は實際露程も見透されませんでした。あの聲と云ひ顏の容子と云ひ、腹の眞底から來るとしか思はれませんもの、あんな事があるとは最後の瞬間になるまで分る筈もないし、それに公が芝居を演つてゐるとは何うしても思へなかつたのです。何しろ政治始まつて以來、確にあれは計略中の白眉なるものでせうな。』

レオナルドは微笑した。

『疑ひもなく陛下は大膽と狡計とを示したでせうが、それにしても何故あなたがそんなに騙し討ちを感心なさるのか私には分りませんが。』

『騙し討ちですつて？ 然うぢやありませんよ、レオナルドさん。既に國を救ふのが問題ですもの、騙し討ちだの忠義だの、善だの惡だの、寛仁だの暴虐だの、そんな事は一切論題外です。何んな手段にしろ皆同一ですからな――目的を達しさへすれば。』

『併し唯今のお話は陛下が國を救ふといふ問題になりませうか？ 公は單に自利を計つてゐるとしか考へられませんが。』

『これはしたり、あなたさへ分らないのですか？ お聞きなさい、ケーザルは驕て統一さるべき伊太利の獨裁君主ですぞ。凡そ今の時くらゐ英雄の出現に好都合な事は未だ曾てありません。若しイスラエルにしてモーゼスを起たしめんがために奴隷になり、若し波斯にしてサイラスを稱揚せんがためにメヂア人の軛の下に横はり、雅典にして獨りテセウスに永遠の譽れを得しめんために殺戮を演じたものとすれば、目下の伊太利は新に英傑を起たしめて自國の救世主たらしめんために、奴隷となり、恥じめられ、繫縛せられ、散り〳〵ばら〳〵になつて、元首なく領袖なく指揮者なきに至つて荒廢され、蹂躙され、一國民として耐へ得る限りの悲哀を荷つて粉微塵になる事は大に必要です。これまで屢々此の人こそは我が伊太利の運命を雙肩に荷ふ人だと輕信した人物が出現したが、然も何等大事業を果さずに空しく死んで行きました。レオナルドさん、半死同樣の伊太利は息も絶々になつてゐますが、今尙は救ひ呉れる人を待つてゐるのです。疵を癒して呉れて、ロンバルヂーの無秩序、タスカニーの掠奪、ネープルスの强奪殺人を禁ずる救ひ手を待つてゐるのです。伊太利は救世主を送つて下さるやうにと日夜泣いて神に祈つてゐるのです！』

彼の聲には張り詰めた絃の如き響きがあつた。以上言ひ終ると同時に顏色靑醒めて身體を震はせ、目はキラ〳〵光つた。其の興奮の狀態は癲癇に似て何となく力なき痙攣に類せるものが

あつた。

マキャヴェルリが先日マリアの自殺の事を語つたとき、ケーザル公を稱して罪惡で固まつた怪物だと言つた事をレオナルドは思ひ出したが、併し此の人が折角人を稱揚して柔に溫みある氣分になつてゐるのに、若し今言つた言葉の無定見を指摘すると其の好い心が消え去るだらうと恐れた。

『命長ければ見聞多しですな、ニッコローさん。併し私に一つ質問をさせて下さい。何故ケーザル公が伊太利を救ふための神聖な選人であると今日に限つて保證なさるのです？シニガーリャでそんな詭計を行つたからそれで公の剛勇が證明されたと仰有るのですか？』

『然うです』とマキャヴェルリは偏頗のない顏色に復して答へた、『公の殘虐な行爲に就いて見るに種々の偉大な性質とそれに反對の性質とを實に珍らしいくらゐ併有してゐる事が分ります。私は非難するのでもなければ稱揚するのでもありません、單に吟味するに止るのです。唯今話した事柄に關して私は下の如く推理する者です。それは特殊の目的に達する人の行くべき道は二つある――第一は法律、第二は暴虐です。苟も統治せんと欲する人は必ず以上二つの道を歩む必要があります。如何にすれば獸となるか、如何にすれば人となるか、それを知る事が肝要です。半人半馬のカイロンに養育されたアキルレス並びに其の他の英雄に關する古代傳說の內部の意味は即ち此の事を寓してゐるのです。元來人類の大部分は自由の重みに堪へる者ではありません。彼等が自由を恐れる事は死以上です。一つの罪を犯すと直ぐ樣それを後悔して意氣地なくなつてしまひます。ところが英雄即ち運命の人のみは自由を支へる力を有すると同時に法網を破つて敢て恐怖は致しません、悔いもしません、惡を行つて惡たるを知らぬ事は恰ど獸や神が然うであると同じです。私は今日初めてケーザルが神に選ばれた人である確證を見たのです！』

『成程々々、それで分りました』とレオナルドは沈んだ聲で言つた。『併し私は斯う考へます、ケーザルのやうに無知無愛であるが故に敢て一切の事を行つて憚らぬ人を自由とは言へないと。一切をなすと同時に一切を知り且つ一切を愛する人でなければ自由の人とは言へません。そして此の意味の自由によつて人は善惡に勝ち、高山と深淵、地球の境界、地球の障碍、地球の重荷に勝つのです。其の人は神のやうになつてそして飛行するのです。』

『飛行する？』とマキャヴェルリは訝しさうに言つた。

『然うです。完全な知識を有するやうになれば翼が出來るのです。實際此の事に就いて私は

思ひを潜めてゐるのですが、恐らく收穫は私には六づかしいでせうが併しそんな事は意に介しません、私でなければ他人であるまでの事ですから。翼を有する日はやがて來るのです。』

『宜しい、私らは互に祝しませう。此の談話は一個の新創作物に導きました――私の君主即ち半神半獸の人にあなたは翼を與へて下さつた。』

此の時附近の塔の時計が鳴つた。ニッコロー氏は宮殿へ行つて四將の身の上に迫れる死刑に就いて學ぶため急いで外へ出て行つた。

マンツァ・侯の妃イサベルラ・ゴンツァガは公に祝賀の印としてカルニヴァル祭の贈品即ち色絹製の美しい假面百個を贈つた。

十五

千五百三年の三月上旬ケーザルは羅馬に歸つた。法王は(羅馬敎會のために戰ふ勇士)に與へ得べき最高の名譽たる黃金薔薇を公に下賜して功勞に酬いては如何と提議して樞機官の同意を得、二日の後に其の式を擧げた。當日は法王を初めとして列强から駐劄せる使節はベルヴェデレの內庭を見晴らし得る法王の間に集まつた。法王アレキサンダー六世は七十の老齡ながら身體肥滿して甚だ矍鑠、威風堂々として三重の法冠を戴き、寶石を鏤める外衣を着し、駝鳥の扇で頭を煽がしめて玉座に着いた。

すると喇叭の嘹喨たる音が起つて、式部長官ヨハン・ブルックハルトの合圖によりロマーニャ公ケーザルの扈從、傳令使、親衞兵、甲冑持ちが靜々と式場に繰り込んだ。此の一團を率ゐたる司令官バルトロメオ・カプラニカは羅馬敎會旗手の劒を拔身のまゝ捧持してゐた。此の劒は金色燦爛として精巧な意匠を凝らしたもので、其の第一の模樣は女神(忠誠)が椅子に坐して、忠誠は劍甲よりも强しとの銘があり、第二は戰勝車に乘りたるシーザーの圖で、銘はシーザーか然らずんば無とあつた。第三はルビコン通過の圖で、賽は投ぜられたりといふ銘があり、最後のはボルヂア家の紋章たる牡牛に贄を捧げる圖で、裸體の尼僧が一人の人間を犧牲として捧げて香を薰らし、畫中の神壇に、(最善最大の犧牲たる神に)といふ銘と、並びに其の下に(ケーザルの名に於ける兆)といふ銘があつた。苟も獸に對して人間の贄を捧げるのは恐怖すべき事であるのに、抑々此の畫と此の銘とはケーザルが兄を殺して敎會旗手の此の劍を橫領なさんと目論見てゐる最中に彫らせた物であるから更に恐怖すべき事實が蚤つてゐると見るべきである。

軈て當の主人公たるケーザルは己が官職の權標を從者に持たせて式場に這入つた。公の頭

に戴ける高い帝冠には聖なる鴿の形が眞珠で鏤めてあつた。ケーザルは法王に近づいて冠を脱ぎて跪き、法王の靴に嵌めてあるルビーの十字架に接吻した。すると樞機官モンレアレは黄金薔薇を法王の手に渡した。此の薔薇は驚駭すべき寶石師の技術を示せるもので、細き金線細工の下に埋めてある硝子壜から夥しく薔薇の香氣を發してゐた。法王は玉座から起ち上つて、感動の餘り聲を顫はせつゝ次のやうに言つた——

『最愛の子、汝これを享けよ。これは天と地即ち二つのエルサレムの象、戰ひの教會と勝利の教會との象であるぞ。此の朽ちざる花は聖徒の喜び又不朽の法冠の美であるぞ。基督に於ける汝の徳ある花——多くの海の岸に咲く汝の花は願はくは此の薔薇の如くであれ。アーメン。』

ケーザルは其の不思議な花を父の手から受けた。

老齢の法王は感極まつて最早や座に耐へないのを見て、薄野呂の獨逸人にして式部長官たるブルックハルトは忌々し氣な顔をした。蓋し法王は豫定の式の順序を滅茶々々にして、我が子ケーザルにのし懸るやうにして、打慄ふ兩手を差伸べ、顔を蹙め肩を震はせて呟くやうに言つた。

『ケーザル、ケーザル！お丶子息よ！』

公は黄金薔薇をサン・クレメンテの樞機官に渡した。法王は今は狂氣の如く喜んでケーザルを搔き抱き、泣いたり笑つたりした。

再び喇叭の音が響くと同時に聖彼得寺の鐘が鳴つた。すると忽ち羅馬にありとあらゆる教會の鐘が鳴り且つ砲兵が一齊に祝砲を放つてこれに和し、ベルヴェデレの内庭ではロマーニャの親衛軍がケーザル萬歳！ケーザル萬歳！と叫んだ。

公は露臺に現れて親衛軍に會釋した。青き空、輝々たる朝日の下に、金色紫色の衣を着て、聖靈の標象たる鴿の冠を戴き、手に不思議なる薔薇を携へる公は民衆の目に人ではなく神として映じた。

十六

其の夜堂々たる假面行列の催しがあつた。行列の仕組みはヴァランチノア並びにロマーニャ公たるケーザルの劍に彫つてあるチュリアス・シーザー凱旋の圖に則り、公は（神聖なるケーザル）と記せる戰車に乘つて頭に桂冠を戴き、手に勝利の象たる棕櫚の枝を携へ、古代羅馬兵に扮装せる兵士は鷲と投箭とを持つて戰車を取り卷いた。書籍並びに記念物、鑄牌の圖面に見る通り

に模して一毫の微と雖も古式に相違した處がなかつた。

戰車の先には埃及の祭司が着る白衣の長袍を纏へる人が立つて紫と金とを交へたるボルヂア家の牡牛の旛旗を持つてゐた。牛は即ちアレキサンダー六世の守護神たる血醒いアピスで、銀衣の少年達は羯鼓に合はせて、牡牛萬歳！牡牛萬歳！ボルヂア萬歳！と歌つた。

そして其の獸の像は群衆の頭上高く搖らぐ松明の光に照らされて宛ら朝日のやうにキラ〳〵と赤く動いた。

群衆の中にはレオナルドの弟子ヂョーヴァンニ・ボルトラフィオがゐた。彼は新にフロレンスから羅馬へ來たのであるが、紫衣の獸を見て默示錄中の語を聯想せざるを得なかつた——

『又その獸を拜し曰けるは誰か此獸の如き者あらんや誰か之と戰をなし得るもの有ん乎。』

『われ絳色の獸に乘る婦を見たり、此獸あまねく體に僭忘の名あり又七の首と十の角あり……その額に名を書せり云く奥義大なるバビロン、地の淫婦と憎むべき者との母。』

バトモスの預言者と同じくヂョーヴァンニはこれを見て（深く怪しみ驚いた）のであつた。

十三の卷　紫衣の獸——千五百三年

底なき坑より上る獸——約翰默示錄第十一章七節

一

フィエソレにあるレオナルドの葡萄畠の少部分をば、これに隣れる地の所有主たる百姓が頻に垂涎して、法庭に持出して我が物にして見せると嚇したので、レオナルドはこれに關する事を一切ヂョーヴァンニ・ボルトラフィオに託したが、今や親しく逢つて話したい事が出來したので此の弟子を羅馬へ呼び寄せたのであつた。そしてヂョーヴァンニは途すがらオヴィエトに立ち寄つて其の寺の新に建つた禮拜堂にルカ・シニョレルリが此の頃描いた有名な壁畫を見たが、其の中の一つに非基督の出現を示してあつた。

神の敵なるサタンの容貌から多大の印象をヂョーヴァンニは得た。蓋し其の顏は邪惡なくして

唯無限の憂愁を湛へ、明眸は煩悶のやさしさを宿して神を棄絶したる知慧の悔恨を其の中に映じ、耳は半人半羊のサチルに似、指は動物の爪に類似せるにも拘らず容貌は美しかつた。ヂョーヴァンニは精神錯亂の際に屢々見るやうに、今も此の顏の背後に更にこれと相肖て然も神々しい顏があるやうに思つたが、併しそれをきつぱり認めた譯ではなかつた。

此の畫の左方に非基督が墜落する模樣が描いてあつた。彼は目に見えざる翼で天に翔り雲に乘つて來る人の子の人格を佯り裝ふて生命ある者と死したる者とに對して審判せんとした時、天使長に追ひ捲られて地獄の坑の中へ逆落しに墜ちてゐるのであつた。斯くの如き人間の翼、飛翔の失敗の圖を見て、ヂョーヴァンニは嘗て師匠レオナルドを恐ろしく疑つてゐた事を思ひ出した。

彼が壁畫を眺めてゐたとき同じくこれを見てゐた二人の人がゐたが、其の一人は頑固な身體の法師、今一人は痩せてひよろ長く、幾つ位になるのか薩張り見當の附かぬ男、其の顏は飢ゑて尖り、中世の雲水がゴリヤルドと名けた僧服を着てゐた。ヂョーヴァンニは此の兩人と親しくなつて道を共にするやうになつた。法師はトマソ・シュヴァイニッツといふ獨逸人で、ニューレンベルグにある某オーガスチン派の僧院に圖書係を奉せる者、今回寺錄に關する係爭のため羅馬に上つたのであつた。他の一人もザルツブルグ生れの獨逸人で、名をハンス・ブラッテルと云ひ、シュヴァイニッツの秘書と童坊と馬丁とを兼ねてゐた。旅行の途々三人は敎會に就いて議論を鬪はした。シュヴァイニッツは慌てず騷がず學理上の明智から推論して、法王の權威の安泰無事を說く者の如何に愚昧なるかを指摘し、且つ獨逸は今後二十年を出でずして羅馬敎會てふ堪ふべからざる軛より脫するであらうと預言した。

ヂョーヴァンニは此のニューレンベルグの法師の丸々と太つた顏を眺めて腹の中で思つた。『此の人は自己の信條のために生命を賭するやうな人ではない。サヴォナロオラとは違つて火に面を向けないのだ、併し事に依つたら寧ろ此の人の方が敎會の危險人物かも知れぬ。』

羅馬に到着して間もないこと、或る夜ヂョーヴァンニは聖彼得の廣場で僕僧ハンス・ブラッテルと出合つた。ブラッテルは早速ヂョーヴァンニを誘つて外國人經營の酒屋が澤山あるシニバルヂ小路へ這入つて、銀の猫の看板を懸けてある小さな酒店を潛つた。此の店の主人ヤーン・フロミーはボヘミヤの宗敎改革家たるヨハン・フッスの異端說を信じ且つフッスと同じチェック人で、自由思想家、乃至羅馬天主敎に敵する人々（斯の種の新人は日々增加して敎會大改革のために道を拓いてゐた）に美酒を振舞ふのであつた。

そして特殊の人に限つて這入るべき奥の部屋には此の時可なり多勢の人が卓を圍んでゐた。上座に坐れるは例のシュヴァイニッツで、酒樽に凭り掛つて、肥えた兩手を腹の上に載せ、鉢切れさうな顏は少しく間抜けて見え、疑ひもなく既に夥か飲んでゐた。そして時々盃を蠟燭と同じ高さに上げて其の焰で透しながら、ライン酒の稍薄白き黃金色を歎賞した。

一方では氣性の荒々しい小柄な僧マルチノは羅馬教會の誅求を痛罵して頻に憤怒の氣焰を吐き散らしてゐる。

『此處の坊主共の手に掛るよりも强盜の手に掛つた方が優しぢや！毎日の强奪はあれはまあ何うしたものぢや！樞機官の梵妻は懺悔を聽く坊主に呉れてやれ。書記僧、扈從、門番、馬丁、料理番に呉れてやれ！彼女のために汚れ水を瀉してやる男に呉れてやれ！お、神樣、私達を救して下され！誠に（彼等は新バリサイ人、神を賣る人なれ！）と歌にある通りでござります。』

するとハンス・ブラッテルは座から立ち上り、鹿爪らしい顏で、のろ〳〵と舌鈍く言つた。

『偖て諸君、樞機官一同は打ち連れて主人たる法王の前に出て訊ねるやう、（如何やうに致しますれば私達は救はれませうか？）するとアレキサンダーはこれに答へて（これを予に訊いて何にする。法律には何と書いてあるか――須く黃金白金を愛すべし、汝の心、汝の情、汝の力を捧げて直向きにこれを愛せよ、汝の富める隣人を愛すること猶汝自身を愛する如くせよ――と正に斯くの如く記してあるぢやらう。然れば汝等も偏に此の通りにすれば救はれるのぢや）と言ひ畢つて法王は席に坐しました。そして再び申しました。（夫れ物持ちは福なり、予の顏を拜し得べければなり。獻品する者は福なり、予をして我が子息よと呼ばしむればなり。黃金白金の名に於いて來る者は福なり、羅馬法王は彼等のものなればなり。されど空手にて謁見せんとする者は禍なるかな、寧ろ首の廻りに石臼を縛して海の底に投げ入るゝに若かず。喝。）すると樞機官達は（誠に猊下の御諭旨の通りに我等遵奉致しまする）と答へました。其の時法王は（生ける者、死したる者を予が侵した如く唯今予自ら範例を示して民を侵すに依り、汝等宜しく予に倣へ）。』

此の奇拔な諷刺を聞いて一座の人は大分陽氣になつた。尋いでオルガン教授にして美貌の老人オトー・マルブルクは子供染みた微笑を湛へて一首の罵倒詩を誦した、此の詩は刷り上るなり羅馬市の人々に洩れなく配つたばかりのもので、無名氏からバオロ・サヴェルリと云ふ貴族に送る書翰に擬してあつた。そして右の貴族は有福なため教會から迫害を受けたので羅馬に居堪らず逃げて神聖羅馬皇帝の許へ行つた人であつた。罵倒詩は法王家の罪惡や忌まはしき事共を

長々と列擧し、僧官賣買の非を鳴らし、ケーザルが兄を殺した事と法王が娘と通せる事とを擧げて結びとなし、痛烈に歐羅巴の諸君主に訴へて、殺人者の巢窟、人の形を扮へる醜汚なる爬蟲を討滅するためには先づ連合するの要ありとて、それを慫慂し且つ神の敎會の信仰始まつて以來未だ曾て敵として法王アレキサンダー六世と子息ケーザルの如き極惡無道な奴がゐた事はないから愈々非基督が統治し始めたのだと斷言してあつた。

次いで法王アレキサンダーは果して世にいふ非基督であるか否かに就いて人々の間に議論が起つた。先刻の書翰を讀み上げたオトー・マルブルクはこれを否認して、ケーザルこそは非基督である、彼は疑ひもなくアレキサンダーの後繼者たらん事を志してゐるのだと主張した。すると僧マルチノは別の議論を立て、非基督なる者は實は形のない者である、何故ならアレキサンドリアの聖シリルは《非基督と稱せらるゝ地獄の子は實に惡魔に外ならず》と言つたからであると論じた。

するとトマソ・シュヴァイニッツは頭を振つて、聖ヂョン・クリソストムの語《こは何者なるか、サタンなるか。否らず、サタンの力を承けたる人なり、蓋し彼のうちには人と惡魔との二つあればなり。而して彼は或る處女の腹に宿りて其の子息とならん、而して其の名はアレキサンダーにも非ずケーザルにも非ず》を引き、更にシリアのエフライムの語《惡魔はダン族の處女を誘ひ、其の女娠みて子を生まん》とあるを引用した。

人々は質問して疑惑を散ぜんとてシュヴァイニッツの周圍に群つて來たが、彼は手で默れといふ意を示して、更にサイプラスのヂローム、イレネーウスをはじめ其の他の敎父の語を假り來つて非基督の出現の近き事を語つた。

即ち彼は狼憑きの如き顏であるが、多數の人はこれを基督の顏と見誤るべく、そして彼の力は驚くべきもので、海に命じて靜謐ならしめ、太陽を暗くし、山を動かし、石をパンに變じ、飢ゑたる者に食を與へ、病める者、啞、盲人、蹇を癒す筈であると。

『お丶憎い犬奴！』とマルチノは狂氣のやうになつて拳で卓子を叩いた。『併しトマソさん、其奴を信ずる者はありますまい。赤子でさへ騙されないと私は思ふが。』

『否信じます。多數の者は信ずるでせう』とシュヴァイニッツは首を振つた。『彼は神聖てふ假面を被つて橫道へ外れるやうに人々を嚮導するのぢや。彼は肉體を苦しめ、眞潔な生活をして女人の愛を賤しみ、且つ肉食せず、獨り人間のみならずあらゆる息ある生物の愛を受け、恰度鵠鴣見たやうに奇妙な騷々しい聲で斯う言つて欺きます、《我に來れ、勞働する者、重く荷へる

者は凡て來れ、我れ汝に休息を與へん)。』

其の時ヂョーヴァンニは息を殺すやうにして口を挿んだ。

『それでは誰が其の者を非基督だと看破するのです? 誰が假面を褫ぐのです?』

シュヴァイニッツは穿鑿の目を深くしてヂョーヴァンニを見詰めて下の如く答へた。

『それは人間には不可能です、と言つて神がそれをなさるのでもない。聖徒すら光と闇との區別は出來ますまい。其の時になればありとあらゆる人々は疲れに疲れて劫初以來の大混雜を來します。人々は山に對して(我々の上に落ちて呉れ)と言ふし、丘陵に對して(我々を蔽ふて呉れ)と言つて、將に地上に來らうとする恐怖と哀しみの預期とのために氣絶します。何故なら今は既に天の力が失せてゐるからです。そして正に其の時です、非基督が出現するのは! 彼は最と高き者の殿堂の高御座に坐して、(おゝ信仰なき者よ! 汝等象を乞ふにより今其の象を與へる。我を見よ、此の我は人の子。生ける者、死したる者を裁くために雲に乘つて來たのであるぞ)と宣言して、邪惡な精緻を凝らして作つた大きな翼を身に附け、天使に扮へる弟子の群に取り卷かれて電雷の中に飛翔します。』

これを聞けるヂョーヴァンニの顏は死の如く青醒め、目は恐怖に襲はれながら、ルカ・シニョレルリの壁畫の中にある非基督の着物の廣い襞を思ひ出し、並びにレオナルドが寂莫たるアルバノ山巓の崖緣に立つてゐた時、風が其の肩をバタ〳〵搖ぶつて其處に襞を作つてゐた事を思ひ出した。

丁度其のとき稍大きな部屋から女共の高い笑ひ聲が聞えると同時に彼方此方に走つて椅子を引つくり返し硝子を破る騷々しい音がした。これは餘り眞面目な議論を聞くを避けて此の室へ逃げて來たハンス・ブラッテルが給仕の女共と巫山戲て跳ね廻つてゐるためであつた。そして間もなく彼等は絃に合はせて古い唄を歌つた——

やんれローザは酒屋の娘、
プンと匂ふて縹致好し、
アーヴェ〳〵(南無)を唱へにやならぬ、
やんれ榮ある乙女。

宴の主はお前さん、

先覺

野干の面を被つてなう、
しやんと白醒の曲者ぢや。

私の自慢はお前さん、
羅馬教會何のその、
宴主の酒樽私あ可愛い、
キプロス島のヴィーナスの、
手管や、それにキューピッドの矢、
坊主頭も何のその、
坊主の頭巾何のその、
此の心臓が防がれうか、
唯つた一度の接吻で、
首斬臺に上るとも、
惜しくはあらぬ此の性命。

やんれ御坊よ、此の私を、
酒に飽かして下しやんせ、
否と言ふならお前さん、
袈裟や衣を奪りまする。

何が恐かろ坊さんは、
まこと噂の言ふ通り、
羅馬で金貨をチンチロリン、
音さすだけでお前さん、
掟の方から道避ける。

やんれ羅馬は泥棒の宮よ、
地獄へ至る茨道——

僧正の酒は女のため、
さ、さ、來い阿魔つちよキッスしろ。

イリススの酒神のため、
神を頌めるため、
さ、さ、飲めや〳〵、酒を飲めや。

トマソ・シュヴァイニッツは歌を聞いてゐたが、肥えた彼の顏は此の時齒を露はして福々しく笑つた。

二

レオナルドはヂョーヴァンニを助手として羅馬のサン・スピリト病院で再び解剖學の研究に着手した。併しヂョーヴァンニは兎角元氣を失くするので何か娛しみを與へて氣晴らしをさせようと思つて或る日ヴァチカン宮へ連れて行く事にしたが、これは法王が新大陸に於ける西班牙、葡萄牙の領地の境界を定めるために學者を集めてこれに就いて議論させる筈で、其の決定をするのは敎會の首長たる法王自身が任に當る事になつてゐた。ヂョーヴァンニの好奇心は動いて師匠の誘ひを容れたので、二人はヴァチカン宮へと出掛けた。

そしてアレキサンダー六世が黃金薔薇章をケーザルに授與した法王の間を過ぎて、今はボルヂアの間と呼ばるゝ奥の部屋に通つた。其の迫持、穹窿、アーチとアーチの間の壁の空間を飾れる燦爛たる壁畫はピンツリツキオの筆に成り、題材は新約聖書、聖徒の傳記、異端の神話から採つたもので、例へばオシリスがイシスと結婚式を擧げて、人間に地を耕し果實を採り葡萄を植ゑる事を敎へてから、一旦人間の手に掛かつて殺されたが、再び蘇生した後は地を去つて白牛即ち擬ひもなきアピスとなつて再び現れる處が出てゐた。如何にボルヂア家が紋章なればとて牡牛を神格に陞せて然も基督敎の首長たる法王の部屋に於いてこれを見るのは聊か奇妙ではあるが、然かも生の中に充溢せる悅びは二樣の題目、即ち神聖と褻瀆、基督敎の神秘と異端の神秘、ヂュピターの子とエホヴァの子とを巧みに調和してゐた。そして孰れの畫も筆者の故郷たるウンブリヤ地方の特色を宿して、廣やかな丘陵の間にある細い絲杉は軟風に吹かれて首を曲げ、鳥は愛の新春の戲れをなし、聖エリザベスが聖母を抱いて《御身の胎内の子は祝すべ

き哉）と叫んでゐる傍らに、一人の少年が犬にチン〳〵を敎へてゐるし、オシリス、イシスの結婚の圖では裸體の少年が神聖な鵝鳥に跨つてゐるなど凡そこれに類せる歡びの心は畫中の隨處に現れて、花を飾りて絢爛たる客間にも、香爐と十字架とを所持せる天使にも、酒神の杖と果物の籠とを手に持つて山羊の形せる足で踊れる林野の神にも、朝日の如く輝々として生の悅びを吐き出せる紫衣の神秘な牡牛にも、此の種の氣分は充ち滿ちてゐた。

ヂョーヴァンニは心の中で訊ねて見た。

『これは一體何だらう？ 神を瀆す爲に描いたのか、それとも兒戲に類せる無技巧の遊びか？ あのエリザベスの顏に現れてゐる神聖な感動はイシスの顏のそれと同じであるまいか？ 人の手に掛かつた牡牛が甦つてアピスの形を取り、それが直ちに太陽になつてゐるが、其の太陽を拜せる埃及の僧の顏と、あれ彼處に昇天の主の前に跪いてゐるあの法王の顏と――恍惚として祈念せる此の二つの顏は同じいのであるまいか？ 人々はボルヂア家の紋章たる牡牛、即ち化して黃金の牛となつた神の前で禮拜して贊頌の聖歌を唱へ、其の神壇に香を焚くが、焉ぞ知らん此の神は則ち羅馬法王に外ならないのだ。詩人は諂諛して《大ケーザルあるが故に羅馬は今は大、而して今支配し給ふアレキサンダー六世は神におはす》と歌つて法王を神と呼んでゐるのだ。』

神と獸とが相似て居る事を思ふとヂョーヴァンニは馬鹿らしくもあり又恐ろしくもあつた。そして壁を飾れる立派な畫を打ち眺めながら此の部屋にぎつしり詰まつて法王を待てる高僧や大官達が互に談話してゐるのを聞いた。

『ベルトランド殿、貴殿は此處へ參られる前に何處にゐなすつた？』とフェルララからの大使に訊ねたのは同國の宮廷から來てゐるアルボレア僧正であつた。

『それがしは御本山から參りました。』

『猊下の御模樣は如何でござりましたな？ 矢張り御疲勞の體で？』

『御疲勞どころか見ん事お唄ひになりました。猊下の御音聲は何とはなしに唯最う神さびて天使のやうに莊嚴に聞えましたから、身は天上界にゐるやうに感じました。聖盃をお上げになつた時なぞは何としても涙が零れましてな、はい、これは某のみに限らず澤山そんな人がござりました。』

『ミクェレ僧正の逝去は何の病氣でござりましたらう？』と卒然として佛蘭西大使が訊ねた。

『惡い物を飲んだからでござる』とドン・ファン・ローペスは卒氣なく答へたが、法王宮廷の人達は大抵此のローペスと同じ西班牙人であつた。

『噂に依りますと僧正殿の逝去の翌日、猊下には御悲歎の餘り西班牙大使の謁見をお許しなかつた』とかとベルトランドが言つた。

すると居合はせた人々は互に目を見合はせたが、それも道理、此の談話の中には言外の意味があるからで、法王の悲歎といふのは死んだ僧正の財産が法王の見積りよりも少なかつた事に連關してゐるし、不健全な飲料といふのは法王が飲ませた美味の白い粉の事で、日々ヂリ〳〵と身體を殺して行くのであつた。蓋しアレキサンダーは金を得るために斯くの如き無造作な方法を發明したのであつて、樞機官の收入は知悉せる事とて入用の際は其の中の最も富裕な者をあの世に送つて、該樞機官の遺産は我れ自ら相續すると宣言する事にしてゐた。そして殺す前に其の犧牲をば宴に招いて身體を肥滿せしめるのであつた。獨逸人の式部長官ヨハン・ブルックハルトは法王の日記の高僧逝去を記せる條に(盃より飲めり)といふ深長なる意味の短句を屢追記して居た。

『それで、御坊、あの話は實際でせうか？唯今モンレアレ僧正が病氣といふ話は？』と式部官ドン・ペドロ・カルランカが訊ねた。

『實際左樣な噂がございますか？して病氣は何でございる？』とアルボレア僧正は驚愕して叫んだ。

『吐瀉でござる。』

『やれ〳〵、今度で四人目ぢや』と僧正は歎息した。『オルシニ、フェルラリ、ミクニレ、そして此の度の番はモンレアレぢや！』

『これは必ずチベルの水が各々方に善くないからでござる』とベルトランドは狡しくも誤魔化した。

『一人濟めば又一人！一人濟めば又一人ぢや！』とアルボレア僧正は再び歎息して、『今日は無事息災だが明日は……』

一同は默つた。法王の甥ドン・ロドリグエス・ボルヂアが一團の廷臣を引き具して隣室から此處へ這入つて來た。

『猊下ぢや！猊下の御入來ぢや！』と室内の誰れ彼れは囁いた。

そして人々は距離を作つた。同時に扉が明いて法王アレキサンダー六世は謁見の間に姿を現した。